

韓朋溯源

——吳氏藏韓朋画像石について——

黒田 彰

- 一、変文（賦）と曾我物語、朗詠注
- 二、将門記、海道記
- 三、三国伝記と変文（賦）
- 四、烏鵲歌をめぐる
- 五、無名詩集——変文（賦）の流传
- 六、鴛鴦と鸕鷀——おし つるぎば鴛鴦の劍羽
- 七、和名抄とその箋注

敦煌出土の変文、韓朋賦が曾我物語と深く関わることは、早く昭和三十五（一九六〇）年に早川光三郎氏が指摘されていたが、以後少しずつ研究の進展を見つつも、変文（賦）と軍記物語との関係は、長らく謎のままであった。ところが、世紀の変わる辺りから、前漢に溯る漢簡の発見や、榜題（題記）を伴う画像鏡、画像石の出現が相次ぎ、また、変文（賦）の敦煌に留まらず、中国全土に伝播していたことを示す資料（北戸録、崔龜図注）が報告されるなど、二十一世紀に入ってから韓朋物語をめぐる研究環境は、一変した。

小稿は、そのような文学領域の最新の研究成果を踏まえた新出の吳氏藏韓朋画像石の図像解説を兼ねて、日中における韓朋物語の展開を時間軸として捉え、それを逆に溯る形で、漢代以前に作られたその原姿に迫りつつ、長年に互る変文（賦）と日本文学との関係を明らかにしようとするものである。その図像については、『佛教大学文学部論集』105号（来年3月刊）に八一十、三章分の続稿を予定する。

最近、深圳の呉強華氏の所蔵される、後漢時代の極めて珍しい画像石二幅を目撃した。その二幅は元、祠堂の左右両側のいずれかの一面が二幅に破断したものと思われ、珍しいのは、全四層に及ぶその画像の第三層に、非常に貴重な韓朋図が描かれていたためである。呉氏の命により調べてみると、現存する韓朋図は、呉氏のそれを加えて、二十例の多きに達する。私の仕事は、新出の呉氏蔵韓朋画像石の内容を解説することに外ならないが、韓朋図の背景には、日中における古代以来の韓朋物語の広がりがあり、その広がりこそは文学、そして、幼学（注釈、唱導）の枠の内に看取されるもので、その広がりには、単に広範囲に及ぶのみならず、深いことにかけても比類を見ない。小稿は、その日中における韓朋物語の広がりを概観することによって、物語形成の跡を点綴し、翻って呉氏蔵韓朋画像石の絵解きを試みようとするものである。さて、その韓朋物語というもの^①の梗概を、敦煌出土の韓朋賦によって示せば、次の通りである（西川幸宏氏による概要を借りる）。

昔韓朋という賢士がひとりで老母を養っていた。朋には仕官の志があったが、母をひとりにするのが気がかりだったので、妻（名は貞夫）を娶ることにした。そ

の後朋は宋国に仕えたが、三年が過ぎても帰ってこない。そこで貞夫は夫へ手紙を送ることにした。手紙は朋のもとへ届いたが、彼はそれを御殿の前で落としてしまう。手紙を得た宋王がその文を気に入り、臣下たちには貞夫をさらって来れる者を募ると、梁伯が名のりを上げた。梁伯は韓朋の家にやつてくると貞夫をさらって行つた。貞夫が宋国に到着すると、王はその美貌を見て喜び、彼女を皇后にしたが、韓朋に思いを寄せる貞夫は病床に臥せってしまった。貞夫が楽しまないので、王が臣下に良い案を募ると、梁伯が「若く美しい韓朋を奴隷の身におとしめれば、貞夫の気持ちも朋から離れるだろう」と進言した。王はその言を採用し、朋を奴隷の身におとしめて清陵台を築かせた。その後、貞夫は清陵台を見に行くことを許され、馬飼いをしている韓朋に会った。彼女は「なぜ宋王に復讐しないのか」と問うたが、朋は「あなた（貞夫）の心はもう自分から離れているだろう」という歌を返しただけだった。貞夫はそれを聞くと血書をしたため、矢の先に結んで朋に向かって射た。朋はそれを読むと自ら命を絶った。宋王が貞夫に乞われて韓朋の墓をつくると、貞夫は腐らせておいた着物を着て朋の墓穴へと身を投げた。侍従たちが助けようとしたが、着物が脆く

なっていたので彼女の身体を捉えることができなかった。宋王は墓を調べさせたが、貞夫の亡骸は見つからず、ただ青と白の石が一つずつ出てきた。王が二つの石を東と西に別々に埋めさせると、東から桂、西から梧桐の樹が生えてきて、二本の樹の枝や根は絡みあい、下には泉が湧き出した。王がその樹を伐らせると、樹から血が流れ、二枚の木片が鴛鴦となり飛び去って、跡には綺麗な羽根が一枚残った。王がその羽根で身体をぬぐってみると、艶やかに光り輝いた。頭のとつぺんだけ光沢がよくならないので、頭を磨いてみると、王の首は落ちてしまった。それから三年も経たぬうちに宋国は滅び、梁伯父子は辺境の地へ流罪となった。善を行えば福を授かり、悪を行えば災いを招くものなのである

韓朋の物語は日中の両国において、それぞれに深い連関を示しつつ、又、独特の展開をも遂げている。その流れと広がり捉えるに当たっては、暫く日本と中国のそれを分けて考えるのが便利である。そこで、まず日本におけるそれを辿ってみよう。

物語（説話）の伝播を考察すると、引用という手段の果たす役割が、甚だ大きいことは、日頃痛感させられることで

ある。そして、引用がなされる際、よく見掛ける事象の一つとして、被引用物に備わる、多彩な契機——引用のきっかけが見出だされることに、注意を払う必要がある。韓朋物語においても、その引用の契機となるキーワードは、幾つも見出だされるが、その代表と目し得る言葉として、鴛鴦（おをしへどり）という語が上げられる。さらに鴛鴦をめぐっては、そこから派生した、鴛鴦の剣羽（おしへどりのさば）という言葉もある。さて、鴛鴦の剣羽（思羽）とは一体、何なる羽で、また、どういう意味か。それらをよく示す文献があるので、左に掲げてみよう。仮名本曾我物語五「貞夫が事」「鴛鴦の剣羽の事」の本文を示せば、次の通りである（真名本欠）。

又、貞女（御具宗）両夫にまみえざるとは、大国に、し（し）そうといふ王有。かん（漢白）はくといふ臣下をめしつかひ、ある時、

かんはく、むすびたる文をおとしたり。王御覧じて、いかなる文ぞと、御たづねありければ、はれ、宮仕暇なくて、日数ををくり、家にかへらず候。こゝろもとなしとて、妻のもとよりくれたる文と申。なをあやしみ、観覧あらんと、宣旨有。かくすべき事ならねば、勸慮にさゝぐ。この文の主、よびて見せよとおほせくだされければ、宣旨そむきがたくて、この女をよびて見せたてまつる。王御覧じて、おしとめおきたまふ。

かんはく、やすからずにおもひけれども、かなはず。女も、王宮のすまい、ものうくて、たゞ男の事のみ、思ひなげきければ、王、おどろきおぼしめす。時の閑白りやうはくといふ者をめし、此事いかゞせんといひたまふ。さらば、かれが男のかんはくを、かたわになしてみせたまへ。おもひはさめぬべしと申たりければ、しかるべしとて、耳鼻をそぎ、口をさきて見せたまふ。女、われ故、かゝるうき目にあふよとなげき、いよくふししづみかなしみければ、又臣下にといたまふ。さらば、かんはくをころしてみせ給へと申ければ、やがて、ふかき淵にしづめられけり。女きゝて、思ひすこしなをざりにし、かの淵みんといひけり。大王、はや思ひすてけりとよるこびて、大臣、公卿もろともに、かの淵にのぞみ、管絃遊宴してあそびたまふ時に、此女、みぎはに出、やすらふと見えし、淵にとびいりて、しにけり。大王をはじめとして、あへなさかぎりなくて、むなしくかへりたまひけり。幾程なくして、この淵の中に、あかき石二いできたり、いだしあわせてぞありける。これ、不思議なり。かんはく夫婦の姿なるをやと、人申ければ、大王きこしめし、なをもありし面影のわすれがたくて、又官人もろともに、かの淵之ほとりに行幸なり、観覧ありければ、申にたがは

ず、まことに石二有。不思議に思召所に、かの石の上に、鴛鴦一つがひあがりて、鴛鴦の衾の下なつかしげにたはぶれけり。これも、かれらが精にてもやと御覧じけるに、此鴛鴦とびあがり、思羽にて、王の首をかきおとし、淵にとびいりうせにけり。それよりして、思羽をば劍羽とも申なり。貞女両夫にまみえずとは、この女の事なり（岩波日本古典文学大系）

この話が曾我物語に引かれることについては、聊か説明が要る。曾我物語のヒーローに当たる五郎時致には、梶原景季をライヴァルとする、化粧坂の遊君という恋人がいて、富士野での仇討を控えた五郎は、遊君と一夜を共にした翌日、片瀬の宿で景季と鉢合わせしてしまう。景季は、恋の鞘当てに決着を付けるべく、平塚の宿まで五郎を追うが、大事を前にした五郎は、逃げ隠れして擱まらず、景季は、五郎の臆病さを笑って去った。後に、五郎を思う遊君は、出家して諸国を廻り、かつて十郎祐成の恋人であった、大磯の虎を訪ねて、往生の素懷を遂げたというエピソードの纏めが、右の話なのである。曾我物語がこの話を引用するきっかけとなっているのは、冒頭に見える、a「貞女両夫にまみえざる」という、よく知られた成句である（韓朋賦原文にも、自殺直前のヒロイン貞夫の言葉として、「一女不事二夫（一女は二夫に仕えない）」とある。元、史記な

どに見える成句)。注目しておきたいのは、本句或いは、本話に隠された、一人の女性における、体は誰のものか、さらに心は誰のものかという、古今東西のロマンスにおける永遠の問題だろう。このことは、例えば有名な、トリスタンとイゾルデの話を想起すれば、すぐに分かる。さて、b 鴛鴦の剣羽、思羽の意味は、当話に明らかである（如何なる羽かに関しては、後述に従う）。さて、本話が韓朋賦と密接に関連していることは、一目瞭然と言える。そして、問題は、本話の典故が変文（韓朋賦）以外に、全く見当たらないことであつた^③（同系話としての搜神記十一の韓憑物語の存在は、早くから知られるが、本話とは内容が全く合わない）。ところが、今から三十年程昔の話になるが、幼学の四部の書の一、和漢朗詠集の注釈のことを調べていて、国会本朗詠注の内に、その韓朋の物語を見出だした時には、本当に驚いた^④。国会本朗詠注下雑、恋、「貞女峡空」（源為憲）注の本文を示せば、次の通りである。

貞女者、貞女峡、大唐明月峡云。於巴峡有三。一、巫山峡、二、巴東峡、三、西河峡也。而、第二巴東峡ハ、猿名所也。此巴峡、明月峡トモ云也。抑明月峡貞女峡云事、大唐蕭宗皇帝時、韓伯云者有、美人妻セリ。蕭宗皇帝、聞食横取、后給ケレトモ、韓伯アカヌナコリヲ惜テ、帝ウチトケ不奉。蕭宗、韓伯ヨウキ耽コ

ソ、我レニハナヒカサレトテ、后見給所テ、韓伯召シヨセテ、耳鼻ヲソキ、面皮ヲハカレケリ。韓伯恥思ケレハ、彼行明月峡、身投失ス。后此事聞、弥々泣歎給シカ、有時、内裏ヲノカレ出、是モ、韓伯身ヲナケシ明月峡行、身投ケリ。当モ、人ニ似タル石、懷相テ、峽水有云ヘリ。即化、鴛鴦云鳥成ケリ。貞女、両夫ニ不嫁心テ、貞女峡名タリ

本注が上掲、曾我物語と深く関わることは、例えばヒーローの名、

韓伯（本注）——かんはく（漢白。曾我）

恋仇の王の名、

蕭宗——しそう（師具宗）

などを見れば、直ちに明らかなことである。国会本朗詠注は、見聞系朗詠注に属し、本注の簡略なものは、見聞系から派生した書陵部本系（玄恵注等）にも見えているが、国会本の属する見聞系朗詠注の成立は、平安時代に溯ることに留意しなければならない。遺憾ながら、見聞系諸本の中で、雑、恋を残すのは目下の所、近世に写された国会本一本に過ぎず、今後の新たな見聞系テキストの出現が、切に待たれるのである。

国会本朗詠注が曾我物語の典故であることは、ほぼ確信出来たものの、そのように断言するには、一点の不審が

残っていた。即ち、曾我物語におけるbの鴛鴦の剣の件（鴛鴦が羽で王の首を斬り落とすこと）が、国会本朗詠注に見当たらない点である。その時点では、おそらく国会本の脱落であるように思われた。そして、程なくその疑問を解消したのが、鈴木元氏による連歌字書、匠材集一「鴛のつるきは」注の発見である。匠材集のその本文を示せば、次の通りである。

鴛のつるきは

むかし思羽と云羽にて、王の首を切事有。それよりの名なり。漢白靈の事なり（古活字本）

匠材集は一見、ヒーロー名を漢白と記す等（国会本「韓伯」、曾我物語を出典とするように見えるが、それは、見聞系を引いた書陵部本系に、「漢白」とも記されるのであって（因みに、恋仇の王名は、「唐蕭宗」、本来の韓朋から、韓伯、漢白等への転訛は、早く見聞系朗詠注の段階で起きていたものと考えられ、匠材集は、その反映に過ぎず、鈴木氏が、

『匠材集』の資料的性格からして、『曾我物語』を直接の典拠としているとは考え難い

と述べられていることは、首肯すべきである。鴛鴦の剣羽は、早く歌語として用いられたが（拾遺集325番歌に「わかるるををしとぞ思ふつる木はの身をよりくだく心ちのみし

て」（新編国歌大観）と見える）、含意される恋愛の内容が、肉体を奪われる、ヒーロー（ヒロイン）の死、仇討ち、首を斬り落とすなど、激し過ぎることが歌人に忌避されたためか、以後殆ど用いられることのない歌語史を辿り、それは却って連歌の世界に受け継がれたらしいことは、文学史的にも注目すべき事実である。

鈴木氏による匠材集の発見に始まる、その後の韓朋物語の資料的な充実振りには、中国側のそれをも併せ、目を瞠らせるものがある。例えば見聞系朗詠注などが本来、鴛鴦の剣羽の一件を備えていたことを確証するものとして、島原松平文庫蔵古事談拔書（室町中期文安四（一四四七）年の書写奥書がある）「廿五貞女峽事」は、極めて重要な資料とすべきである。その本文を示せば、次の通りである（『島原松平文庫蔵古事談拔書の研究』による）。

貞女峽空唯月色 窃窈堤旧独波声云云

貞女峽云、昔、男好妻持。国王殺其男、取其妻一為女御。然而、件女恋本夫申云、夫死所可見云云。

国王許之。女向二峽頭一投身死了。其後、件池一雙鳥出来^{今篇}是也、其貌端嚴也。諸人集見之。国王聞食、行

幸其所^觀覽之間、雄飛揚、劍羽持王首切ケリ。其後、劍羽云也。鴛鴦件夫妻所成也云云

右の本文は、古事談本体にはないので、古事談拔書が、

何処かから引用したものである。そして、冒頭に和漢朗詠集雑、恋の為憲句が掲げられていることから、それは朗詠注からの引用であることが明らかである。注目すべきは、例えば曾我物語における、鴛鴦の剣羽の件が見出だされることで、このことは、朗詠注自体に本来、鴛鴦の剣羽の一件が備わっていたことを示す、確証と見ることが出来るのである。資料が極めて稀少な現在において、古事談抜書の本条の学術的価値は、計り知れず高い。

鎌倉最末期ないし、室町最初期の成立とされる穂久邇文庫本女訓抄二・三「てい女、をしのつるき羽の事」にも、そのタイトルに明らかな如く、鴛鴦の剣羽の一件が備わる。その本文を示せば、次の通りである（伝承文学資料集成17による）。

はうこくに、てい^貞女^女といふ女ありける。天下のひしんなり。わかうしてより、あひ友なへる男に、いさ、かもちはす、とし月ををくりけるに、かたちならひなく、いみしきことを聞召て、てい^帝わう^王よりめして、きさきにたてらる。され共、てい^貞女^女よ、いみしきことに思はす。た、わか男のみ恋忍ひて、露はかりも、国王になひき奉らす。されはとて、はう^芳しん^心なく、あたり申へきにあらねは、さてのみすこし給ふほとに、いか、してか、心をとるへきといふ事を、公卿せんき

有けるに、臣下、申されけるは、後の、王にしたかひ奉り給はぬは、もとの男のなこりを思ひ給ふ故也。かの、もとの男のかほのかはをはきて、かたちをやつして、ちん^陣をわたして、きさきにみせ奉らん、に、定めておとろき思ひて、うとみ給ふへし。さらんに取ては、いかてか従ひ奉り給はさらん、とかん^勘かへ申ければ、此義しかるへしとて、かの男のかほのかはをはきて、ちん^陣のまへを渡して、后にみせ奉りてのち、かうとて、山にふかき井有。かの井にしつめ、其後、今思ひきり給へと、かの男、すかたうとましく成て、終にかうに入ぬ。何に心のとまりてか、心つよくあるへき。今はしたかひ奉れ、とおほせありければ、てい^貞女^女よ申やうまことに今は、いふにかひなく成にけるかや。さもあらは、そのしつめし井のもとへ、我をくし給へて、まことをみん、といひければ、けにもとて、てい^貞女^女を、かうの井のほとりへくし奉りて、ゆきたりけるに、われゆへに、かく成はてぬるに、とかなしく、たえへきかたなくして、かの井にとひ入にけり。此よし、王にそうしければ、人をおろして、かつき上へきよし、仰下さる、間、もとめけれ共なにもなし。水の底より、鳥一つかひいて、あそふ。ふしきのこと也とて、王、是を御らんしけるに、かの男はをとりとなり、

ていぢよはめとりと成て、ともに立けるか、をとりの
わきより、つるきをいたしてきたりて、国王のくひを
切にけり。かの鳥、今のをし是也。をしにつるき羽と
てあるは、此ゆへ也。よの鳥よりも、ちきりふかきも
の也。貞女二夫にとつかすといふ、此ことはり也。か
やうに、心さしふか、らん女をは、いかならん男か、
おろかに思ふへきや。たとひ遠さかる男なりとも、心
なかくもみるへし、と覚ゆることあり

女訓抄において朗詠注との関係を窺わせるのは、ヒロイン
の名を、貞女峡から出たと思しい、貞女（ていぢよ）とす
ることなどだが（曾我物語も同じ）、――部「かうとて、
山にふかき井有」に見える、「かう（坑）」には、日本にお
ける、韓朋物語の受容を考える上で、看過し難い問題が潜
んでいる。それは、ヒーロー（男）を沈めた穴のことであ
り、その後、ヒロインが飛び込む穴となり、さらに恋仇
（王）が二人の遺骸を捜させる穴ともなっている（その結
果は、「もとめけれ共なにもなし」と記される）。この穴の
ことは、実は変文（賦）にしか出て来ないのである。韓朋
賦原文ではそれを、「壙（壙）」と表記して（壙は、塚穴で、
墓穴を言う。類聚名義抄に「壙（……塚穴）」と見える）、
次のように述べている（『敦煌変文集』上による。（一）に、
後掲荒見泰史氏の訳を添える）。

（宋王）^{〔壙〕}輕百丈之壙、三公葬之礼也……（貞夫）^{〔壙〕}臨壙
喚君……天下大雨、水流壙中……宋王即遣人^{〔壙〕}捨之。不
見貞夫。

（宋王は）「百丈もの墓穴を掘り、三公の礼儀で〔韓
朋を〕埋葬しました……〔貞夫が言うには〕埋葬に際
してあなたを呼んでも、（貴方はもう答えられない）
……天から大雨が降り、水は墓穴に流れ込み……宋王
はすぐに人を遣つて墓を掘らせました。しかし〔韓朋
と〕貞夫は見つからず」

この穴（壙）は、変文（賦）の他には、変文を引いたと思
しい唐、段公路撰北戸録三「相思子蔓」の崔龜図注所引無
名詩集に、「始得壙空。不見韓朋貞夫」と見え、同じく変
文系統と思しい敦煌本千字文注（S五四七二）「女慕貞潔」
に、「（貞夫）投朋^{〔壙〕}広而死」と見えるのみの、極めて珍しい
変文の特徴と捉えられ（いずれも後述。千字文注の、広
〔廣〕は、壙であり、「朋広」とは、韓朋の投じられた塚
穴のことであろう）、それが女訓抄に見出だされることは、
やはり変文系の韓朋物語が日本で広く受容されていたこと
を示す、一証に外ならないことに注意すべきである（女訓
抄の「かう」（坑は、校訂者による振漢字）は、壙とも見
られよう。但し、正しい字音仮名遣いは、クワウである）。
さて、女訓抄も、見聞系朗詠注に基づくものと思われ、そ

れは目下、国会本にしか記されない孤例となつてはいるが、その内容は、なお変文と近接していた可能性の高いことを、女訓抄は示している。

朗詠注の顕著な影響下にある、説話集中の韓朋物語の例を、もう一点紹介しておきたい。それは、平仮名本三国伝記二・11「貞女の事」の前半部分に見えるものである。まず巻二の第11条全文の本文を示せば、次の通りである。

貞女の事

むかし唐の蕭宗皇帝のとき韓白といふ

臣下ありけりとし久しく朝廷につかうまつり

て我屋にかへることなし婦人のもとより」(四四才)

文をつかはしてこひしたふことかきりなしみかと

此よしを聞めし其妻をめして御覧しけ

れは世にたくひなきひしんにてありしほと

に御よろこひましくてやがて後宮に

めしいれ給へりしかれとも此女韓白をこ

ひしたふてなきかなしむことせつなり

さらば其なさけをやすめんとてかはくが

はなや耳をそぎて女にみせられけりさ

れとも女をつとをおもふこゝろさしあひ

かはらすつねになきかなしみければみかと」(四四ウ)

けきりんましくてつゐにかんはくをころ

し給へり女此よしをきゝてひそかに宮中

をしのひ出淵にのそんで身をなげて

死にけりその所を貞女峽といふ也又宋

の国に韓憑といふ者ありその妻ひじんなり

宋の康王これをうばひとつて宮女とすしか

れともこの女あへてしたかひ奉らす康

王いかりをなして云そうして女身たらん者

宮中にかしつかるゝことみなもての

ぞむ所也なんぢなんぞたがへるや女こ」(四五才)

たへて申さく狐格ならざるあり神竜

たらんことをねがはす魚鼈は水にきよ

して高台を鳥鵲の巢ほうわうをね

かはすそしんの妻は宋王をねかはすと

いひてつゐて自害してうせにけり

夫の韓憑これを聞て同しく自殺し

たりけりすなはちかれら二人かしがい

を二つのつかにつきこめたるに一夜のほと

に樹木つかのうへに生しけりこれをあや

しみ思ふ所に其木根はことにして末はひと」(四五ウ)

つにまじはりあへり宋人この木をなつて相

思樹といへり連理枝いふは是也

三国伝記は、室町初期に沙弥玄棟により撰ばれた、説話文

学史の掉尾を飾る大説話集で、全十二卷三六〇話を、漢文脈の濃い漢字片仮名交じり文により綴った作品である。平仮名本三国伝記は、それを本体として、全十五卷三〇三話に改編し、それらの表記を平易な平仮名交じりへと改め、各話にまた、添削の筆を加えたものとなっている。さて、三国伝記一・二十六「宋韓憑妻事（并）相思本事」⁽⁹⁾（刊本目録による。（一）内は国会本）に基づき、平仮名本の特色は、何と言ってもa、b二つの韓朋物語を収載していることだろう。粗筋を同じくするとは言え、一条の内に二つの説話を併載するのは、甚だ異例なことで、まずその後半のbが本体の三国伝記一・二十六に基づくものとなっており、前半のaは、平仮名本において新たに増補されたものとなっていることが興味深い。このことは、平仮名本の編者が何らかの点で本体の韓朋物語bに不満を抱き、新たにaの増補に踏み切ったのではないか、という事情を窺わせ、このことは今後、平仮名本三国伝記の改編動機を探る上で、非常に重要な情報を提供するものと思われる。一方、平仮名本aは、見聞系朗詠注によることが、「唐の肅宋皇帝」⁽¹⁰⁾「韓白」等の名前を始めとする諸点に明らかで、先の古事談抜書に見られたような、説話文学における朗詠注撰取の営みが、平仮名本三国伝記の成立に際しても、同様に行われていたことが確認されるのである。そもそも三国伝記本

体が四部の書の一、和漢朗詠集和談抄や、四部の書を継ぐ三注の一、胡曾詩玄恵抄を盛んに撰取していた状況については、かつて述べたことがあり、加えて、三国伝記の説話中には、卷八・七「父母恩徳深重事」と父母恩重経変、卷九・一「目連尊者救母事」と目連変等、敦煌における俗講、変文と密接に関連するものが存することに關しても、以前に指摘したことがある。⁽¹¹⁾幼学や変文との関係は、平仮名本の段階に至っても、なお続いていたのである。平仮名本bに見える三国伝記本体の説話をめぐっては、改めて後程取り上げる。

二

日本において韓朋物語を引く、最も古い文献は、将門記であろう。将門記は、承平天慶の乱における平将門の乱（九三五―九四〇）の顛末を漢文体（変体漢文）で描いた、軍記物語の源流に位置する作品で、卷末に、「天慶三年六月中記文」と記される所から、乱が終息して程なく（将門は、天慶三（九四〇）年二月十四日に伐たれた）、書き綴られたものらしい。将門記によれば、承平七（九三七）年八月十九日、将門の伯父に当たる平良兼は、将門の妻を生捕とし（将門の妻は、良兼の娘である）、翌二十日に上総国へ連れ去った。その妻は、九月十日に、弟達の手引きに

よって、夫の許に脱出するのだが、将門記は、夫と生き別れになった妻の心情を、左のように叙述する。将門記の本文を、書下し文によって示せば、次の通りである（原文の掲出は省略し、文末（ ）内に口語訳を付す。新編日本古典文学全集41による）。

其の日、将門が婦を船に乗せて彼方の岸に寄す。時に、彼の敵等、媒人の約を得て件の船を尋ね取れり。七、八艘が内に虜掠せらるる所の雑物資具三千余端なり。妻子同じく共に討ち取られぬ。即ち廿日を以て、上総国に渡る。爰に将門が妻は去りて、夫は留まりて、忿り怨つこと少なからず。其の身は生き乍ら、其の魂は死ぬるが如し。旅の宿に習はずと雖も、慷慨して仮に寐る、豈何の益か有らむ。妾は恒に真婦の心を存して、幹朋に与ひて死なむと欲ふ。夫は則ち漢王の励みを成して、将に楊家を尋ねむと欲ふ。謀を廻らすの間に、数旬相隔たりぬ。尚し懷恋の処に、相逢ふの期なし。然る間、妾が舍弟等、謀を成して、九月十日を以て竊かに豊田郡に還り向はしむ。既に同氣の中を背きて、本夫の家に属く。譬へば遼東の女の夫に随ひて父が国を討たしむるが若し。件の妻は、同氣の中を背きて、夫の家に逃げ帰る。

（同じ日に、将門の妻を船に乗せて彼方の岸に寄せた

ところ、手引きする者の密約により、例の敵たちは将門の妻の乗った船を見つけて、取り押さえた。捕獲された船、七、八艘のうちで奪われた生活用品や資財など三千余点に及び、妻子たちも同時に生捕りにされてしまった。そして、二十日に囚われの身として上総国へ連行されてしまった。ここに、将門の妻は去り、夫はひとり取り残され、憤怒すること並々ならぬものがあつた。その身は生きながら傷心のあまり魂の抜けたような状態となつた。妻は連行される旅の仮寝に慣れなかつたが、怒り哀しみながらも眠りにつこうとした。でも、容易に眠れるわけではなくむなしいことだつた。さて、将門の妻は、いつも貞節な心をいだいており、幹朋の妻が夫とともに死んだように、自分も夫に殉じて死のうと願つた。一方、夫の将門も、玄宗皇帝が寵愛した楊貴妃の死を悲しみ、楊家を訪ねたように、妻の行方を尋ねようと思つた。思案をめぐらしているうちに数十日を経過して、その間、互いに思慕の念をつのらせたのに逢う機会には恵まれなかつた。そうしている間に、妻の弟たちが一計を案じ、九月十日、ひそかに妻を豊田郡に逃げ帰らせた。妻はすでに肉親の仲を背いて夫の家に身を寄せることができた。たとえば遼東の女が夫に従ひ父の国を討たせたのと同じである。

あの将門の妻もまさに肉親の間を背いて夫の家に逃げ帰ったのである)

右の本文(訳文)に付した——線部の

妾は恒に貞婦の心を存して、幹朋^⑧に与ひて死なむと欲ふ(さて、将門の妻は、いつも貞節な心をいだいており、幹朋の妻が夫とともに死んだように、自分も夫に殉じて死のうと願った)

は、夫と生き別れ、囚われの身となった妻の心情を、韓朋の物語に託して述べたものである。右の底本は真福寺本(承德三(一〇九九)年写)だが、将門記のテキストにはなお楊守敬本(平安中期写、真福寺本に先立つか)、将門略記諸本があつて、その内、将門略記には、当該部分がないので、上掲本文について問題とすべきは真福寺本、楊守敬本の二本ということになる。図一は、上掲——線部を含む真福寺本(右)と楊守敬本(左)の原本を併せ掲げたものである^⑨。今、それら両本における——線部の訓読部分を省き、漢字部分のみを取り出して併せ示せば、次のようになるだろう。

・妾恒存貞婦之心、与幹朋欲死(真福寺本)
・妾恒存貞婦之心、与幹朋欲死(楊守敬本)
両本は、幹朋の幹を幹(幹)に作るが、幹(幹)は幹の俗字体である。真福寺本の朋は、明にも見えるが、朋として

妾死雖不冒振宿懷既寢寐豈有何益哉妾恒存
貞婦之心与幹朋欲死夫
恒存貞婦之心与幹朋欲死夫

良いであろう。すると、両本の異同は、

貞婦(真福寺本)

貞婦(楊守敬本)

の一箇所となることが知られよう。さて、これらのことは、日本における韓朋物語の受容において、どのような意義を持つのだろうか。最近の日本における韓朋物語に関する研究の進展は、日本最古の韓朋物語の引用をめぐる驚くべき知見を齎すのである。話を聊か先取りする形となるが、中国における韓朋物語の研究風景を一変させた新資料

図一 将門記(真福寺本〈右〉、楊守敬本〈左〉)

の一つとして、一九七九年に敦煌馬圈湾から出土し、一九九九年の裘錫圭氏の報告によって一躍有名なものとなった敦煌漢簡496A Bを上げることが出来る。図二は、そのA Bを示したものである。¹⁶ 敦煌漢簡は、前漢後期頃のものだが、裘氏は、そのAを、

□書、而召幹備問之。幹備対曰、臣取婦二日三夜、去之来游、三年不婦、婦□

と解説された(Bは、「百一十二」)。従うべきである。Aが、例えば変文(賦)と深く関わるものであることは、後述するが、Aは、前漢という驚くべく早い時代に溯るものであり、韓朋物語における現存最古の資料に属することは、言を俟たない。さて、敦煌漢簡に記される幹は、幹の



図二 敦煌漢簡496A (右)、B (左)

本字であるので、将門記の幹(幹、幹)に同じく(さらに、井桁の意の幹は、韓に通じる)、また、備は、朋に同じだから(周礼秋官、士師「七曰為邦朋」の鄭注に、「故書朋作備」とある)、こちらも将門記の朋と一致している。つまり敦煌漢簡と将門記とのヒーロー(韓朋)の表記、

幹備(幹朋)——幹・幹(幹)朋、

は、共通しており、同じなのである。即ち、物語のヒーローの表記は、古くは幹朋だったのであり、後にそれが韓朋(或いは、韓憑)へと変化、定着したものであろう。問題とすべきは、韓朋物語の諸資料を通覧しても、ヒーローの表記を幹朋と記すものが、敦煌漢簡以外には、全く見当たらないことである。そして、将門記の幹朋という表記は、変文(賦。韓朋)とも、後述搜神記(韓憑)とも一致せず、それが一致するのは、敦煌漢簡のみとなっている。さて、この事実は一体、何を意味することになるのだろうか。そのことを考える前に、ヒロインの表記についても見ておく必要がある。ところで、将門記の前掲、「妾は恒に真婦の心を存して」の「真婦」をめぐるのは、後文に「幹朋に与いて」とあるように、ヒーローの幹朋と対になる語句なのであって、それはヒロインを差すものと考えるべきである。従って、それを例えば「いつも貞節な心をいだいており」という風に、一般語句として訳さない方が良いと思われる

（真婦の頭注三五に、「真の女性としてのたしなみを持った夫人をいうか」とある）。すると、当該本文は、例えば「（将門の）妻は、いつも（韓朋物語におけるヒロインの）真婦（或いは貞婦）の気概を己れの気概として」の如くに訳せよう。さて、将門記のヒロインの表記に関しては、真婦（真福寺本）、貞婦（楊守敬本）という異同の存することは、先に見た。真と貞とは字形が似ていることから、どちらかが誤って写した可能性が高いが、では、どちらが正しいのか、ということになると、それを見分けることは、甚だ難しい。まず敦煌漢簡は、それを婦としか記さない。そして、貞婦（楊守敬本）の方は、変文（賦）のヒロイン名、貞夫に極めて近い。婦と夫とは同音であり、こちらが正しいようにも見える。ところが、真婦（真福寺本）の方にも、考慮しておかなければならない事情が一、二存する。例えば音について言うなら、真^{zhēn}と貞^{zhēn}も同音であり、加えて、後掲韓朋の物語を圖像化した後漢画像石の中に、ヒロインの名を信夫と榜題するものが二例、見出だされることに注意を払う必要がある（12南武陽功曹闕東闕、13山東東平石馬莊後漢画像石。なおヒロイン名を変文（賦）同様、貞夫と榜題する後漢画像鏡も、二例見出だされている（2浙江省文物考古研究所藏宋王貞夫銘画像鏡、3孔震氏藏貞夫銘画像鏡）。即ち、ヒロイン名は後漢時代以前、

貞夫と信夫との二つがあったようで、真と信とは、まことの意味において相通じることから（真も同じ）、そのような二つの表記を生じる結果となったものらしい。このような事情から、将門記におけるヒロイン名は、強ちに真婦（真福寺本）を斥ける訳にもゆかないのであり、この問題は、将来に委ねるしかないものと思われる。将門記における韓朋物語の引用については、最近の図像学の進展の中から、もう一点、気になる点が指摘出来る。即ち、将門記において、「〔妾は〕既に同気の中を背きて、本夫の家に属く……件の妻は、同気の中を背きて、夫の家に逃げ帰る」と総括される、系譜的に、

良兼——妾

将門

と示される、妾をめぐるシチュエーションと、韓朋物語との関係である。同気は、親子等、血の繋がりを言う言葉なので、ここは、妻が父を捨て、夫を選んだことを言っているのだが、このシチュエーションは、変文（賦）や搜神記では、全く説明が付かないのである（……部には、遼東の女の別説話が引かれているので、それで説明することも可能である）。一方、韓朋物語は、搜神記十一²⁹⁴によれば、中国の戦国時代、宋の康王から発する話とされるので、そ

これから、晋、干宝の搜神記や唐の変文（賦）までは、約六百年から一千年以上の隔たりがあり、また、新出の前漢後期の敦煌漢簡までは、三百年程の隔たりが数えられる。そして、それらの間における物語の形成過程に関しては、目下の所、殆ど分かっていない。そういった状況において、敦煌漢簡と同様、韓朋物語の研究に画期的な成果を齎しつつあるのが、後漢時代の画像鏡、画像石をめぐる図像学の進展なのである。その成果の一つとして、物語中のヒーローを、「孺子」と榜題する問題が上げられる（1 呉氏蔵後漢画像石、12 南武陽功曹闕東闕。孺子は、子供のこと）。さて、ヒーローを孺子と呼ぶ点も、従来の変文（賦）や搜神記十一²⁹⁴では、全く説明することが出来ないものである。ところが、韓朋物語に登場する、幾首かの歌謡（韓朋が殿前で落とした手紙もその一つ）の伝承跡を辿ってゆくと、烏鵲歌と通称される、二首の歌謡の第一首は、実は紫玉歌と称される、別の歌謡から発していることが判明する（越絶書逸文、搜神記十六³⁹⁴等。後述）。さらに、このことは、紫玉歌（或いは、紫玉物語）が、韓朋物語の形成における、淵源の一つに外ならないことを示しており、物語の形成期にあつては、韓朋物語にも多様な内容の話があり得たことを示すものである。取り分け興味深いのが、ヒロイン紫玉（越絶書では幼玉）を取り巻くシチュエーションだろう。

物語を見ると、紫玉の恋人が「童子」韓重とされ（搜神記十六³⁹⁴。越絶書では、「書生」。その韓重と韓朋の名前の重複にも注目されたい）、紫玉の父親が呉王夫差とされていて、ヒーローの韓重と敵対するのが、その父親というシチュエーションになっている。系譜で示せば、

呉王夫差——紫玉

韓重

となり、このシチュエーションの形は前掲、将門記の妾をめぐるそれと、全く同じものであることが知られよう。そして、韓朋物語のヒーローを「孺子」と記す、図像の榜題を説明するものは唯一、その紫玉物語だけなのである。さて、将門記の見た韓朋物語については、その実態が殆ど未詳とすべきものであることを、ここで強調しておきたい。¹⁹但し、それは、新出最古の敦煌漢簡と共通することを始め、全く未知の韓朋物語が、平安時代以前に既に日本へと舶載され、ひよっとすると関東にまで伝播していたことなど注釈、幼学の地平において、韓朋物語が豊かに花開いていた可能性を具体的に示唆する点、今後の考究が切に期待される。

建保七（一二一九）年正月二十八日、鎌倉幕府三代将軍源実朝が、甥の公暁によって暗殺された。幕府の混乱、弱

体化に好機を看て取った後鳥羽上皇は、承久三（一二二一）年五月十四日、執権北条義時に対する追討の院宣を發し（その筆者が藤原光親である）、承久の乱が勃發する。上皇によるかねてからの討幕の意圖が顕在化した動乱で、言わば天皇軍対幕府軍の武力衝突が全国へと波及した点、後の南北朝時代を予見させる、日本史上の象徴的な大事件ではあったが、結果は、一箇月後の幕府軍の呆気ない勝利に終わる。鴨長明或いは、源光行作などと伝えられ（現在では否定されている）、中世日記紀行文学を代表する海道記と呼ばれる小品は、承久の乱の二年後、貞応二（一二二三）年四月四日に京を発ち、二週間後の十八日に鎌倉へ着くまで、東海道を下る途次の事柄を綴っているが、特に菊川（十二日）、浮島が原を経て木瀬川（十四日）、遇沢（十五日）条において、乱に連座し処刑された藤原宗行、また、藤原光親などへの言及がある。承久の乱から一月後、六月十五日には幕府軍が入洛し、十六日に北条時房、泰時は、六波羅に進駐した（後の六波羅探題）。上皇は、乱の首謀者六名のリスト（交名）を提出（承久記下）、宗行等は二十四日、六波羅に拘留され、七月一日の宣旨によって断罪されてしまう。泰時は、公卿達の洛中における処刑を避け、彼等を鎌倉へ下す際の処置とした。史料綜覧、承久三年七月を見るに、

・十二日……幕府、武田信光ヲシテ、前権中納言正二位
按察使藤原光親ヲ駿河加古坂ニ斬ラシム、
・十四日、幕府、小山朝長ヲシテ、前権中納言正三位藤
原宗行ヲ駿河藍沢ニ斬ラシム（四、410頁）
として、諸史料名を掲げるから、宗行に先立つ二日前に、
光親が首を斬られた事実が知られる（吾妻鏡二十五には、
「於加古坂梟首訖」とある）。さて、海道記は、四月十
四日の木瀬川の条において宗行をめぐる、左のようなエピソードを記している。その本文を示せば、次の通りである
（新編日本古典文学全集48による）。

木瀬川の宿に泊りて、萱屋の下に休す。ある家の柱に、
又、かの納言、和歌一首をよみて、一筆の跡を留められたり。

今日過ぐる身を浮島が原にきてつひの道をぞ聞き定
めつる……

さて、この歌の心を尋ねれば、納言、浮島が原を過ぐるとて、物を肩にかけてのぼる者、あひたりけり。問へば、按察使光親卿の僮僕、主君の遺骨を拾ひて都に帰る、と泣く泣く云ひけり。其をみるは身の上の事なれば、魂は生きてより、さこそは消えにけめ。本より遁るまじと知りながら、おのづから虎の口より出でて亀の毛の命もやうる、と猶待たれけん心に、命は終

にと聞き定めて、げに浮島が原より、我にもあらず馬の行くに任せて、この宿におちつきぬ。今日ばかりの命、枕の下の蜚と共に哭き明かして、かく書き留めて出でられけんこそ、あはれを残すのみに非ず、なきあとまで情もふかくみゆれ。

さぞなげに命もをしの剣羽にかかる別れを浮島が原右の条に記されているのは、二年前に同じ海道を下った宗行が、木瀬川の宿の或る家の柱に、一首の歌を書き留めたという話と、その歌に、宗行が浮島が原にやって来て、「つひの道をぞ聞き定めつる（すぐにも処刑されよう自分の運命を（光親の僮僕の話から）聞かされはつきり悟った）」とある、句意に纏わるエピソードの紹介、及び、末尾に添えられた、宗行の心中を思い遣る、作者の歌一首と整理出来る。さて、海道記の右の話には、その作者の歌の上の句の内に、鴛鴦の剣羽という成句の使用を通じて、韓朋物語がさり気なく姿を見えていることが知られよう。ここで一寸考えておきたいのは、末尾に添えられた、作者の歌の解釈である。例えば新編日本古典文学全集の長崎健氏訳には、

さぞかし命が惜しかったであろうに、おし鳥の羽のよ
うな刃にかかって死ぬのはまことに哀れな浮島が原だ
よ

とし（56頁）、また、新日本古典文学大系51の大曾根章介、久保田淳氏訳には、

宗行卿は本当にさぞ命も惜しかったであろうに、この浮島が原で鴛鴦の剣羽ならぬ剣に懸かってこの世に別れを告げることを憂く思ったであろうよ

とされる（105頁脚注二〇）。それらの訳は、決して誤りではないが、鴛鴦の剣羽の解釈が不十分である。鴛鴦の剣羽は、例えば前掲匠材集に、「鴛のつるきは。むかし……王の首を切事有……漢白霊の事也」と言われる如く、韓朋物語を背負った句であることを忘れてはならず、取り分け、宋王の「首を切事」を差す言葉なのである。だから、その歌の解釈は例えば、

そうであろう、誠に命こそ惜しかったに違いない。鴛鴦の剣羽は昔、中国で宋王の首を斬つ（て怨みを晴らし）たと言うが、その剣に掛かって首を斬られてしまふという、今生との別れを憂く思う浮島が原であることよ

のようになるだろう。鴛鴦の剣羽をかく解釈すると、当歌にはもう一点、気になる言葉が残る。それが末句にある、ある浮島が原（静岡県沼津市、富士市）の解釈である。記述の通り、宗行にとってその浮島が原こそは、光親の首を肩にした僮僕と出会い、自らの行末をはっきりと悟らされ

た場所に外ならなかった。ならば、その浮島が原という語には当然、僮僕を持つ光親の首を見て、自らの運命を悟ったという、出来事そのものも、含意されているものと考えなければならぬ。すると、前述の試訳の、「今生との別れを憂く思う浮島が原であることよ」の浮島が原に対しても例えば、

今生との別れを憂く思う浮島が原——光親の僮僕の肩にした首を見、自らの行末を知った、辛い浮島が原であることよ

のように解釈されるべきであろう。従来の解釈は、例えば長崎氏頭注七（56頁）に、「鳥〔鴛鴦〕の「剣羽」に刀の「剣刃」……を掛ける」とされる如く、一般に和歌の掛詞の範囲でのみ解釈される嫌いがあって、ともすれば句の背負う物語に対する、注意が薄くなることを、常に警戒すべきかと思われる。なお例えば大曾根、久保田氏脚注二〇（105頁）に、鴛鴦の剣羽について、

「剣羽」は鴛鴦の雄の両側にある銀杏の葉の形をした羽。思い羽

と説明される鴛鴦に関しては、さらに大きな疑問が残るので、後述に従いたい。

文学を出典研究の視点から眺めた時、出典が分かるようで分らない説話程、研究者を苛立たせるものはない。私にとつて、三国伝記の韓朋物語などがその好例で、かねてより首を捻らずにはいられなかったものである。その訳を少し説明しよう。平仮名本三国伝記の本文 a、b は、先に見た如く、その内の a が朗詠注に由来するもので、b が三国伝記本体を平仮名に和らげたものだった。その b に当たる、三国伝記一・二十六「宋韓憑妻事相思木事」の本文を示せば、次の通りである（寛永刊本により、国会写本（一）を参照した）。

漢言、宋ノ代ノ人ニ韓憑ト曰フ者有リ。其妻美人ナル故ニ、宋ノ康王奪^{イテ}之^ヲ為^レ妃。然共彼女不^レ隨。康王怒テ曰ク、女御更衣ニ成ル事ハ、皆女兒ノ望^ム処也。汝何愚^{ナル}乎。時ニ女ノ曰、

狐^コ格^{カク}（貉）双ヘル有リ、神竜^{カミリウ}タラン事ヲハ不^レ冀^{ホカ}。

龜^{カメ}鼈^{ヘツ}水ニ居シテ、高台^{タカダイ}不^レ冀^{ホカ}。

鳥^{トリ}鵲^{セウ}ノ巢、鳳凰^{フウオウ}ヲ不^レ冀^{ホカ}。

庶人^ソノ妻、宋王^{ソウオウ}ヲ不^レ冀^{ホカ}。

遂ニ自害セリ。夫ノ韓憑^{カンヒョウ}聞^キ之^ヲ亦自殺セリ。彼等二人ノ死骸^{シカハネ}ヲ道ノ両ノ辺^ヘニ埋^ヒニ、一宿樹^{シヨク}生^ナ屈^{カシラ}枝交ヘ接体

相就^{ヨリ}。宋人名^ナテ其木ヲ相思樹ト曰フ。夫婦ノ志シ深キ事、是ヲ以テ本トス矣

右の同文が楊暘暁筆十三・21にも見えるが、それは、三国伝記によるものと見做して良い。

これから、中国における韓朋物語の資料を、順次紹介してゆく。その最古の資料である敦煌漢簡は、将門記の所で見た如くだが、三国伝記の来源を考える上で見ておくべきは、敦煌漢簡に次ぐ古さを有する三国時代、魏文帝撰の列異伝逸文と、それと深く関わる晋、干宝撰の二十卷本搜神記十一・294である。列異伝の本文を示せば、次の通りである（芸文類聚九十二所引による）。

列異伝曰、宋康王埋韓憑夫妻。宿夕文梓生、有鴛鴦雌雄各一。恒栖樹上、晨夕交頸。音声感人

以上が全文で、物語の後日譚の部分しかなく、且つ、甚だ簡略である点が惜しまれるが、幸い同系統と見られる後掲搜神記に、その全貌らしきものが伝えられている。搜神記の本文を示せば、次の通りである（末尾（一）内に、先坊幸子、森野茂夫氏による訳文を付す）。

宋康王舍人韓憑、娶妻何氏。美、康王奪之。憑怨、王囚之、論為城旦。妻密遺憑書、繆其辞曰、其雨淫淫、河大水深、日出当心。既而王得其書、以示左右、左右莫解其意。臣蘇賀対曰、其雨淫淫、言愁且思也。河大

水深、不得往来也。日出当心、心有死志也。俄而憑乃自殺。其妻乃陰腐其衣。王与之登台、妻遂自投台。左右攬之、衣不中手而死。遺書於帶曰、王利其生、妾利其死。願以屍骨、賜憑合葬。王怒、弗聽。使里人埋之、冢相望也。王曰、爾夫婦相愛不已。若能使冢合、則吾弗阻也。宿昔之間、便有大梓木生於二冢之端。旬日而大盈抱、屈体相就、根交於下、枝錯於上。又有鴛鴦、雌雄各一。恆棲樹上、晨夕不去。交頸悲鳴、音声感人。宋人哀之、遂号其木曰、相思樹。相思之名、起于此也。南人謂、此禽即韓憑夫婦之精魂。今睢陽有韓憑城、其歌謡至今猶存。

（宋の康王の侍従であつた韓憑が、何氏という妻を迎えた。美人だつたので、康王が奪い取つてしまった。憑が恨みに思つていたので、王は彼を逮捕して、城壁の人夫にするとの判決を下した。妻は人目をぬすんで憑へ手紙を送り、それにはわざと隠語を使つて「長雨が続き、川は広く水は深く、日は昇つて胸を照らしませ」と書いた。やがて王はその手紙を押収し、近侍の人々に見せたが、誰にも意味が分からない。蘇賀という家来が答えるには「『長雨が續いて』とは、憂えつつあなたを思うという意味です。『川は広く水も深い』とは、通うことが出来ないという意味です。『日が

昇つて胸を照らす』とは、死を誓う志を胸に持つという意味です」と。その内に憑は自殺してしまつた。その妻は密かに自分の着物を腐らせておいた。王がこの妻と台へ登つた時、妻はそのまま台から身を投げた。近侍の人々が捕まえようとしたが、着物を掴み取ることが出来ずに死んでしまつた。帯に残してあつた遺言には「王さまは生きている間のこの身をお役に立てられましたが、死んでからは私が役立てたいと存じます。どうかこの死体を、憑に与えて共に埋めて下さいませ」と。王は怒つて、承知しなかつた。村人に埋葬を命じ、二人の塚が向き合うようにさせた。王は「お前たち夫婦は、互いに愛し続けているらしい。もし二つの塚を一つに合わせる事が出来たなら、わしも邪魔はしない」と言つた。幾晩も経たぬ間に、大きな梓の木が、両方の塚の端から生えてきた。十日も経つと、一抱えに余るほどになり、幹を曲げて近づきあい、下の方では根が、上の方では枝が交錯した。また鴛鴦が、雌雄一羽ずつ現れた。いつもその木をねぐらにして、朝から晩まで枝から去らなかつた。首をさし交えながら悲しげに鳴き、その声は人々を感動させた。宋の人々は哀れんで、その木に「相思樹」という名を付けた。「相思」という名称は、ここから始まつたのである。

る。南方の人は「この鴛鴦はつまり韓憑夫婦の魂魄である」という。いま睢陽には韓憑が築いたという城があり、その歌謡は今に至つても伝わっている。

搜神記が三国伝記と密接に関連しようことは、搜神記に言う、宋康王、韓憑等の人名や、ヒーロー、ヒロイン死後の後日譚における、文言の酷似することを見れば、直ちに気が付くことで、例えば池上洵一氏が、三国伝記「本話の源泉は『法苑珠林』二七・至誠篇感応縁（原拠は搜神記）に見える」として、後日譚の補注に、法苑珠林所引の搜神記本文を上げられたことも、決して故無しとはしない。²⁸しかし、三国伝記の、ヒロインが死んで後に、韓憑も死ぬという順序が、搜神記では逆になっている点などに、不審が残ることを始め、何より私を悩ませたのは、三国伝記に出て来るヒロインの歌（「狐格（貉）双ヘル有り」以下）が、搜神記のそれ（「其雨淫淫」以下）とは全く一致しないことであつた。さて、よく似た日中二つの資料の間で一体、何が起きているのか、ということを理解するためには、どうしてもここで変文（賦）及び、その関連資料を眺めておく必要がある。まず敦煌本韓朋賦の本文を示せば、次の通りである（『敦煌変文集』上による。末尾（一）内に、荒見泰史氏による訳文を添えた）。

敦煌本韓朋賦

昔有賢士^a、姓韓名朋、少小孤单、遭喪遂失其父、獨養老母。謹身行孝、用身為主意遠仕。憶母独注^(註)、故娶賢妻^(妻)、成功索女^(索)、始年十七、名曰貞夫。已賢至聖、明顯絕華、形容窈窕、天下更無。雖是女人身、明解經書、凡所造作、皆今天符。入門三日、意合同居、共君作誓、各守其軀。君亦不須再取婦、如魚如水、妾亦不再改嫁、死事一夫。韓朋出遊、仕於宋國、期去三年、六秋不歸。朋母憶之、心煩愍^(愍)。其妻念之、內自發心、忽自執筆、遂字造書。其文斑斑、文辞碎金、如珠如玉。意欲寄書與人、恐人多言。意欲寄書與鳥、鳥恆高飛。意欲寄書與風、風在空虛。書若有感、直至朋前。書若無感、零落草間。其妻有感、直到朋前。韓朋得書、解讀其言。書曰、浩浩白水、迴波如流。皎皎明月、浮雲暎之。青青之水、冬夏有時。失時不種、禾豆不滋。万物吐化、不違天時。久不相見、心中在思。百年相守、竟好一時。君不憶親、老母心悲。妻独单弱、夜常孤栖、常懷大憂。蓋聞百鳥失伴、其声哀哀。日暮独宿、夜長栖栖。太山初生、高下崔嵬。上有双鳥、下有神龟、昼夜遊戲、恒則同歸。妾今何罪、独無光暉。海水蕩蕩、無風自波。成人者少、破人者多。南山有鳥、北山張羅。鳥自高飛、羅当奈何。君但平安、妾亦無他。韓朋得書、意感心悲、不食三日、亦不覺飢。韓朋意欲還家、事無因緣。懷書不謹、遺失殿前。宋王得之、甚愛

其言。即召群臣、並及太史。誰能取得韓朋妻者、賜金千斤、封邑万户。梁伯啓言王曰、臣能取之。宋王大喜、即出八輪之車、爪駟之馬、前後仕徒、便三千余人。從發道路、疾如風雨。三日三夜、往到朋家。使者下車、打門而喚。朋母一看、心中驚怕。即問喚者、是誰使者。使者答曰、我是宋國使來、共朋同友。朋為公曹、我為主簿。朋有私書、來寄新婦。阿婆迴語新婦、如客此言、朋今事官、且得勝途。貞夫曰、新婦昨夜夢惡、文文莫莫。見一黃虵、咬妾床脚。三鳥並飛、兩鳥相搏。一鳥頭破齒落、毛下分分、血流落落。馬蹄踏踏、諸臣赫赫。上下不見隣里之人、何況千里之客。客從遠來、終不可信。巧言利語、詐作朋書。朋言在外、新婦出看。阿婆報客、但道新婦、病臥在床、不勝医薬。並言謝客、勞苦遠來。使者對曰、婦聞夫書、何故不憶。必有他情、在於隣里。朋母年老、不能察意。新婦聞客此言、面目變青變黃、如客此語、道有他情、即欲結意、返失其里。遣妾看客、失母賢子。姑從今已後亦夫婦、婦亦失姑。遂下金機、謝其王事、千秋萬歲、不當復織。井水淇淇、何時取汝。釜電烜烜、何時吹汝。床席闔房、何時臥汝。庭前蕩蕩、何時掃汝。園菜青青、何時拾汝。出入悲啼、隣里酸楚。低頭却行、淚下如雨。上堂拜客、使者扶簷。貞夫上車、疾如風雨。朋母於後、呼天喚地、号咷大哭、隣里驚聚。貞夫曰、呼天何益、喚地何免、駟馬一去、何得歸返。梁伯迅速、日日漸

遠。初至宋國、九千余里、光照宮中。宋王怪之、即召群臣、并及太史。開書問卜、怪其所以。博士答曰、今日甲子、明日乙丑、諸臣聚集、王得好婦。言語未訖、貞夫即至、面如凝脂、腰如束素、有好文理。宮人美女、無有及似。宋王見之、甚大歡喜。三日三夜、樂不可盡。即拜貞夫、以為皇后。前後事從、入其宮裏。貞夫入宮、憔悴不樂、病臥不起。宋王曰、卿是庶人之妻、今為一國之母。有何不樂。衣即綾羅、食即香口。黃門侍郎、恆在左右。有何不樂、亦不歡喜。貞夫答曰、辭家別親、出事韓朋。生死有處、貴賤有殊。蘆葦有地、荊棘有叢。豺狼有伴、雉兔有双。魚鼈有水、不樂高堂。燕雀群飛、不樂鳳凰。妾是庶人之妻、不樂宋王之婦。夫人愁憂不樂。王曰、夫人愁思、誰能諫之。梁伯對曰、臣能諫之。朋年卅未滿、二十有余、姿容窈窕、黑髮素糸、齒如珂珮、耳如懸珠。是以念之、情意不樂。唯須疾害朋身、以為囚徒。宋王遂取其言、即打韓朋双板齒落。並着故破之衣裳、使築清陵之台。貞夫聞之、痛切忤腸、情中煩怨、無時不思。貞夫語宋王曰、既築清陵之台訖、乞願覲往觀看。宋王許之。乃賜八輪之車、爪騶之馬、前後侍從、三千余人、往到台下。乃見韓朋、剉草飼馬、見妾羞恥、把草遮面。貞夫見之、淚下如雨。貞夫曰、宋王有衣、妾亦不着。王若有食、妾亦不嘗。妾念思君、如渴思漿。見君苦痛、割妾心腸。形容憔悴、決報宋王、何以羞恥、取草遮面、避妾隱藏。韓

朋答曰、南山有樹、名曰荆棘、一技兩刑、葉小心平。形容憔悴、無有心情。蓋聞東流之水、西海之魚、去賤就貴、於意如何。貞夫聞語、低頭却行、淚下如雨。即裂裙前三寸之帛、卓齒取血、且作私書、繫箭頭上、射與韓朋。朋得此書、便即自死。宋王聞之、心中驚愕、即問諸臣、若為自死、為人所殺。梁伯對曰、韓朋死時、無有傷損之處。唯有三寸素書、繫在朋頭下。宋王即取讀之。貞夫書曰、天雨霖霖、魚游池中。大鼓無聲、小鼓無音。宋王曰、誰能弁之。梁伯對曰、臣能弁之。天雨霖霖是其淚、魚有池中是其意、大鼓無聲是其氣、小鼓無音是其思。天下是其言、其義大矣哉。貞夫曰、韓朋已死、何更再言。唯願大王有恩、以札葬之、可不得利後人。宋王即遣人城東、輕百丈之曠、三公葬之禮也。貞夫乞往觀看、不敢久停。宋王許之。令乘素車、前後事從、三千余人、往到墓所。貞夫下車、繞墓三匝、嗚啼悲哭、声入雲中、臨曠喚君、君亦不聞。迴頭辭百官、天能報此恩。蓋聞一馬不被二安、一女不事二夫。言語未訖、遂即至室、苦酒侵衣、遂暈如葱、左攬右攬、隨手而無。百官忙怕、皆悉搥胸。即遣使者、走報宋王。王聞此語、甚大嗔怒、床頭取劍、殺臣四五。飛輪來走、百官集聚。天下大雨、水流曠中、難可得取。梁伯諫王曰、只有万死、無有一生。宋王即遣人拏之。不見貞夫、唯得兩石、一青一白。宋王觀之、青石埋於道東、白石埋於道西。道東生於桂樹、道西生於梧桐。

枝枝相当、葉葉相籠、根下相連、下有流泉、絶道不通。宋王出遊見之、問曰、此是何樹。梁伯対曰、此是韓朋之樹。誰能解之。梁伯対曰、臣能解之。枝枝相当是其意、葉葉相籠是其恩、根下相連是其氣、下有流泉是其淚。宋王即遣人誅伐之。三日三夜、血流汪汪。二札落水、變成双鴛鴦、展翅高飛、還我本郷。唯一毛羽、甚好端正。宋王得之、遂即磨弘其身、大好光彩。唯有項上未好、即將磨弘項上、其頭即落。生奪庶人之妻、枉殺賢良。未至三年、宋国滅亡。梁伯父子、配在辺疆。行善獲福、行惡得殃。

(昔むかし、姓は韓、名は朋という賢士がおりました。幼い頃から親戚がなく、父を亡くしてからは、一人で老いた母を養い、身を謹んで孝行をしておりました。朋は自ら遠方へ仕える決心をしました、母が一人で暮らすことが気がかりです。そこで、頭のよく素晴らしい妻をさがして娶ることにし、貞夫という十七になったばかりの女性をさがしてあてました。その貞夫の賢いことはまさに聖人とも言えるほどで、国でもとくに秀でたものでした。容姿も貞淑であることも天下に他に類のないほどでした。女性ではありませんが、経書をしっかりと理解し、およそすべての所作は天に協うものでした。貞夫が家に来て三日がたち、互いに好意を持ったので同居することになり、そこで言いました。「共に誓い合ひましょう。互いにその身を守ることを。」

貴方はもう他の女性を娶らず、魚と水のように仲良くありましょう。私もまた他へ嫁ぐことは致しません。死ぬまで貴方一人だけです。」韓朋は家を離れて宋国に仕え、三年が過ぎ、六年が過ぎても帰らず、韓朋の母は、このことを想って心を病んでしまいました。韓朋の妻はこれを心配して、意を決して筆をとり、書をしたためることにしました。その文は彩をなすように美しく、言葉も金をちりばめたように、真珠や寶石のように美しいものでした。人に手紙を託すと、人に知られて何を言われるかわかりません。鳥に託すと、鳥は高く飛んでいつてしまい頼めません。風に手紙を託すと、風は高空にあつて頼めません。「もしこの書に表された気持ちがあれば道端で朽ち果てるでしょう。」このように妻は願をかけました。するとこの手紙の気持ち が真実だったので、手紙は韓朋のもとへ届くことができました。韓朋はその手紙を受け取って読み、家族の状況を知りました。手紙にはこのように書いてありました。「浩々と流れる水は渦を巻いて流れ、白く光り輝く月は雲に影を映すのみで（はつきりと姿が見えないので）あります。しかし、清らかな水は何時でも流れているわけもなく、また機を逃してしまつては作物も十分に成長しないでしょう。万物の移り変わりは天の定めに基づくことはないものです。」

長い間顔を合わさず、あなたを想う気持ちには募っておりま
す。百年互いを守り抜くきまりの中で、一時でしたが仲睦
まじく過ごすことができました。あなたの便りもなく、お
母様もお心を痛めておられます。妻は一人で心細く、夜は
孤独に眠り、常に大きな愁いごとを抱えております。聞く
ところによると、鳥たちはつれあいをなくして鳴く声は悲
しみに満ちていると言います。日が暮れて孤独に巢に戻れ
ば、長い夜が待っていることでしょう。泰山と生まれたば
かりの小さなものでは、天地ほどの差があります。（その
ような差の中でも）空にはつがいの鳥が飛び、下には神亀
がおり、昼夜戯れたあとともに連れ添って帰っていきま
す。私にはいったい何の罪があると言うのでしょうか。私一
人では何の希望もありません。海の水は盛んに流れ、風が
なくとも波が立ちます。助けてくれる人は少なく、足を
引っ張る人は多いものです。南の山^①には鳥がおり、北の山
では罨を仕掛けています。鳥が高く飛べば、罨には何の意
味があるでしょう。あなたが平安無事でいてくれさえすれ
ば、私は他に望むことはありません。」韓朋は手紙を手に
して、心から悲しみました。三日間食事ものを通り返し
んでしたが、空腹すら感じませんでした。韓朋は家に帰り
たくなりましたが機会がなく、帰ることは協いませんでし
た。そんなある日、韓朋は懷中していた手紙を不用意に宮

殿の前で落としてしまいました。宋王^①はその手紙を読んで、
文章がとても気に入りしました。すぐに群臣と太史を召して
言いました。「韓朋の妻を手に入れることができたものに
は、金千斤を授け、一万戸の領地を与えよう。」梁伯は王
に対して申し上げました。「私がやつてご覧にいれましょ
う。」宋王は大いに喜び、すぐに八台の車と名馬を遣わせ、
前後につき従っていたのは三千人余りでありました。梁伯
は命令に従い出発すると、疾風怒濤の勢いでした。そして、
三日三晩かけて韓朋の家にたどり着いたのです。使者は
馬車を降りて、門を敲いて呼びました。韓朋の母親は外で
使者を見て恐ろしくなりました。母親は声を出して使者に
尋ねました。「お尋ねしますが、あなたは誰の指示でここ
へ来たのですか。」使者は答えて言いました。「私は宋国か
らの使者です。韓朋と一緒に働いている同僚です。韓朋は
功曹（県知事の助手）をしており、私は主簿（文章の管理
をする秘書）を務めています。韓朋から韓朋夫人宛ての手
紙を頼まれました。」韓朋の母親は、韓朋の新妻に言いま
した。「このお客様のおっしゃったように、韓朋は今役人
になって輝かしい前途があるようだ。」貞淑な妻は答えて
言いました。「昨夜、私はうまく説明できない恐ろしい夢
を見ました。『一匹の黄色い蛇が私を寝台の脚に縛り付け
ました。そして三羽の鳥が並んで飛び、二羽がお互いに激

しく突き合つて、一羽が頭に傷を受け、羽ははらはらと落ち、血はたらたらと流れる』というものでした。そして今、馬蹄が響きわたり諸臣が押し寄せてきました。普段隣近所の人さえ顔を合わせないくらいなのに、まして千里のかなたから来られた方と会う道理がありましようや。お客が遠くから来ているということは、どう考えても信用することはできないのです。もし韓朋が外にいるというのならもちろん私が接待に出ますが、言葉巧みに韓朋からの手紙だと偽っているのかもしれない。お母様はお客に『新妻は病気で臥せっており医薬の治療を受けております』と返事してください。それから併せて、お客が苦勞をしてはるばる遠くからいらしたことはお礼を申し上げてください。」そのように言うのと、使者は返事をしました。「妻が夫からの手紙と聞いてなぜ喜ばないのか。きつと隣近所で誰かと懇意にでもしているのだらう。」韓朋の母親は年老いているので、その使者のことばに含まれた意図に気づきませんでした。新妻は客のこの話を聞いて、顔面が蒼白になって慌てふためき、思いました。「お客のことばのように、私が隣近所で誰かと懇意にしているからだと言われると、もし、私が頑として出迎えなければ、説明がつかず、かえって誤解が深まるでしょう。しかし、私をお客に会わせるようなことになれば、賢く気だてがよくやさしい嫁は失われ

るかもしれません。これより後、姑は嫁を失つて、嫁も姑を失うことになります。もはや慣れ親しんだ織機に別れを告げ、梭も降ろし、これから千年万年もう織ることはないでしょう。井戸の水は清く満ちみちあふれているのに、いつまた汲み上げることができなのでしょう。窯のなかの火は燃え盛りあふれているのに、いつまた私が息を吹き込むことができるでしょう。床や椅子の整ったこの寝室、いつまたそこで眠ることができなのでしょう。家の庭はこんなに草木が広がっているのに、いつまた掃くことができるのでしょうか。菜園の野菜は青々としているのに、いつ摘むことができるのでしょうか。」自らの部屋を出て客間に入る時、貞夫が悲しく泣くので近隣の人まで悲しみました。貞夫は頭を下げて歩いていくと、涙は雨のように溢れました。客間に入って使者に礼をすると、使者は貞夫の身を起し馬車に乗せました。貞夫が馬車に乗ると、疾風怒濤の勢いで走り出しました。韓朋の母は直後、天に向かって呼び地に向かつて喚きました。あまりに大きな声で哭くので、隣人が驚いて集まりました。貞夫は言いました。「天に叫んでも何の役にも立ちません。地に喚いても何も免れることはできません。ひとたび車に乗って去れば、もう帰ることはできないでしょう。」梁伯は速度を速め、しだいに遠ざかっていきました。九千里余りを経てようやく宋国に到着

しました。その頃、宮中に光が照りさしました。宋王は不思議に思つて、すぐに群臣と太史を召して、その不思議な現象の原因について古典を開き占いを立てさせました。博士は答えました。「本日は甲子、明日は乙丑。大臣たちは集まり、王が良い夫人を得るでしょう。」話が終わらないうちに、貞夫はもう到着しました。顔はきめ細やかな肌で、腰はシルクを束ねたようにしなやかで、四肢も美しく、宮廷の美女たちでも協うものはありませんでした。宋王は韓朋の妻を見て大いに喜び、三日三晩、享楽を尽くしました。そして貞夫に礼をとつて皇后とし、前後に侍従をつけ宮中に入れました。貞夫は宮中に入ると、憔悴して樂しまず、病床に伏せつてしまいました。宋王は言いました。「そなたは庶人の妻であつたが、今は一国の母になれたのだ。何の氣にくわなことがあつたというのだ。煌びやかな服を着て、何でも食べたい御馳走が食べられ、宮廷の侍郎が常にそばに仕えている。何の問題があつてそのように心樂しくないのか。」貞夫は答えて言いました。「私は家を離れ親戚とも別れて韓朋の妻となりました。生きていくのにはそれにあつた場所があるもので、貴賤にも区別があるものです。蘆は地にあり、荊は叢にあり、豺と兔はそれぞれ伴侶があり、雉と兔もそれぞれつがいになるものです。魚と鼈はともに水の中にいるものです。宮殿に上がつて楽しいことが

ありましようや。燕や雀は群がつて飛び、鳳凰になつても喜びません。私は庶民の妻で、宋王の妻となることを喜べないのです。」夫人が悩み樂しまずにいるので、王は言いました。夫人が愁い悩んでいるのだが、誰か良い方法はないものか。」梁伯は言いました。「私に良い方法があります。韓朋は三十歳未満で、二十歳には余りがある。容姿は優れて美しく、その黒髪に見えるように根は純粹で、白玉の緒止めのような齒に、真珠のような目があるから、夫人は韓朋のことが氣になつて樂しむことができないのでしょうか。早めに韓朋の身体を傷つけてしまひ囚人としてしまえばよいのです。」そこで宋王は、その提案を受け入れました。すぐに韓朋の二本の前齒を叩き折り、その上彼の服をぼろぼろにして、清陵台の建築にあたらせました。貞夫がこのことを聞いた後、ひどく悲しみ、心の中は始終言いつくせない辛い思いで満ち溢れました。貞夫は宋王に相談して言いました。「清陵台を建築したのでしたら、ちよつと行つて見てみたいものです。」宋王はそれを許しました。すると（宋王は貞夫に）豪華な馬車と駿馬を賜わり、三千人余りもの大勢の人を身の周りに侍らせて、清陵台にやつてきました。韓朋はと言いますと、刻んだ馬草を馬に与えているところで、妻を見て恥じ入り、草で顔を覆いました。こんな風景を見た貞夫は涙が雨のように止まりませんでした。

貞夫は言いました。「宋王^③が綺麗な服をどんなに用意してくれても、私はそれも着ません。王が美味しい食べ物をどんなに用意してくれても、私はそれも食べません。私のあなたへの想いはあたかも乾ききって水を探し求めるかの如くです。あなたが苦痛を受ける様子を見て、私の胸は張り裂けそうです。やつれた様子でいるのは宋王のせいでしょう。どうして恥じて、私を避けるのですか。」韓朋は答えて言いました。「南山^④には、一つの枝が二股に分かれ、葉っぱも小さく中心の平らな荊棘という植物があり、やつれた私の今の様子はまさにそのようで、あなたに顔向けする気持ちになれません。東に流れる水、西海の魚も賤しさを離れて尊さを求めると言います。その意は何を指しているのでしょうか。」貞夫はその話を聞き、頭を下げて戻りましたが、涙は雨のように流れました。すぐに着物の裾のあたりを三寸ほど斬りとって、指を噛んでその血で密かに手紙を書き、その手紙を矢に付けて、韓朋に向けて射、手紙を届けました。そして韓朋はその手紙を手にとると、まもなく自殺してしまいました。宋王はこのことを聞き、心の底から驚き、すぐに大臣たちに聞きました。「韓朋はどのように死んだのか。誰かに殺されたのか。」梁伯は答えました。「韓朋が死んだ時、傷ついたところはどこもございませんでした。ただ三寸ほどの絹に書いた手紙があり、韓

朋の頭の下に結わえてありました。」宋王はすぐにこの手紙を取って読みました。貞夫は手紙にこのように書いていました。「天から雨がザアザアと、魚は池の中で泳いでいる。大きな太鼓は声もなく、小さな鼓も音もなし。」宋王は言いました。「誰かこの手紙を解読できるか。」梁伯が答えて言いました。「私は解読することができます。『天から雨がザアザアと』というのは韓朋の涙、『魚は池の中で泳いでいる』というのは彼の状況、『大きな太鼓は声もなく』というのは彼の気概、『小さな鼓も音もなし』は彼の想いです。まさに天下はこの語に尽きます。その意義は深いものです。」貞夫は言いました。「韓朋はもう亡くなりました。もはや何も言うことはありません。ただ願わくは大王の恩徳によって、礼にかなった葬儀を行う方が、後世に影響を残さず済むことになりましょう。」宋王はすぐ人を城東に派遣し、百丈もの墓穴を掘り、三公の礼儀で埋葬しました。貞夫はそれを見に行くことを王に請い求め、「そこで長い時間をとどまることはいたしません」と言うので、宋王もそれを許しました。葬儀用の車に乗り、前後三千人余りの侍従をつけ、韓朋の墓所にやってきました。貞夫は車を降りると、墓の周りを三回繞り、号泣して泣き崩れました。「埋葬に際してあなたを呼んでも、貴方はもう答えられない。」その声は雲にもとどくほどでした。振り返って百官

に辞して言いました。「きつと天は私に応えてくれるでしょう。『一馬には二つ鞍を載せず、一女は二夫に仕えない』と言うのですから。」言い終わるとすぐに清陵台へ入っていき、苦酒を衣類に含ませて、葱のようにもろく破けやすくすると（台から墓穴に向かって倒れ落ちました）。周りのものは止めようとはしましたが、（衣はもう破れ）手にかかりません。百官はみな驚き慌てましたが、皆な心をうちました。そのことは、すぐに使者を遣わして宋王に知らせが行きました。王はこのことを聞くと多に怒り、ベッドの脇から刀をとると、家臣を四、五人も斬り殺してしまいました。早馬を出して奏し、百官を集めました。天から大雨が降り、水は墓穴に流れ込み、救い出すことは難しい状況でした。梁伯は王を諫めて言いました。「絶対に助かることはありません。」宋王はすぐに人を遣って墓を掘らせました。しかし貞夫は見つからず、青と白の二つの石を見つけることができただけでした。宋王はこれをしげしげと見ると、青石を道の東に埋め、白石を道の西に埋めました。すると道の東からは桂の樹が生え、道の西からは梧桐が生えてきました。枝々は交互に向き合い、葉は重なり合って籠をなし、根の下は繋がり合い、下には泉が流れて往来を妨げています。宋王は外へ出た時にこれを見て尋ねました。「これは何の樹だ。」梁伯は答えて言いました。

「これは韓朋の樹です。」「誰かこれがどのような意味か解りできるか。」梁伯は答えて言いました。「私は解釈できません。『枝々が互に向き合い』はその状況、『葉は重なり合って籠をなし』はその想い、『根の下は繋がり合い』はその気概、『下には泉が流れて往来を妨げ』は涙を表していると考えます。」宋王はすぐに人を遣り、この樹を伐つてしまいました。⁽⁶⁾三日三晩、血がこんこんと流れ続けました。二枚の札がそこに落ちると、それがつがいの鴛鴦に変わり、翼を広げると高々と飛び上がり、二人の故郷へと帰って行きました。ただ一本の美しい羽毛を残して。宋王はこれを手に取りそつと全身を撫でますと、大いに光彩を放ちました。ただ、首の上は撫でていなかったで、すぐにその毛で撫でると、その頭はすぐに落ちてしまいました。庶人の妻を奪い、賢良な家臣を謀殺したことにより、三年とたたずに宋国は滅びてしまい、梁伯父子も辺境に追いやられてしまいました。善い行いをすれば福がやってくるし、悪い行いをすれば災いとなるものです。

また、上掲変文（賦）と密接な関連の認められる資料が目下、二点程現存する。一つは、敦煌本注千字文（S五四七二）41「女慕貞潔」注である。もう一つは、西夏本類林六貞潔に見えるもので（金、王朋寿編の類林雑説には不

見)、共に稀覯に属する、極めて貴重な資料である。それら二点の資料の本文を併せ示せば、次の通りである。²⁴⁾

敦煌本注千字文

喻貞夫之事韓朋、宋王聞其美、聘以為妃捨賤。曰、卿本庶人之妻、今為一國之母。衣即綾羅、食則咨口。何有不樂、而不歎喜。貞夫曰、妾本辭家別親、出適韓朋。生死有處、貴賤有殊。双狐有党、不樂神竜。魚鼈水居、不樂高堂。鸛雀有群、不樂鳳皇。庶人之妻、不樂大王。韓朋須賤、結髮夫婦。宋王雖貴、非妾独有。又辭曰、蓋聞、一馬不被二鞍、一車不串四輪。妾既一身、不事二君。乃投朋廣而死。此貞潔之志全也。斯之者、世代之所希奇。当今之時、未見也。

西夏本類林

韓憑妻甚美、宋康奪之、使韓憑為青陵台、而欲娶其妻。妻作詩曰、南山有鳥、北山張羅。鳥自高飛、羅當奈何。又曰、狐狸有伴、不樂北王。魚鼈有水、不樂高堂。鸛鷦有巢、不樂鳳凰。女身賤醜、不樂宋王。遂自殺。韓憑聞之、亦自殺。宋王怒、命葬彼等屍道旁。後各生一樹、屈体相就。宋人遂号曰相思樹。周末時人。此事搜神記中説

敦煌から出土した変文の一類、韓朋賦のテキストとしては一九五七年の『敦煌変文集』刊行時、次の六種が知られて

いた。

P 二六五三 (原卷)

S 二九二二 (甲卷。『敦煌変文集』、伯に誤る)

S 三二二七 (乙卷)

P 三八七三 (丙卷。『敦煌変文集』、斯に誤る)

S 四九〇一 (丁卷)

S 三九〇四 (戊卷)

『敦煌変文集』は、P 二六五三を底本とし、甲―戊巻との校合を試みたものである。その後、

S 一〇二九一

Δx 一〇二七七

の二本の残存が確認され(原巻の巻首題、尾題に、「韓朋賦一首(巻)」とある)、現在では計八本、五系統(丁、戊巻及び、S 一〇二九一は、元の一本の分かれ。Δx 一〇二七七は、僅か三行のみ存、甲巻と同系統)の存在が知られるに至っている。²⁵⁾ 敦煌本注千字文は、出典を注記しないが、西夏本類林の方には末尾に、「此事搜神記中説」(復元本287頁では、「出搜神記」とあって、出典を搜神記とすることが興味深い。とは言え、それは前掲、搜神記十一294と較べ、歌謡二首が全く異なり(第二首は、敦煌本注千字文のそれと共通。また、それらは、全て変文(賦)に存している。後述)、とても同じ搜神記とは思われない。そもそも現行

二十卷本搜神記というのが明、万曆（一五七三—一六二〇）中刊とされる、胡震亭編の秘冊彙函を初刊とし、それ以前へは溯らないことから、現行本を晋、干宝當時のものと見ることに對しては、かねてから根強い疑いの存することを想起すべく、八卷本や敦煌本句道興搜神記などの存在も併せて、西夏本類林所引の搜神記（また、敦煌注千字文）の本文については、今後の再考を要しよう。特に西夏本類林の本条の出現に關して言えば目下、それが類林雜説などに見当たらないにせよ、搜神記という出典注記が末尾に置かれる等の特徴から、類林本体に本条が備わっていた可能性は、極めて高いと考えられる。そして、その類林本体は、散逸してしまつてはいるが、蒙求その他、幼学を始めとして、その後世に及ぼした影響は、甚だ大きかったことを思い併せると、編者の于立政は、初唐の六六—六七七年間に没しているので、西夏本類林本条の伝える、搜神記の韓朋物語の形こそは、隋唐以前の搜神記の形、或いは、変文（賦）の淵源を示唆する資料として、新たに位置付けられるべきものと思われるのである。

ここで、三国伝記所引の歌謡、

狐格^{コカク}双ヘル有り、神竜^{シムリウ}タラン事ヲハ不^{ネカハ}翼。

龜^{ウミカメ}水ニ居シテ、高台^{タカダイ}不^レ翼。

烏鵲^{ウミカメ}ノ巢、鳳凰^{フウキョウ}ヲ不^レ翼。

庶人^{ソジン}ノ妻、宋王^{ソウオウ}ヲ不^レ翼

について、その来源を探つてみる。そもそも韓朋物語をめぐる歌謡に關しては、搜神記の末尾に、「今睢陽有韓憑城、其歌謡至今猶存」とあることから（睢陽は、河南省商邱県南）、相当早くから伝えられていたことが確實であつて、搜神記中に見える、ヒロイン何氏による謎々歌「其雨淫淫、河大水深、日出当心」も、その一つとして捉えることが出来る。現に変文（賦）にも、幾つもの歌謡が散見し、今仮にそれらに對して①—⑥の番号を振つてみた（なお a—c は、無名詩集との関連、また、イ—へは、画象鏡の場面への対応を表わすもので、後述に従う）。①は、故郷の貞夫が宋国の韓朋へ奇跡的に届けた歌（後述の烏鵲歌其の一）、②は、貞夫が宋王に答えた歌（同、烏鵲歌其の二）、③は、馬を飼う韓朋に貞夫が愛を問う歌、④は、韓朋がそれに答えた歌、⑤は、貞夫が矢に付けて韓朋に放った歌、⑥は、貞夫が遺書として宋王に残した歌である。変文（賦）に見える歌謡①—⑥の内、三国伝記に見える歌と関わるのが、②の貞夫が宋王に答えた歌、

② 辞家別親、出事韓朋。

生死有処、貴賤有殊。

蘆葦有地、荊棘有叢。

豺狼有伴、雉兔有双。

魚鼈有水、不樂高堂。

燕雀群飛、不樂鳳凰。

妾是庶人之妻、不樂宋王之婦

の第七句（十）以下であることが知られるだろう。その②はまた、敦煌本注千字文に、

②妾本辞家別親、出適韓朋。

生死有処、貴賤有殊。

双狐有党、不樂神竜。

魚鼈水居、不樂高堂。

鷓鴣有群、不樂鳳凰。

庶人之妻、不樂大王

と見えていて、変文（賦）②との関係の深さを窺わせると共に、その第五句以下が三国伝記の歌に該当し、敦煌本注千字文は、変文（賦）②における第五、六句を失っているようである。一方、西夏本類林へ目を転じると、西夏本類林では、

①南山有鳥、北山張羅。

鳥自高飛、羅当奈何。

②（又曰）、狐狸有伴、不樂北王。

魚鼈有水、不樂高堂。

鷓鴣有巢、不樂鳳凰。

女身賤醜、不樂宋王。

のように、①②二首の歌謡が掲げられ、三国伝記のそれは、西夏本類林における二つ目の歌謡②に該当しており、西夏本類林②もまた、三国伝記と同様に、変文（賦）②の第一―六句を失い、また、敦煌本注千字文②の第一―四句を失っている。加えて西夏本類林には、例えば敦煌本注千字文にはなかった、一つ目の①も見え、それは、変文（賦）①の、

①南山有鳥、北山張羅。

鳥自高飛、羅当奈何。

君但平安、妾亦無他

に該当することが明らかである（但し、その第五、六句を欠く）。これらの事実が、変文（賦）、敦煌本注千字文、西夏本類林を一類に括った理由である。今、三国伝記の「狐貉」の歌から、変文（賦）以下の歌謡を眺めると、図三の如くなるであろう（⑤も加えた）。

四

図三の内容を、簡単に纏めるならば、三国伝記の狐貉歌は、変文（賦）の②（の後半）に当たり、その②はまた、敦煌本注千字文にも見え、西夏本類林にも見えている（但し、後半）ということになる。さらに西夏本類林には、変文（賦）の①も見え（但し、第五、六句欠）、搜神記の歌

図三 三国伝記の狐貉歌

変文（賦）

西夏本類林

①南山有鳥、北山張羅。

①南山有鳥、北山張羅。

鳥自高飛、羅当奈何。

鳥自高飛、羅当奈何。

君但平安、妾亦無他。

敦煌本注千字文

②辞家別親、出事韓朋。

②妾本辞家別親、出適韓朋。

生死有处、貴賤有殊。

生死有处、貴賤有殊。

蘆葦有地、荆棘有叢。

三国伝記
狐貉双ヘル有り、神竜タラン事ヲハ不^{ネカハ}翼。

豺狼有伴、雉兔有双。

双狐有党、不^レ楽神竜。

②（又曰）狐狸有伴、不^レ楽北王。

龜^{ヘフ}鼈^{ミカメ}水ニ居シテ、高台^サ不^レ翼。

魚鼈有水、不^レ楽高堂。

魚鼈^ニ水居、不^レ楽高堂。

魚鼈有水、不^レ楽高堂。

烏鵲ノ巢、鳳凰ヲ不^レ翼。

燕雀群飛、不^レ楽鳳凰。

鷦鷯有群、不^レ楽鳳凰。

鷦鷯有巢、不^レ楽鳳凰。

庶人ノ妻、宋王ヲ不^レ翼。

妾是庶人之妻、不^レ楽宋王之婦。

庶人之妻、不^レ楽大王。

女身賤醜、不^レ楽宋王。

搜神記

⑤天雨霖霖、魚游池中。

⑤其雨淫淫、河大水深、日出当心。

大鼓無声、小鼓無音。

謡は、変文（賦）の⑤に該当するということである。また、三国伝記と変文（賦）などの②以下を、聊か細かく見てゆくと、第一句「狐格（コツク）（コツク）双ヘル有り」の狐字は、西夏本類林にしか見えず（敦煌本注千字文「孤」、双字は、敦煌本注千字文にしか見えないが、その「双ヘル有り」の言い回しは、変文（賦）の第二句「有双」と一致する。第二句「神竜タラン事ヲハ不^{ウミカミ}翼^ハ」は、敦煌本注千字文「不楽神竜」としか一致しない（この翼、楽字から、変文（賦）以下の楽字は、ゴウ音の願う意と解釈すべきである（後藤昭雄氏教示）。第三句「魚鼈水ニ居シテ」は、敦煌本注千字文としか一致しない。第五句の烏鵲は、変文（賦）、敦煌本注千字文の燕雀に似るが（烏鵲はかささぎ）、注目すべきは、烏鵲の語が後述、烏鵲歌の命名の元となっていることで、三国伝記の狐貉歌というものは、やはり韓朋物語の烏鵲歌の系譜に連なることが、その語から判明することである。第六句は、変文（賦）以下と一致する。第七句は、変文（賦）、敦煌本注千字文と一致し、第八句は、変文（賦）、西夏本類林と一致していることが知られよう。細かな比較は、この辺りで止めるが、三国伝記を変文（賦）以下の資料と較べた場合、変文以下と一つしか一致しない場合もあり、二つ以上と一致する場合もあって、且つ、全てと一致しないこともある、ということである。そして、

問題となるのは、三国伝記の狐貉歌が目下、変文（賦）以下の三資料にしか見当たらないことである。中で、例外的に管見に入つたものとして、宋、賛寧撰とされる逸書、物類相感志の、

（……乃作詩、以明意。）

以庶人妻、不願奉公王

を上げることとも出来るが（香葉抄所引。金宝鈔にも）、線部は、第七、八句に該当するに過ぎないなど、三国伝記の典故には擬し得ないだろう。

三国伝記の狐貉歌、と言うより、変文（賦）の歌謡①②については、もう一つ考えておかねばならない問題がある。それは所謂、烏鵲歌と呼ばれる歌謡との関係である。烏鵲歌とは、例えば清、沈徳潜撰、古詩源一の古逸に、

烏鵲歌（形管集。韓憑為宋康王舍人。妻何氏美。王欲之、捕舍人、築青陵之台。何氏作烏鵲歌以見志。遂自縊。）

南山有烏、北山張羅。烏自高飛、羅当奈何。

烏鵲双飛、不樂鳳凰。妾是庶人、不樂宋王（略）とされる歌のことである（形管は、どうかん女官の用いる赤筆の意）。古詩源に言う形管集は、散逸し、現在に伝わるのは、それを再編した明、張之象撰、形管新編八巻のみとなっていて、その形管新編二宋「韓憑妻何氏」の本文を示せば、

次の通りである（四庫全書存目叢書補編13による）。

宋韓憑妻何氏

烏鵲歌二首

韓憑、戰國時、為宋康王舍人。妻何氏美、王欲之、捕舍人、築青陵台。何氏作烏鵲歌、以見志、遂自縊死。韓亦死。王怨埋之。宿夕木生墳、有鴛鴦棲其上、音声感人。化為胡蝶。台今在開封。

南山有烏、北山張羅。烏自高飛、羅当奈何。

其二

烏鵲双飛、不樂鳳凰。妾是庶人、不樂宋王。

答夫歌

何氏答夫歌云云。康王得其書、以問蘇賀。賀曰、

雨淫淫、愁且思也。河深深、不得往來也。日当心、

有死志也。俄而憑自殺。何氏亦死。

其雨淫淫、河大水深、日出当心

烏鵲歌と呼ばれるものが、果してどれ位溯るのかということとは明、陳耀文の天中記十八夫妻に、「何氏作烏鵲歌」として歌を記し、出典に「九国志、玉台新詠」を上げているのによれば宋、路振撰の九国志、陳、徐陵撰の玉台新詠に溯る如くに見えるが、それらいずれの今本にも見当たらず（二首の歌そのものは宋、楊齊賢による李白「白頭吟」の「青陵台」注に見えている（分類補注李太白詩四）、烏鵲

歌の称は、管見の範囲では元、周達觀撰誠齋雜記（重較說郭三十一所収）に、「何氏作烏鵲歌」として、その第二首目を上げる以前には溯れない（誠齋雜記上にも）。対する第一首目はまた、青陵台歌とも呼ばれたようである（明、楊慎撰風雅逸篇六に、「青陵□歌九域志」、また、明、馮惟訥撰古詩紀一に、「二首見彤管集。一作青陵台歌。見九域志、上前一首」など）と見えるが、九域志は、新定九域志逸文であろうとされている（清、杜文瀾撰古詩言二十六）。青陵台は、変文（賦）に見える、宋王が韓朋に築かせた台の名だが、その話は早く晋、袁山松撰郡国志に見える（太平環宇記十四、太平御覽一七八所引）。古詩源では判然としないが、彤管新編を見ると、烏鵲歌というものが、二首の歌から成ることが知られよう。烏鵲歌が何故、重要となるのかということとは、その二首の淵源に当たると、変文（賦）へ溯てみると、よく理解できる（図四参照）。図四を見ると、烏鵲歌の第一首は、変文（賦）の①の歌から（但し、①の五、六句目を欠く）、第二首は、変文（賦）の②の歌から出たものに相違ない（但し、②の十一—十四句に該当し、一—十句を欠く）。変文（賦）の①②の歌は、作者こそ同じ貞夫ながら、歌を贈られた対象は、①が夫の韓朋であり、②が敵役の宋王となっていて、物語の流れから見れば、そもそも奇跡としか言い様のない方法で、届けられた

彤管新編二

烏鵲歌二首

南山有烏、北山張羅。烏自高飛、羅当奈何。

変文（賦）

① 南山有烏、北山張羅。（符有）

烏自高飛、羅当奈何。（延）

君但平安、妾亦無他。（高平）

② 辞家別親、出事韓朋。

生死有処、貴賤有殊。

蘆葦有地、荆棘有叢。（寒）

豺狼有伴、雉兔有双。

魚鼈有水、不樂高堂。

燕雀群飛、不樂鳳凰。

妾是庶人之妻、不樂宋王之婦。

其二

烏鵲双飛、不樂鳳凰。妾是庶人、不樂宋王。

ヒロインからの手紙（①）を、韓朋が不用意にも宋王の殿前で落としてしまったことから、事件が起きるという、役割を負わされた①と、貞夫が宋王に対し、夫への愛を明言した②とでは、①と②とが全く内容を異にする別歌とされ

ていることは、自明とすべき事柄なのであった。ここで指摘しておきたいのはまず、例えば彤管新編に録された烏鵲歌二首は前掲、搜神記から出たものなどではないことである。その第一首については、再度触れることとして、殊に

図四 烏鵲歌と変文（賦）

第二首に關して言うなら、その淵源は目下、変文（賦）以下の三資料また、日本の三国伝記にしか見当たらないことが大問題なのである。特に烏鵲歌というタイトルともなる、その第一句冒頭「烏鵲」の語が、変文（賦）、敦煌本注千字文では「燕（鶯、鷦）雀」（燕雀は、つばめとすずめ）、西夏本類林では「鷦鷯」（鷦鷯は、みそざざい）となっていて、「烏鵲」となっているのが三国伝記だけであることは、頗る興味深い事実とすべきである。加えて、変文（賦）の②は、烏鵲歌に相当する末四句以前に、なお十句を存し、敦煌本注千字文が以前に八句、西夏本類林及び、三国伝記両者が以前に四句を存する点（図三参照）、その両者の②の句形が同じであることは、三国伝記の出典が于立政の類林であることを示唆しているが（日本国見在書目録に、「類林五」などと見える）、ともあれ、烏鵲歌第二首の淵源を辿り得る資料というものは、三国伝記を含め、変文（賦）以下四つの資料に限られる点を、改めて強調しておきたく思う。

烏鵲歌の第一首即ち、変文（賦）の①に対しては、①自体とはまた、別の観点からのアプローチが必要である。それは、先に将門記の所で触れた、①の別名を紫玉歌と称し（楽府詩集八十三等）、そこに韓重というヒーローの絡む、別の物語を伴ったケースからのアプローチである。韓重

（紫玉）物語としてよく知られるのが、やはり搜神記十六394であろう。その本文を示せば、次の通りである。

呉王夫差小女、名曰紫玉。年十八、才貌俱美。童子韓重、年十九、有道術。女悦之、私交信問、許為之妻。重学於齐鲁之間。臨去、属其父母、使求婚。王怒、不与女。玉結氣死、葬閭門之外。三年重帰、詰其父母。父母曰、王大怒、玉結氣死、已葬矣。重哭泣哀慟、具牲幣、往弔于墓前。玉魂從墓出、見重。流涕謂曰、昔爾行之後、令二親從王相求、度必克從大願。不図別後、遭命奈何。玉乃左顧宛頸而歌曰、

南山有烏、北山張羅。烏既高飛、羅將奈何。
意欲從君、讒言孔多。悲結生疾、沒命黃壚。
命之不造、冤如之何。羽族之長、名為鳳凰。
一日失雄、三年感傷。雖有衆鳥、不為匹双。
故見鄙姿、逢君輝光。身遠心近、何當暫忘。

歌畢、歔歔流涕、要重還家。重曰、死生異路。懼有尤愆、不敢承命。玉曰、死生異路、吾亦知之。然今一別、永無後期。子將畏我為鬼而禍子乎。欲誠所奉、寧不相信。重感其言、送之還家。玉与之飲讌、留三日三夜、尽夫婦之礼。臨出、取径寸明珠、以送重、曰、既毀其名、又絕其願。復何言哉。時節自愛。若至吾家、致敬大王。重既出、遂詣王、自說其事。王大怒曰、吾女既

死、而重造訛言、以玷穢亡靈。此不過發冢取物、託以鬼神。趣收重。重走脫、至玉墓所訴之。玉曰、無憂。今婦白王。玉粧梳、忽見玉、驚愕悲喜。問曰、爾緣何生。玉跪而言曰、昔諸生韓重、來求玉、大王不許。玉名毀義絕、自致身亡。重從遠還、聞玉已死。故齎牲幣、詣冢弔唁。感其篤終、輒與相見、因以珠遺之。不為發冢、願勿推治。夫人聞之、出而抱之、玉如烟然。

（吳王夫差の末娘は、その名を紫玉といった。歳は十八、才色兼備の女性であつた。また韓重という若者で、歳は十九、道術の心得のある者がいた。娘は重に思いを寄せ、人目を忍んで文を交わし、重の妻になろうと約束していた。重は齊・魯のあたりに勉強に出かけることになった。出発するにのぞんで、重は両親に、紫玉との結婚を呉王に申し入れてもらうように頼んでおいた。王は怒って、娘を嫁にやらなかった。玉はふさぎこんで死んでしまい、都の閭門の外に葬られた。三年たつて重が帰り、両親を問いつめると、両親は「王さまはたいへんなご立腹で、玉さまはふさぎこんでお亡くなりになり、もう埋葬されてしまった」と話して聞かせた。重は悲しみのあまり大声をあげて泣き、供物を用意して、墓前に弔いに行った。玉の靈魂が墓の中から現れ、重と対面した。涙を流して言うには「先

年あなたがお出かけになるときに、ご両親に頼んで父王へ求婚の申し入れをなさいましたから、きつと大願がかなえられると思つておりましたのに。あなたとお別れしてから、こんな運命になつてしまおうとは思ひもしませんでした」と。玉はそこで左の方を向いて首をのばして歌つた。

南の山に鳥がおり、北の山に網を張る。

鳥は高く飛び立つて、網に捕らえるすべもない。君に添わんと願うのに、あまりに讒言が多すぎた。つもる嘆きに病氣になつて、今は死んで黄泉の国。ああ 儚いこのさだめ、この口惜しさをどうすべきか。

鳥の王者、その名は鳳凰。

或る日雄を失えば、雌は三年悲しんで。

数多の鳥がいようと、連れあいとはならないという。

そのため私も姿を現してあなたにお会いしたわけですから。

身は離れても心は近く、どうして暫くもわすれることなどできません。

歌い終わると、すすり泣いてしきりに涙を流し、墓の中に戻ろうと重を誘う。重は「死者と生者とは世界が

異なるもの。過ちを犯すことは出来ないから、その願いは受け入れられない」と言った。玉は「死者と生者の世界が異なることは、私も承知しております。しかし今ここでお別れしてしまえば、永久にお会いすることはできません。あなたはまた私が幽霊だからあなたに祟るだろうと心配なさるのですか。私が真心を捧げようとしておりますのに、どうして信じて下さらないのです」と言う。重はその言葉に心を動かされ、玉を墓の中まで送って行った。玉は重と酒を飲みかわし、三日三晩引き留めたうえ、夫婦となる礼（結婚の儀）を果たした。墓を出る時になり、玉は差し渡し一寸の美しい珠を取り出して、重に贈ると「貞節の名も損なわれてしまい、そのうえ願いも絶たれました。また何を申し上げることがございましょうか。くれぐれもご自愛下さい。もし私の家にお立ち寄りになったなら、父によりしくお伝えください」と言うのだった。重は外へ出たのち、王の宮殿へ行き、事の次第を語った。王は烈火のごとくに怒り「私の娘はとうに死んでおるに、重めはでたらめを言って、霊魂をけがした。これは墓をあばいて物を盗み出し、それを亡霊のせいにするというに違いない」と言った。すぐに重を捕らえようとした。重は逃げ出し、玉の墓の前に着くと玉に

訴えた。玉は「ご心配なさいますな。今から帰って父に申しましょう」と言った。玉が化粧をすませ、不意に王の前へ姿を現すと、王は驚愕して悲喜こもごもの様子であった。問うには「そなたはどうして生き返ったのだ」と。玉は跪いて「先年韓重と申す書生が、私を求めに参りましたが、お父さまはお許しになりませんでした。私の貞節の名は破れて信義も失われましたので、我と我が身を滅ぼすことになりました。重が遠方から帰って参りまして、私が死んだことを聞き及びました。そこで供物をそなえ、墓まで弔いに来てくれたのです。その変わらぬあつい情に感激しましたので、すぐに顔を合わせ、そこで珠を贈ったのです。墓をあばいたのではありませんから、どうか彼をお責めにならないで下さい」と語った。妃がこれ聞きつけ、奥から出てきて姫を抱きしめようとしたが、玉の姿はかき消すように見えなくなってしまうた

殆ど同文のものが録異伝（太平広記三二六「韓重」所引）にも載るが、ヒロインの名を、玉としている。紫玉の名は、幼玉（後述越絶書）、滕（勝）玉（呉越春秋四）、紫珪（南齐、焦度撰稽神异苑（永樂大典二二五六等所引）、異苑六「劉元」等）など、様々に言われる。さて、右搜神記から改めて紫玉歌を取り出し、その本文を示せば、次のように

なる。

南山有鳥、北山張羅。鳥既高飛、羅將奈何。意欲從君、讒言孔多。悲結生疾、沒命黃墟。命之不造、冤如之何。羽族之長、名為鳳凰。一日失雄、三年感傷。雖有衆鳥、不為匹双。故見鄙姿、逢君輝光。身遠心近、何當暫忘——線部第一—四句が、韓朋物語における鳥鵲歌の第一首と、全く同じであることが知られるであろう。ところで、搜神記の韓重物語も、無下に新しいものでないことは、それが越絶書に載っていたらしいことに窺えよう。唐、陸広微撰の呉地記、女墳湖（江蘇省呉県）の条に引かれた、越絶書の本文を示せば、次の通りである（今本欠）。

越絶書曰、夫差小女字幼玉、見父無道、輕士重色、其国必危、遂願与書生韓重為偶。不果、結怨而死。夫差思痛之、金棺銅椁、葬閭門外。其女化形而歌曰、南山有鳥、北山張羅。鳥既高飛、羅当奈何。志欲從君、讒言孔多。悲怨成疾、沒命黃墟

やはり末尾に紫玉歌が引かれるが、前掲のそれに較べて短く、第九—二十句を欠いていて（鳥—鳥以下、文字の異同もある）、変文（賦）以下に見える鳥鵲歌同様、紫玉歌にも消長のあったことを思わせている。問題は、韓朋、韓重という二つの物語が、例えば鳥鵲歌（紫玉歌）のように、明らかに同一の歌謡を共有しているにも関わらず、両物語

の関係を追究する試みが、これまで殆どなされて来なかったことである。その関係は、変文（賦）が搜神記の紫玉歌を引いたというような、単純なものではないだろう。変文（賦）が唐代に作られたものとするならば、そのような捉え方も出来ようが、例えば最新の図像学の成果から、変文（賦）の内容は、早く漢代に溯ることが知られているし、また、そのヒーローを「孺子」と榜題する事実など、韓重物語における「童子韓重」（搜神記、録異伝）、「書生韓重」（越絶書）との密接な関連が見て取れるし（後述）、さらに韓重物語において、重の外遊期間が「三年」とされ、重と玉との結婚期間が実質、「三日三夜」とされることなど、両物語には古来、深い関係があったものと想定せざるを得ないのである。すると、韓朋と韓重の二つの物語は元、例えば鳥鵲歌をめぐる、同じ一つの物語から出たものではなかったか。このように仮定してみると、鳥にも風にも託せない①の歌を、韓朋の許に届けるという、不思議な力を持つ貞夫と、死後になお墓から出て、生身の韓重の許に姿を現す紫玉との間には、ロマンスにおいて時空を越えた愛を具現する、ヒロインの表裏を見ることも出来よう。或いは、鴛鴦の剣羽に象徴される、死後に王を殺した韓朋と、「有道術」（搜神記）とされ、地下の冥界から無事に帰還する韓重との間にも、生死を超越する、ヒーローとしての脈絡

を辿ることが可能である。生前の韓朋は一見、何も特殊な力を持たないかの如く描かれているが、その韓朋との関連が気になる人物として、韓寿という男がいる。賈充女は、彼を恋う歌をいつも歌ったが（歌詞は伝わらない）、やがて韓寿が彼女の許を訪れ、二人は結ばれた（世説新語六惑溺5。この話は、例えば幼学の蒙求413「韓寿窃香」注にも採り入れられ、とても有名である）。韓寿も一介の美青年に過ぎないかのようだが、韓寿には、人の越えられない堀を越えるという特殊な能力があつて、その様子は伝奇、崑崙奴の磨勒を彷彿とさせるものがある。歌をめぐるロマンスが物語、伝説などへと結実してゆく過程には、今日の我々の目には留まりにくい、様々な出来事が起きていたに違いない。韓朋物語の真の姿を知るためには、文学という枠組を一旦取り外し、学際学の地平において人文学の諸叡智を動員させる必要がある。話が広がり過ぎたが、例えば形管新編に見える烏鵲歌二首と、変文（賦）における歌謡①②との間には、韓朋物語の成立や流伝をめぐる、幾つかの重要な問題の見え隠れしていることが、了解されると思う。さて、形管新編は、烏鵲歌二首に次いで、搜神記に見える、「其雨淫淫」歌を、答夫歌の名前で録している（古詩紀一には、「韓憑妻答夫歌」、明、梅鼎祚撰皇朝文紀六には、「遺夫書」等とする。また、同書は続けて、「王利其生、

不利其死、願以屍骨、賜憑而合葬乎」を上げて、「与康王書」と呼び、出典を「干宝搜神記」としている）。また、形管新編の地の文を見ると、韓憑の憑字を始めとして、搜神記と共通する点が多いのだが、何より烏鵲歌自体、現行搜神記本文からは出て来得ないし、ヒロインが「自縊死」とか、「化為胡蝶」とか（このことは、太平環宇記十四所引搜神記に、「化為蝶」と見え、また李商隱が「青陵台」詩に、「莫訝韓憑為蛺蝶」と詠んでいることでよく知られる）、青陵「台今在開封」などとされる点は、非常に特異とすべきである。形管新編は、いずれ形管集によつたのであるうが、それはまた、分類補注李太白詩四「白頭吟」の元、楊齊賢注に、

戰国韓憑、為宋康王舍人。妻何氏美、王欲之、使舍人築青陵台。何氏作詩曰、南山有鳥、北山張羅。鳥自高飛、羅當奈何。又、烏鵲双飛、不樂鳳凰。妾是庶人、不樂宋王。遂自縊。韓亦死。王怒埋之。宿夕木生墳、有鴛鴦栖其上、音声感人。化為胡蝶。台在開封と記されるものと、極めてよく一致することが注目されよう。例えば形管新編をめぐる謎、言い換えれば烏鵲歌の成立の解明が、変文（賦）①②の研究において不可欠な、今後の課題なのである。

或いは、変文（賦）一般と歌謡との関係という観点に立

つなら、早くに容肇祖氏の指摘された、変文（賦）における韓朋、貞夫死後の後日譚を綴る文章と、歌謡「為焦仲卿妻作并序」（「孔雀東南飛」）との密接な関連の問題がある。

「為焦仲卿妻作」というのは、後漢末期の建安（一九六—二二〇）年間のこと、焦仲卿の妻劉氏（名は、蘭芝）が母に家を追い出され、さらに再婚を迫られた妻は、池に入つて死んでしまい、夫の仲卿も庭の木で首を吊るという事件が起きた。「為焦仲卿妻作」は、事件の後程なく、無名氏によつて作られた、文学史上の叙事詩の傑作として名高い、長編（一七四五字）の作品である。容氏が指摘されたのは、「為焦仲卿妻作」における末段、夫婦の墓に植えた松柏、梧桐が相連なつて一つとなり、一番いの鴛鴦が向き合つて明け方まで鳴き続けたという部分（以下は、玉台新詠一による。末尾（一）内に鈴木虎雄氏の訳〈岩波文庫版〉を付す）、

両家求合葬、合葬華山傍。
東西植松柏、左右種梧桐。
枝枝相覆蓋、葉葉相交通。
中有双飛鳥、自名為鴛鴦。
仰頭相向鳴、夜夜達五更。
行人駐足聽、寡婦起彷徨。
多謝後世人、戒之慎勿忘。

（焦・劉の両家では仲卿と蘭芝とをいつしよに葬らうとねがひ、そのとほりに華山の傍に合葬した。墓の東西には松や柏、左と右には梧桐をうゑた。枝と枝とは互におほひかぶさり、葉と葉とはいりまじつた。その中に雌雄一対の飛ぶ鳥がある、鴛鴦といふ名だ、それがあひ向きになつて頭を上にもむけ、夜な夜な夜明けのころまで鳴きつづけてゐる。途ゆく人は足をとめて鳴き声に耳をかたむける、やもめをんななどは起きあがつてそのあたりをさまよふ。おことわりするが、後の世の人人よ、「よめ」いぢめからこんなことになつたことに氣をつけて、どうかこのことをお忘れにならぬやうに）
が、搜神記における

宿昔之間……音声感人
の部分、并に、変文（賦）における

道東生於桂樹……還我本鄉

の部分に及ぼした影響のことである。そして、変文（賦）は、その影響下にあることが明らかで、このことは、文学史的な韓朋物語の成立に直接関わる、大きな問題を孕んでおり、変文（賦）の生成を考える上で、看過し難い事実となっている。残念ながら、変文（賦）に対する、本格的な注解作業は、未だに見ることが叶わない。学際学を駆使し

た、その成果が期待される所以である。

五

韓朋物語が魏文帝撰、列異伝にあったことは、先述した。諸文献を閲するに、その物語は、例えば南斉、焦度撰の稽神異苑（逸。永樂大典一四五三六所引）、唐、李冗撰の独異志中、法苑珠林二十七等にも見えるが、全て搜神記を引いたもので、搜神記が広く行われた様を窺わせている。それに対し、韓朋賦の方は、二十世紀初頭に変文の一として出現するまで、その内容は、世に知られることがなかった。しかし、前述のように日本の曾我物語や三国伝記、さらに朗詠注などの韓朋の物語は、搜神記のそれでは全く説明が付かず、変文の韓朋賦を前提とせざるを得なかった。変文と日本文学の関連について、私はかつて、父母恩重経変、目連変と例えば三国伝記八・七「父母恩徳深重事」、同九・一「目連尊者救母事」などとの関係を考察したことがあった。^③曾我物語以下のケースも、全く同じことが指摘出来る。そして、三国伝記八・七の場合は、大報父母恩重経が、九・一の場合は、目連救母経が、それぞれ説話と変文共通の典拠となっており、変文と説話とは言わば兄弟の關係にあることを結論付けた訳だが、しかし、曾我物語以下のケースにおいては、変文（韓朋賦）との共通の典拠らしき

ものの全く見出だせないことが、最大のアポリアとなって、これまで曾我物語以下と変文との関わりに関しては、殆ど手を出すことが出来なかった。さて、韓朋物語をめぐる、最近の研究成果には誠に目覚ましいものがあって、その研究環境は、これまでと較べ、一変してしまった観がある。ここで、韓朋物語——特に変文（韓朋賦）の伝播をめぐる、近時の極めて重要な成果を一つ、紹介しておきたい。それは、陶敏、陶紅雨氏が二〇〇五年に著わされた、「《北戸録》崔龜図注所引《韓朋賦》殘文考論」という論文のことである。^④（以下、両陶論文と略称する）。両陶論文の業績を一言で表わすなら、四庫全書本北戸録の注の中に引用される、韓朋賦の殘篇を発見されたことである。北戸録とは、嶺南（五嶺〈衡山等〉の南、広東、広西省）に滞在した、晩唐の段公路撰に掛る、同地方における珍貴な産物のことを述べて紹介した、三（一）巻の書物のことである。^⑤北戸という言葉の意味は、地軸が傾いているため、北半球にあつては普通、南から差す陽光が、北回帰線（北緯23度27分）を過ぎた地方にあつては、陽が北から差すので、北側に窓（戸）を設ける意、即ち、嶺南を言う、面白い言葉である。北戸録には同時代人の崔龜図が注を付しており、その学識から、彼も嶺南にいたものと思われる。さて、両陶論文が指摘したのは、段公路が北戸録三の相思子蔓条に記

士、姓韓名朋。故娶賢良妻。成公索之女、名曰貞夫。具賢具聖云云。又、三日三夜、始得擴空。不見韓朋貞夫、唯見石子一双。鬱鬱葱蔥、一青一白。宋王怪之、分張其双。青石埋於道西、白石埋於道東。道東生桂樹、道西生梧桐。上枝相連、下枝相通。枝枝相交、葉葉相蒙。下有清流之水、斷道不闕。葉落、兩兩成双。從明至暮、悲鳴啾啾。宋闕

是何樹。梁伯對曰、此是韓朋貞闕

曰、誰能解之。梁伯答曰、臣能闕 其氣、心

中合中、是恩愛、下有闕

王妬伐、遣踐殺之、

血流滂闕

鴛鴦。同心異體、頭白身黃。高闕

一毛落地、七赤有強。使者捉闕

驟

往、獻于宋王。宋王將弘、其闕

廻頭、語左右同、

与朕占相。梁伯對闕

輝輝、鬱鬱蒼蒼、唯有項上、少許

無光。將毛重弘、致其殺傷。空中有言曰、不是鴛鴦舞媚毛、

此是韓朋報冤刀

驚くべきことに、上掲の崔龜図注所引無名詩集の内容は、ほぼ変文（賦）そのものと断じて良いものである。そのことをここで少し検討してみよう。さて、表一は、その無名詩集の内容と変文（賦）の密接な関連を、具体的に示したものである（——線部）。まず変文（賦）の物語の流れから、無名詩集の所掲本文は、a、b、cの三つに分けて

捉えることが出来る。そのa、b、c両者間の具体的な対応を——線で示してみた。——線部は、両者の直接的な対応、……線部は、間接的（意味的）対応を表わしている。無名詩集と変文（賦）とが同じものらしいことは、例えば両者の冒頭のaを見ると、

a 昔有賢士、姓韓名朋。故娶賢良妻。成公索之女、名

曰貞夫。具賢具聖云云（無名詩集）。

（公案）

a 昔有賢士、姓韓名朋……故娶賢妻、成功索女、始年

十七、名曰貞夫。已賢至聖（変文（賦））

の如く、全く同文と言って良い程、よく似た物語の書き出しをしていることが分かる。無名詩集のb

b 三日三夜

については、それと同じ、変文（賦）のb「三日三夜」の句が三回出て来ている、その三つの内のどれでも当てられよう。さて、そのいずれに当てるにしても無名詩集のbの前後には、極めて大幅な省略が施されており、次のcは、変文（賦）においては、大団円の部分へと入ってしまっている。最後に、両者のcを示せば、次の通りである。

c 始得擴空。不見韓朋貞夫、唯見石子一双。鬱鬱葱蔥、

一青一白。宋王怪之、分張其双。青石埋於道西、白石

表一 無名詩集（崔龜圖注所引）と変文（賦）

無名詩集

無名詩集又云、昔有賢士、姓韓名朋。故娶賢良妻。成公索之女、名曰貞夫。具賢具聖云云。又三日三夜、始得壙空。不見韓朋貞夫、唯見石子一双。鬱鬱葱葱、一青一白。宋王怪之、分張其双。青石埋於道西、白石埋於道東。道東生桂樹、道西生梧桐。上枝相連、下枝相通。枝枝相交、葉葉相蒙。下有清流之水、斷道不（闕）葉落、兩兩成双。從明至暮、悲鳴嚶嚶。宋（闕）

（闕）是何樹。梁伯對曰、此是韓朋貞（闕）

（闕）曰、誰能解之。梁伯答曰、臣能（闕）

（闕）其氣、心中合中、是恩愛、下有（闕）

（闕）王妬伐、遣踐殺之。血流滂（闕）

（闕）鴛鴦、同心異体、頭白身黃。高（闕）

（闕）一毛落地、七赤有強。使者捉（闕）

（闕）驟往、獻于宋王。宋王將弘、其（闕）

（闕）廻頭、語左右司、与朕占相。（闕）

（闕）輝輝、鬱鬱蒼蒼、唯有（闕）

項上、少許無光。將毛重弘、致其殺傷。空中

有言曰、不是鴛鴦舞媚毛、此是韓朋報冤刀

変文（賦）

昔有賢士、姓韓名朋、少小孤單、遭喪遂失其父、獨養老母。謹身行孝、用身為主意遠仕。憶母独注。故娶賢妻、成功索女、始年十七、名曰貞夫。已賢至聖、明顯絕華、刑容竊窈、天下更無。雖是女人身、明解經書、凡所造作、皆今天符……
三日三夜……
三日三夜……
三日三夜……

即遣使者、走報宋王。王聞此語、甚大曠怒、床頭取劍、殺臣四五。飛輪來走、百官集聚。天下大雨、水流壙中、難可得取。梁百諫王曰、只有万死、無有一生。宋王即遣人揜之。不見貞夫、唯得兩石、一青一白。宋王觀之、青石埋於道東、白石埋於道西。道東生於桂樹、道西生於梧桐。枝枝相連、葉葉相籠、根下相連、下有流泉、絕道不通。宋（王）出遊見之、問曰、此是何樹。梁伯對曰、此是韓朋（之樹）。誰能解之。梁伯對曰、臣能（解之）。枝枝相當是其意、葉葉相籠（是其恩、根下相連是）其氣、下有（流泉是其淚。宋）王即遣人誅伐之。三日三夜、血流注（注。二札落水、變成双）鴛鴦、拳翅高（飛、還我本鄉。唯有）一毛羽、甚好端正。宋王得之、遂即磨弘其（身、大好光彩）。唯有項上未好、即將磨弘項上、其頭即落。生奪庶人之妻、枉殺賢良。未至三年、宋国滅亡。梁伯父子、配在辺疆。行善獲福、行惡得殃

埋於道東。道東生桂樹、道西生梧桐。上枝相連、下枝相通。枝枝相交、葉葉相蒙。下有清流之水、斷道不

(一) 葉落、兩兩成双。從明至暮、悲鳴嚙嚙。宋

(二) 是何樹。梁伯對曰、此是韓朋貞

(三) 曰、誰能解之。梁伯答曰、臣能

(四) 其氣、心中合中、是恩愛下有

(五) 王妬伐、遣踐殺之。血流滂

(六) 鴛鴦。同心異體、頭白身黃。高

(七) 一毛落地、七赤有強。使者捉

(八) 往、獻于宋王。宋王將弘、其

(九) 語左右司、与朕占相。梁伯對

(一〇) 蒼蒼、唯有項上、少許無光。將毛重弘、致其殺傷。空

(一一) 中有言曰、不是鴛鴦舞媚毛、此是韓朋報冤刀(無名詩集)

(一二) 天下大雨、水流曠中、難可得取。梁百諫王曰、只有

(一三) 万死、無有一生。宋王即遣人捨之。不見貞夫、唯得兩

(一四) 石、一青一白。宋王觀之、青石埋於道東、白石埋於道

(一五) 西。道東生於桂樹、道西生於梧桐。枝枝相當、葉葉相

(一六) 籠、根下相連、下有流泉、絕道不

(一七) 見之、問曰、此是何樹。梁伯對曰、此是韓朋

(一八) 樹。誰能解之。梁伯對曰、臣能

(一九) 其意、葉葉相籠。是其恩、(根下相連是)其氣、下有

(一) 流泉是其淚。宋王即遣人誅伐之。三日三夜、血流

(二) 汪。二札落水、變成双。鴛鴦、拳翅高

(三) 本鄉。唯有。一毛羽、甚好端正。宋王得之、遂即磨弘

(四) 其(身、大好光彩)。唯有項上未好、即將磨弘項上、

(五) 其頭即落。生奪庶人之妻、枉殺賢良。未至三年、宋國

(六) 滅亡。梁伯父子、配在辺疆。行善獲福、行惡得殃。

(七) 互いに写本同士のことでもあり、一致しない言い回しも目

(八) 立つが、一方、一字一句違わぬ表現が一、二に留まらず、

(九) 無名詩集所掲本文と変文(賦)との関係の深さを、具体的

(一〇) に確認することが出来る。ところで、無名詩集上掲の

(一一) 部分には、(一)で示した十箇所及以上、本文の欠落が認

(一二) められる(四庫全書本では、小字の闕と表記されている。

(一三) それらに1—10の通し番号を付した)。欠字は、二—七字

(一四) の間で、概ね六字のことが多い(2、3、4、6、7、8)。

(一五) 今回その欠落部分と変文(賦)とを、具体的に比較対照し

(一六) てみて、驚くべきことに、現行無名詩集に見える十箇所の

(一七) 欠落は、変文(賦)を使うことにより、八箇所までそれを

(一八) 補うことが出来ることに気付いた。今、私によるその復元

(一九) 例を(一)内に示せば、次の通りである(変文(賦)本文

(二〇) による。(一)は、私補)。

1 絶道不(通) 葉落

2 宋(王出遊見之問曰此)是何樹

3 此是韓朋貞（夫）之樹（宋王問）曰誰能解之

4 臣能（解之根下相連是）其氣

5 下有（流泉是其淚宋）王妬伐

6 血流滂（滂）一札落水變成双（鴛鴦）

7 高（飛還我本鄉唯有）一毛落地

9 宋王將私其（身大好光彩）

無名詩集の欠落が変文（賦）によってかく補い得る事實は、その所引の韓朋物語が即ち、現行の変文（賦）であつたことを、強力に示すものである。崔龜図は、北戸録三の相思子蔓の注に無名詩集を引く他、また、その鶴子草の注にもそれを引いているが（鶴子（草）は、鸞草のこと）、崔龜図のみならず、段公路自身も、北戸録三香皮紙の本文中に、無名詩集を引用している（香皮紙も、広東地方特産の紙の名）。このことは、無名詩集の内容が中国南方地方の物産に詳しかったことを示唆しており、ここで、中国西辺から出土した現行の変文（賦）が当時、まだ開かれて間もない中国南方地方である、広東周辺でも既に行われていたことに、改めて注目すべきである。韓朋の物語が南方でも人気を博していたことは、段公路自身が相思子蔓の記述に搜神記を引用していたように、晩唐の劉恂撰嶺表録異中、韓朋鳥の記述にやはり、搜神記を引用していることや、就中、ヒーローの名をもつ韓朋鳥という鳥が、そこに

韓朋鳥者、乃鸞鷺之類。此鳥每双飛、泛溪浦。水禽中鸞鷺鴛鴦鵲鵲、嶺北皆有之。惟韓朋鳥未之見也

と説明されている如く、南方特産の鳥であることも、その例証と出来よう。ともあれ、唐代に韓朋の物語が南方でも盛んに行われ、変文（賦）も伝わっていたことは先述、貞女峽に纏わるその物語も併せ、なお今後追究されるべき物語の伝播、受容をめぐる、重要な課題であることを、改めて指摘しておきたい。

例えば無名詩集などを媒介とし、敦煌から広東地方にまで至る、変文（賦）の流伝は、変文を中心とする中国俗文学に対する、従来の見方を一変させるに足る、衝撃的な事実である。変文は、決して敦煌地方に限定して行われたものではない。その事實はまた、日本文学と変文との関係についても、強く再考を促すであろう。ここで一つ、変文（賦）と日本文学に関し、仮説を提示しておきたい。それは、例えば朗詠注などの韓朋物語が、例えば無名詩集等を通じ、典拠としての変文（賦）に接した可能性である。古代の日本へは、今日散逸して見ることの叶わない、数多の漢籍が将来されていた。例えば九世紀に撰ばれた、藤原佐世の日本国見在書目録卅九別集家には、

・無名師々十

・無名々々十

・無名々十八^(集)

などが記載され、さらに通憲入道蔵書目録には

・無名抄一帙

等が見えている。変文(賦)の日本への伝来をめぐっては、様々な形態が想定されるのだが、例えば早くに曾我物語の原拠として変文(賦)を指摘された早川光三郎氏の説などは、強ち的外れではなかった訳である。

例えば曾我物語の韓朋物語の大団円には、鴛鴦が登場する。このことは、変文(賦)や搜神記でも変わりがなく、鴛鴦こそは、韓朋物語を象徴する鳥と言って良いだろう。外ならぬ剣羽(思羽)を有する鳥が、鴛鴦に外ならなかった。今般韓朋の物語を考察する機会を得、色々と調べている時に、鴛鴦には思い懸けず大きな問題が含まれていることに気付いた。そこで、本題の画像を扱うに先立ち、聊かそのことに触れておきたい。

鴛鴦については、先に海道記の鴛鴦の剣羽のことを述べた際、例えばその新大系の脚注に、「剣羽」は鴛鴦の雄の両側にある銀杏の葉の形をした羽。思い羽」と解されていたことを想起しよう。鴛鴦は、日本では、おし、ないし、おしどりと呼ばれ、古く紀歌謡に、

山川に鴛鴦^{おし}二つ居て偶^{たぐい}よく(耶麻鵝播爾烏志賦挖都威

底陀虞毗預俱(日本書紀二十五、大化五年三月))

とか、万葉集四五一一に、

鴛鴦^{おし}の住む君がこの山^{しま}斎今日見れば(乎之能須牟伎美

我許乃之麻家布美礼婆)

とか、また、同二四九一に、

鴛鴦^{おしどり}の惜しき我が身は(乎之杼里能乎之伎安我未波)

などと詠まれる有名な鳥である。さて、この鳥のことは、例えば日本国語大辞典第二版「おしどり」の項に、

ガンカモ科の水鳥。全長約四五センチメートル。雄は美しく、背に思羽^{おもいは}と呼ばれるイチヨウの葉のような形の羽がある。雌は全体に地味な色で、背部は暗褐色。雄も夏には雌とほとんど同じ色になる。川や湖水などに群をなしてすみ、夏は深山の木のはら穴などに巢をつくって産卵する。シベリア東南部、中国、日本などに分布する。おん。おし。えんおう。学名は *Aix galericulata*

などであるから(後掲図六の下図参照)、先の海道記の説明も強ちに誤っているのではない。私が仰天してしまったのは、参考文献の一つとして、青木正児氏の名著、『中華名物考』(昭和34(一九五九)年)を読んだ時のことである。その名物零拾(2)「鴛鴦と鶺鴒」に目を通し、一瞬愕然となった。青木氏の言う所によると、所謂鴛鴦^{えんおう}がおし(ど

り)ではなかったからである。氏による「鴛鴦と鵞鵒」の全文を示せば、次の通りである。

学生の頃、或時休暇で下関の家に帰省して見ると、庭の小池にカモともつかぬ、ヲシドリともつかぬ、見馴れぬ水鳥が一つがひ浮んでゐた。近隣の人が朝鮮から持ち帰つて、贈つてくれた物で、本名は知れないが、くれた人はテウセンガモ(朝鮮鴨)と呼んでゐたとのことである。カモよりも綺麗で、愛すべきものであつた。池が狭い上に風土に合はず、飼ひ方もよく分らないので、間もなく死んだらしく、次の休暇に帰省した折は、もう居なかつた。其後何かの機会に漢字で、「鴛鴦」と書く鳥は日本で謂ふところのヲシドリではなく、ヲシドリは『鵞鵒』に相当するといふことを知つた。思ひ出して見ると、昔我家の小池に飼つた謂はゆるテウセンガモが、どうも漢名『鴛鴦』に当るものであつたらしい。宋の羅願の「爾雅翼」巻十七・鴛鴦の条の要旨に謂ふ、

鴛鴦は蓋し鳧の属である。其の大きさは鳧ほどで、其毛の地色は杏黄色、頭に白く長い毛を戴き、之を尾まで垂れてゐる。尾と翅とは皆黒い。現今婦人が閨房の飾りとする鴛鴦の、黄赤五彩にして、首に纓(長い毛)の有るのは、あれは鵞鵒なのだ。

然し是も亦鴛鴦の類で、毛色に紫が多い。李白の詩に『七十ノ紫鴛鴦、双双亭幽二戯ル』と謂ふのは鵞鵒である。

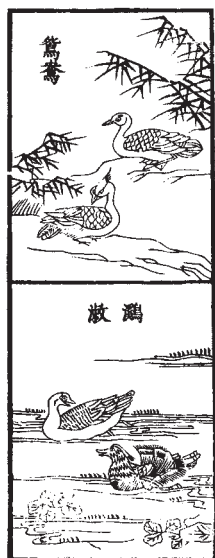
明の李時珍の「本草綱目」巻四十七・鴛鴦及び鵞鵒の條の要旨に謂ふ、

鴛鴦は鳧の類である。大きさは小さい鴨ほどで、其毛の地色は杏黄色にして文彩が有り、赤い頭に翠の鬣、黒い翅に黒い尾、紅い掌。頭に白く長い毛があり、之を尾まで垂れてゐる。○鵞鵒は其の形は鴛鴦よりも大きくして、毛色に紫が多い。故に之を紫鴛鴦と謂ふ。毛に五彩有り、首に纓有り、尾に船の舵のやうな形をした毛が有る。

是等に拠ると、我国で謂ふ所のヲシドリが鵞鵒であることは間違ひなく、其の船舵の如き毛こそ、我国でヲシドリの『劍羽』もしくは『思羽』と名づくる所のものである。鴛鴦には是が無く、全体としてオシドリほど美しくない。天明年間、岡元鳳の「毛詩品物図考」に曰ふ『日本には鴛鴦を産せず、時に海舶して来る者が有る』と、昔、人が朝鮮から持ち帰つて、我家の小池に浮べてくれたのは、まぎれもなく鴛鴦であつたと思はれる

図六は、明、清の陳淏子撰秘伝花鏡(単に花鏡とも)四に

図六 鴛鴦（上）と鵞鵌（下）。秘伝花鏡六



掲げられる鴛鴦と鵞鵌図を示したもので、当図は、青木氏が上掲文中の挿絵とされたものである。

さて、青木氏自身が若い頃、鴛鴦を実見された体験を踏まえ、鴛鴦をめぐって指摘された要点は、

漢字で「鴛鴦」と書く鳥は日本で謂ふところのヲシドリではなく、ヲシドリは『鵞鵌』^{ケイセキ}に相当する

ということである（鵞は、通常チヨクと発音するが、セキの音もある）。氏がその考証に使われたのが、爾雅翼と本草綱目の二点の書物であった。そして、氏は、その二書により前言を確認した後、次のように結論付けられたのである。

是等に拠ると、我国で謂ふ所のヲシドリが鵞鵌であることは間違ひなく、其の船の船舵の如き毛（本草綱目）こそ、我国でヲシドリの『剣羽』もしくは『思

羽』と名づくる所のものである。鴛鴦には是が無く、全体としてオシドリ「鵞鵌」ほど美しくない。

次いで、次のように付言されたことも、極めて重要である。天明年間（一七八一—一八九）、岡元鳳の「毛詩品物図考」に曰ふ「日本には鴛鴦を産せず、時に海舶して来る者が有る」と

そして、結びとして、「昔、人が朝鮮から持ち帰つて、我家の小池に浮べてくれたのは、まぎれもなく鴛鴦であつたと思はれる」と付け加えられたのである。青木氏による考証を名物学と言うが、その論証は、首尾が整っていて、付け入る隙が殆どない。

そして、氏の指摘に従うならば、我々が鴛鴦と呼んでいる鳥は、鴛鴦ではなく、実は鵞鵌と言う鳥のことになる。そもそも日本には、鴛鴦はおらず通常、鴛鴦の姿を目にする機会はなかつた筈だ（岡元鳳の毛詩品物図考〈天明五（一七八五）年刊〉四鳥部「鴛鴦于飛」に、「倭中不産鴛鴦。時有三海舶来者」とある）。しかし、例えば上代人がおし（どり）を見たことがなかつたなどとは、一寸考え難い。すると、おし（どり）を鴛鴦として説明する、従来の理解はどうなってしまうのだろうか。さらに例えば剣羽（思羽）を鴛鴦の羽と捉え所謂、銀杏羽をそれに当てる解釈は、果して正しいと言えるのであろうか。

六

青木正児氏の指摘は、驚くべき内容のもので、私の考察の進め方に、おし（どり）の語史の検討の方向を、強く示唆するものとなっている。そこで、おし（どり）と鴛鴦の関わりを振り返ってみるに、さらに驚くべきことに、青木氏と全く同じことを指摘している人物が、もう一人いた。考証学者の狩谷棧斎である。狩谷棧斎（一七七五—一八三五）には、今日なおその価値が高く評価される著作、箋注和名類聚抄があつて、その巻七「鴛鴦」の箋注は、青木氏と同内容の指摘を含むことに加え、古代日本における、おし（どり）の語史取りわけ、その概念の形成史に、深刻な問題が横たわっていたことを明らかにしていた。そこで、次に狩谷棧斎の箋注和名類聚抄を取り上げ、簡単な注解を試みながら、棧斎の指摘を紹介したく思うが、それに先立って前述、青木氏の提唱される、名物学の内容を点綴しておきたい。というのも、名物学という学問は、棧斎の方法とも深い関わりを持ち、例えば後掲、箋注の注解に対し、そこに登場する数多の書物を体系付け、剩えそれらの略解題としての役割を果たすことから、私達の作業の方向、目的を整然と照らし出してくれるからである。さて、まず青木氏は、名物学という学問を、白井光太郎氏の「本草学論

考」を引いて、次のように定義された。^⑧

名物学と云ふのは物の名と実物とを対照して調べる、歴史とかいろ／＼の書物に出て居る所の禽獸草木其外物品の名実を弁明する、此の学問が矢張必要であります。書物などにいろ／＼の品物が書いてあつても、実物が何う云ふものであると云ふことが分らなくては、真に書物が分つたのではない。名物学と云ふのは昔も必要であつたが、今も必要であると思ふ（3頁）

そして、氏は、名物学の起源を、「訓詁学の一部」として、一体不可分の密接な関係を保ちつゝ、発生して来たものと考へられる」（5頁）と言われ、現存最古の訓詁の書として、爾雅十九篇を上げ後漢、劉熙撰の釈名八卷を以つて、名物学が独立したとする。しかし、釈名の系統は、その後断絶し、爾雅の系統と、詩經の訓詁学から分離独立したものの系統とが、名物学の本幹を成しつつ、その發達を促したと言ふ。そして、後者について、

而して「爾雅」も「詩經」の訓詁を主として出發した学であるから、名物学の根源は「詩經」の名物研究に在つたと謂へるであらう。では何故に「詩經」の名物研究が重要視せられたかと云ふに、其れは孔子の詩教に本づく。即ち「論語」陽貨篇に孔子が詩を学ぶの益を七箇条挙げた最後的一条に『多識^ル於鳥獸草木之

名^ナ』と有り、詩には多くの動植物の名が詠みこまれてゐるから、詩を学ぶことによつて、其等を識るの利益が有ると教へたのである。是れを以て後世特に詩の名物を研究した著書が少からず編せらるゝに至り、因つて之を『多識之学』と謂ふ。まづ其の先頭に立つたのは三国時代（三世紀の前期）呉の陸璣の「毛詩草木鳥獸虫魚疏」である（13頁）

と説明された。そこで、「名物学の根源は「詩經」の名物研究に在つた」（13頁）と言われていることに注意したい。詩經の小雅には、「鴛鴦」があるからである。氏は、「純粹な名物学は此に始まる」（13頁）とされる。さて、当系統の最後に、「天明年間、岡元鳳の「毛詩品物図考」七巻が上げられているが、この書物は前掲、「鴛鴦と鸕鷀」の文中において、「日本には鴛鴦を産せず」（268頁）と、重要な証言をしていた書物に外ならない。氏はまた、前者の爾雅の系統に関し、宋代における「専ら名物を研究した二つの名著」（15頁）を上げられる。一つは、陸佃撰埤雅二十巻だが、

其の次は南宋の初期、羅願の「爾雅翼」三十二巻で、自序によれば孝宗の淳熙元年（一一七四）に完成したと云ふ。類を分つこと六門、積草・積木・積鳥・積獸・積虫・積魚である。此書は考拠精博なること陸氏

の「埤雅」の上に在り、且つ主として形状を明らかにすること詳らかであるから、已に訓詁学の範圍を脱して名物学の域に達してゐると謂へるであらう。而も經学との關係を保つて猶ほ經を明らかに意が有り、自ら本草学とは性格を異にしてゐるのである（15頁）

と述べられる。この書物も、前掲「鴛鴦と鸕鷀」の中で、卷十七鴛鴦の条の要旨が引かれていたものであり後述、楳嶽も引用する所となるのである。このようにして独立した名物学のその後をめぐり、青木氏は、「名物学の展開」と題する一節を設けて、その展開を以下の甲—己の六つの方面に分ち、順次説明を加えられた。

(甲) 礼学（方面）

(丁) 種樹

(乙) 格古

(戊) 物産

(丙) 本草

(己) 類書

まず(甲)礼学は、周礼、儀礼、礼記の三礼について、「其中に服飾・器用・飲食・宮室等の名を多く含んでをり、其等の解説」（17頁）をすることと説く。続く(乙)格古とは、「古器物を鑑賞弁別することで、器物の性状を講究する点」（17頁）をポイントとする。三番目の(丙)本草は、いわば「薬物学で、動植物鉱物に互つて其の名が甚だ多い。其等の薬効を研究することが究極の目的であるが、其の性状をも識別研究する」（17頁）点が名物学と関連付けられる。

次の(丁)種樹は、「園芸学であり、其の作物の性状を究むること」(17頁)、(戊)物産は、「諸国の産物を研究記録すること」(17頁)に、名物学との関連が説かれている。最後の(己)類書に関しては、「広く万般の物品事象に関する古来の文献を類別編集し、以て研究者の索引の便に供するものであるから、其中に名物に関するものが多く、且つ中には名物を主として編せられた類書も有るから、斯学資料の一大淵藪と謂へる」(17、18頁)と捉えられている。氏は、上記の名物学の展開を祖述された後、主として清代に入り、それが考証学に合流、帰着する経緯を説明されるが、割愛に従い、さらに上記、展開における、幾つかの具体相に立ち入りたい。その理由は、例えば後に取り上げる源順(九一一—九八三)の和名類聚抄は、私など日本文学の立場からすれば、国語史研究上不可欠の、漢和体の古辞書と捉えるのが一般だが、青木氏は、上掲(己)類書の末尾に、「因みに本朝に於ても平安朝中期に現れた源順の『和名類聚鈔』二十巻の如きは、漢名に和名を当つるを主眼とした言語学的類書であるが、多くの漢籍を引用して物の性状をも明らかにすることに力めてゐるから、類聚的名物学の域に達するものと謂へよう」(24頁)とされていることに、驚きを禁じ得なかった。和名類聚抄も、中国学の一分野である名物学の立場から、かく明確に規定出来るということは、極めて

興味深く且つ、注意すべきことである。当然、それを注釈する校勘の方法も、考証的名物学に根差したものとなる筈である。さらに青木氏の「鴛鴦と鶺鴒」との関わりで言えば、先に図六として掲げた明、清の陳淏子撰秘伝花鏡などは、(丁)種樹における、非常に貴重な園芸書に外ならず、早く昭和十八(一九四三)年という時点において、当時それを邦訳した杉本行夫氏の訳本に、氏は、序文を寄せられていた。(秘伝花鏡「訳本の序」)。かくして図六は、氏がかねてより名物学的関心を寄せられていた、書物からの引用であつたことが、改めて了解されるのである。また、(戊)物産に述べられた、氏による次の説明も、看過し難いものである。

之〔晋、嵇含撰南方草木状三卷〕に次いで唐の段公路の「北戸録」三巻も著者が広州に在りし時、其地の風土産物を記したものである。唐の劉恂の「嶺表録異」三巻も同様広東地方の産物を録したものである。広東は中央と風土を異にして珍しい物産が多いので、此種の記録を留むる者が後世まで続出してゐる(23頁)

北戸録に段公路が相思子蔓を記録し(その注を施した崔龜図所引の無名詩集に、変文(賦)が引かれていた)、嶺表録異に劉恂が韓朋鳥を記録したのも(劉恂は、搜神記を引いている)、そもそも広東地方特産の植物、鳥を名物学的

に記録したものに外ならない。その辺りから既に、私達は一面、唐代における名物理学の成果を追尋して来たとも言える訳である。最後に、(丙)本草の項目を引いておきたい。箋注において、掖斎が引用する本草書は、証類本草、嘉祐本草などであり、それらについては、注解中で各系統の流れと共に、出来るだけ具体的に説明すべく努めたが、以下は、本草学というものの一般的な概念及び、その歴史に關し、基本となる知識を私達に与えてくれるものである。

(丙) 本草方面　本草は薬物学にして動植鉱物の学を兼ねてゐる。此の学は周代已に著書が有つたらしく、秦の始皇の時、丞相李斯が天下の書籍の流通を禁止せんことを建議した上書を史記列伝に載せたるによれば、『医藥・卜筮・種樹』の書は此の限りに非ずとしてゐる。然し「漢書」芸文志に本草の書は一つも載せてなく、「隋書」經籍志に至つて多数著録されてゐる。其の最も古いのは「神農本草」八卷で、編者は詳らかでないが、恐らく後漢末の張仲景や華佗の説を記録したものだらうと謂はれ、其の名を明らかに記してゐるのは後漢末の蔡邕の本草、華佗の弟子呉普の本草が最も古い。此学はやはり此頃から盛んになつて来たものらしい。其後、梁の陶弘景が斯学に精しく、「本草經集註」七卷を著したが、散佚して伝はらない。唐代にも

蘇恭・陳藏器・李珣などに著書が有つたが皆伝はらず、現存するのは宋代の編著で、唐慎微の「經史証類大觀本草」三十一卷、同人の「重修政和經史証類備用本草」三十卷、寇宗奭の「図經衍義本草」四十二卷があり、降つて明の万曆十八年(西紀一五九〇)に完成した李時珍の「本草綱目」五十二卷を以て斯学の集大成とする。本草学は薬性を研究する前提として其の名物学的研究を必須としてゐる。従つてまた名物学者に取つては貴重な宝庫である。ところで吾々日本人に取つて研究上先づ出くはす障壁は動植物の漢名が和名の何に当るか云ふことである。そこで吾々は我が先賢のお蔭を蒙らねばならぬ。其の主なるものは平安朝時代、深江輔仁の「本草和名」と丹波康頼の「本草和名伝鈔」である。降つて江戸時代、貝原益軒の「大和本草」二十卷、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」四十八卷は薬性よりも動植物学的方面の研究を主としてをり、本草名物学とも謂ふべきである

引き続き、箋注和名類聚抄七羽族部鳥名の「鴛鴦」を読んでみたい。その本文を示せば、次の通りである(大字が和名抄本文、中字がその原注で、小字が掖斎による箋注に当たる。箋注が底本とするのは、十卷本だが、本条にあつ

ては、二十卷本との間に、異同は認められない。

崔豹古今注云、「鴛鴦二冤鴛二音、乎之。三漢語抄二云、「鴛鴦其音溪勅」。

○下総本有「和名二字」。

本草和名、「鴛鴦、和名乎之。乎之、又見孝徳紀野中

川原史満歌。下総本有「楊氏二字」。呉都賦注云、「鴛鴦、

水鳥也。色黄赤有「斑文」。

按証類本草引「嘉祐本草」、鴛鴦鴛鴦並載。又李時珍曰、「鴛鴦、其形大三于鴛鴦、

而多レ紫。亦好並遊。故謂二之紫鴛鴦一也」。

是鴛鴦鴛鴦不レ同可レ見也。本草和名以「鴛鴦」為二乎之一、漢語抄以「

鴛鴦」為二乎之一。二説不レ同。源君混引為「一条」非レ是。

按爾雅翼、「鴛鴦、其質杏黄色。頭戴二白長毛一、垂レ之

至レ尾、尾翅皆黑。今婦人閨房中、飾以「鴛鴦黄赤五采

者」有レ纓者皆鴛鴦耳。然溪鴻亦鴛鴦之類、其色多レ紫」。

嘉祐本草云、「鴛鴦五色。尾有レ毛如「船舵」。小三於鴨二」。

今乎之其色多レ紫、有レ羽如「船舵」。謂二之思羽一。無三頭

長毛至レ尾者。依レ之乎之非「鴛鴦」、以充「鴛鴦」為レ允。

雌雄未二嘗相離一、人得二其一則其一思而死一。故名「匹鳥」也」。

○伊勢本無「下其字」。原書鳥獸

条作「則一思而至レ死」。太平御覽引作「則一者思死」。並無二其字一。与「伊勢本」合。原書名作「曰。太平御覽作「謂之」二字」。

注

一、和名抄の本文である。晋、崔豹撰古今注中鳥獸四に、「鴛鴦……雌雄未嘗相離。人得其一則一思而至死、故曰正鳥」（増訂漢魏叢書）とある。正、匹（和名抄）は、本来別字だが、音ヒツ、共に、ひきと訓じられ、同字の如くに扱われる。

二、和名抄の原注である（○まで。○の下からが狩谷棧斎による箋注となる）。従つて、漢語抄は、源順の引用したものである。

三、漢語抄（二十卷本「楊氏抄」）は、楊氏漢語抄（桑家漢語抄）とも呼ばれ、かつて楊梅頭直が寛平（八八九―八九七）頃に撰んだものとされてきたが、現在では、楊胡史真身撰、成立はさらに早く養老（七一三―七二四）頃のものとしてゐる（後述）。十巻のものが数点現存するが、極めて簡略なもので、鴛鴦の条は、今本中に残されていない。和名抄における楊氏漢語抄の他の引用例から考へて、こゝは、

・鵜鵜 (「乎之」 其音溪勅……)

の如くであったものと推定される。

四、本草和名は、輔仁本草とも言い、深根輔仁が延喜(九〇一—九二三)頃、勅命により撰んだ、漢和対照の本草書、二卷。唐の新修本草二十卷(逸)に基づき、上巻にその卷十三木中まで、下巻に卷十四木下以下を収める。本草和名下巻十五分の獸禽に、「鴛鴦……和名乎之」とある。また、「乎之、又見孝德紀野中川原史満歌」と言うのは、紀二十五孝德天皇大化五年三月の、「於是、野中川原史満、進而奉^レ歌。々曰、耶麻鵜播爾、烏志賦陀都威底、陀虞毗預虞、陀虞陞屢伊慕乎、多例柯威爾鷄武。^{一其}是^二に、野中川原史満、進みて歌を奉る。歌い曰わく、山川に鴛鴦^{おし}二つ居て偶^{たぐ}よく偶^{たぐ}へる妹を誰^いか率^せにけむ^其二」を差す。

五、文選五左思「呉都賦」(鵜鵜) 李善注に、「鵜鵜水鳥也。色黄赤有斑文」とある。

六、証類本草、嘉祐本草を理解するには、中国における南北朝時代以降の本草書の流れを押さえておかなければならぬ。幸い岡西為人氏による好著『本草概説』が備わるので以下、岡西氏の書により、南北朝以降のその流れを簡単に纏めておく。中国における本草学は、陶弘景が齊梁間、神農本草經三卷を定め、神農本草經集注七卷を作って、本草書を基礎付けたことから始まる。唐に入ると、蘇敬らが

顕慶二(六五七)年、高宗の勅を奉じて新修本草二十卷が撰ばれ、本經三六七、別錄三六九、新附一一四の計八五〇種の本草が集成される(逸)。後の本草書の多くは、当書に基づくものである。その後、開元二十七(七三九)年に陳藏器が本草拾遺十卷を撰し(逸)、新修本草に洩れた本草を集成している(後述、唐慎微によれば、四八八種とされているが、それはその一部に過ぎない)。北宋になると、開宝六(九七三)年に太祖の勅を奉じ劉翰らが開宝新詳定本草二十卷、翌年開宝七(九七四)年には、それを訂正した開宝重定本草二十卷が作られた(共に逸)。後者は、新修本草の旧葉八五〇種に、新薬一三四種を加えたもので、計九八四種の本草を収めている。掖斎の箋注に言う嘉祐本草とは、正式には嘉祐補注神農本草と言ひ、二十卷、掌禹錫以下が嘉祐二(一〇五七)年に仁宗の詔を受けて、嘉祐六(一〇六一)年に完成させたものである(逸)。補注と呼ばれる所以は、当書が開宝重定本草の本文をそのまま継承したためで、その九八四種に、一〇〇種を新增して、計一〇八四を収めるに到っている。さて、その新增一〇〇種には二類があつて、唐以後の八三種を新補と呼び、当代の一七種を新定と呼んで区別を設けている。そして、小稿が問題としている鴛鴦、鵜鵜は、その新增分中にあり、特に新補八十三種中にあることに注意すべきである。つまり、

鴛鴦、鵲鵲という鳥は、嘉祐本草以前の本草書には取り上げられたことがなく、この嘉祐本草に到って、始めて取り入れられた鳥なのである。このことが、数ある本草の中で、掖斎により嘉祐本に言及される理由である。さて、その嘉祐本草の後に作られたのが、証類本草である。証類本草は、正しくは、經史証類本草と言ひ、幾つかの系統が存在した。証類本草の嚆矢をなしたのは、紹聖四（一〇九七）年以降に唐慎微の編んだ經史証類備急本草三十一卷であるが、未完成のまま、刊行されることなく散逸してしまつたらしい。幸いなことに、その全容はそのまま、後の大觀本草、政和本草に引き継がれたので（この三本が所謂証類本草に当たる）、今日においても、その内容を窺うことが可能となっている。証類本草の内、現存するのが大觀本草と政和本草である。まず大觀本草は、正式には經史証類大觀本草と言ひ、三十一卷、大觀二（一一〇八）年に艾晟が唐慎微のそれに若干の増補を加えて刊行された。証類本草の最初の刊本として高く評価されるものである。もう一つの政和本草というのは、正しくは政和新修經史証類備用本草と言ひ、三十卷、徽宗の勅によつて曹孝忠らが前者を校正し、政和六（一一一六）年に刊行された。因みに、明、李時珍の本草綱目は、南宋淳祐九（一二四九）年にモンゴルの張存恵（晦明軒）が刊行した、重修政和經史証類備用本草三十卷

に基づくものである。これらの事柄を理解する上で、岡西氏の作成された主要本草系統表（54—55頁間）並びに、証類本草版本の系統表（146—147頁間）の二表がとても分かり易い。参考までに図七—一、二として二表を掲げておく。^④掖斎の用いた証類本草については、未勘で、大方の教示を乞いたいが、確かに大觀、政和の両本草共に卷十九禽部の「一十三種新補」の内、末尾の十二、十三番目に鴛鴦と鵲鵲の記事が並んでおり、それぞれの文末に、「新補」の小字注記があつて、嘉祐本草の新補分に間違ひないことを示している（その本文は、注十一に掲げた）。二鳥は当然、別鳥である。

七、明、李時珍撰本草綱目四十七禽部「鵲鵲」積名に、「其形大于鴛鴦、而色多紫、亦好並遊、故謂之紫鴛鴦也」とある。因みに、「鵲鵲」の前の項目が「鴛鴦」で、やはり二鳥が別鳥として扱われている。

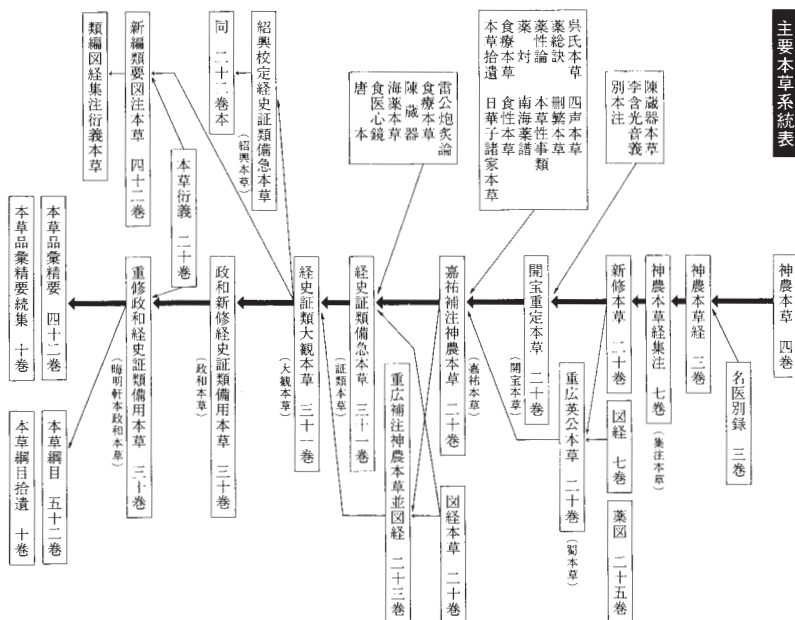
八、注四参照。

九、注三参照。

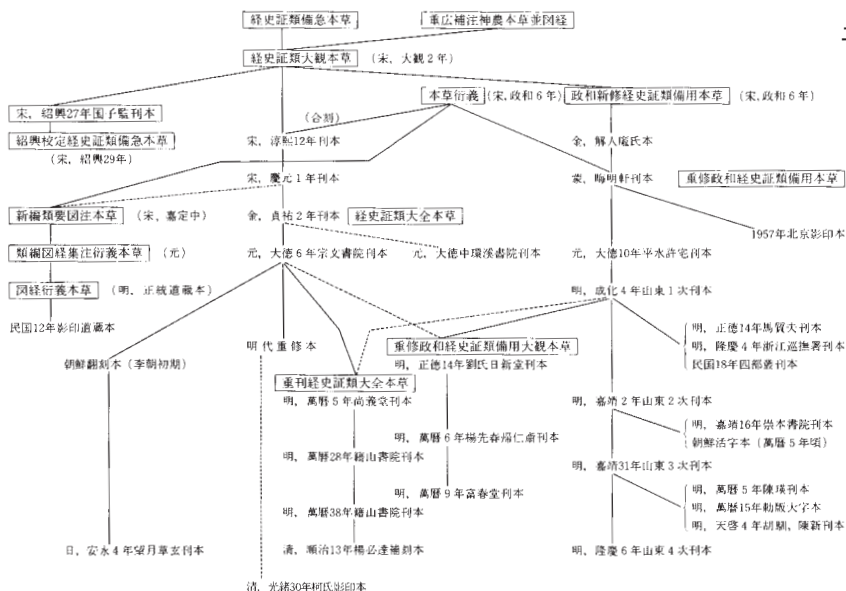
一〇、宋、羅願撰爾雅翼十七積鳥五「鴛鴦」に、「〔鴛鴦〕其質杏黃色。頭戴白長毛、垂之至尾、尾与翅皆黑。今婦人閨房中、飾以鴛鴦黃赤五彩、首有纓者、乃是鵲鵲耳。然鵲鵲亦鴛鴦之類、其色多紫」とある。

一一、嘉祐本草に、「鵲鵲五色。尾有毛如船舵。小於鴨」

主要本草系統表



証類本草版本の系統表



(柯氏本大観本草十九禽部一十三種新補「溪鴈」所引。政和本草も同文)とある。因みに、嘉祐本草は、続けて呉、沈瑩撰臨海異物志(太平御覧九二五所引)を引くが、これは、鴈鴈について記す、最古の文献である。なお鴈鴈に関しては宋、謝惠連(康熙字典を始めとして屢々、兄の謝靈雲と誤られる)、の鴈鴈賦(漢魏六朝百三家集七十一等所引)の名が知られている。

一二、原書は、単行された古今注を差す。注一参照。古今注は、太平御覧にも引用され、その九二五には、「古今注曰、鴛鴦……雌雄未嘗相離。人得其一則一者相思死。故謂之正鳥」とある。校斎の言う、a 和名抄、b 古今注、c 太平御覧所引古今注三者間の異同を併せ示せば、次のようになる。

- a 人得其一則其_レ一思而死、故名_レ匹鳥也
- b 人得其一則一思而至死、故曰_レ正鳥
- c 人得其一則一者相思死、故謂_レ之正鳥

七

上記箋注の注解を参考にして、校斎の言う所を確認したい。校斎の見解は、「呉都賦注云」以下(注番号で言え、その五以下)に集約される。それを前半と後半(注一〇以下)に分けて、私訳してみた。まずその前半の私訳を示せ

ば、次の通りである。

文選、左思の呉都賦の注に、「鴈鴈は、水鳥である。色は、黄色及び、赤色で、斑斑がある」とあり、証類本草は、嘉祐本草を引いて、鴛鴦と鴈鴈とを並べて記載している。李時珍は、「鴈鴈は、その体付きが鴛鴦より大きくて、紫色の部分が多い。また、雌雄並んで遊泳する。だから、鴈鴈を紫鴛鴦とも言うのである」と述べている。これらからは皆、鴛鴦と鴈鴈とは同じ鳥ではないことを、見て取らなければならない。本草和名は、鴛鴦をおし(どり)とし、一方、楊氏漢語抄では、鴈鴈をおし(どり)としていて、それら二説では、(鴛鴦、鴈鴈という、異なる鳥の漢語が当てられているから、おし(どり)に対して)同じ鳥のことが言われている訳ではない。順は、(当てられた鳥の異なる)二つの説を混同して同時に引いて、(鴛鴦—おし(どり)—という)一条の記事にしてしまっている。それは誤りである

校斎は、ここでまず呉都賦注から、鴈鴈の説明を上げ、次いで、嘉祐本草(証類本草所引)が鴛鴦と鴈鴈との二鳥を併記していることに言及し、さらに李時珍の鴈鴈についての説明を引いて(そこには鴈鴈の異称としての「紫鴛鴦」も上げられる)、鴛鴦と鴈鴈とが同じ鳥ではなく、別鳥で

あることを結論付けている。換言すれば、おし（どり）に
対し、中国において漢名で表わされる候補の鳥としては、
鴛鴦と鵠鵠との二鳥があったということである。続いて、
椋斎は、本草和名と楊氏漢語抄とに言及するが、後者の楊
氏漢語抄の方は、順が原注（注二以下に当たる）の中で、
「〔本文に言う鴛鴦（古今注）の〕音は、冤、鵠という二
音に発音し、（日本で言う）^{おし}乎之のことである。楊氏漢語
抄には、（おしのことを）鵠鵠と言っている。その音は、
溪勅と発音する」として、引用しているものである。それ
に對し、前者の本草和名の方は、椋斎が順の本文と原注に
おいて、「鴛鴦……^{おし}乎之」としていることに對し、箋注と
してその根拠を示したものであることに注意しなければな
らない。そして、椋斎は、我が国のおし（どり）に對して、
漢名で鴛鴦と綴る鳥を当てる、本草和名の說と、鵠鵠と綴
る鳥を当てる、楊氏漢語抄の說との二說が、順当時、併存
していたことを再確認した上で、順が和名類聚抄羽族部に
おける条文の立て方において、「鴛鴦。崔豹古今注云……
鴛鴦〔原注〕^{おし}乎之。漢語抄云、鵠鵠」の如く、楊氏漢語抄
を引きながらも、おし（どり）に對し、漢名を鴛鴦とする
結論を導くことになった項目化、そして、その結論自体を
も、「非是（誤りだ）」と断じているのである。続く後半
（注一〇以下）の私訳を示せば、次の通りである。

考えてみると、爾雅翼に、「鴛鴦は、生まれ付き琥珀
色で、頭に白く長い毛があり、それが尾にまで垂れ及
んでいる。尾の羽は全て黒い。今、女性が寢室の装飾
としている、鴛鴦の黄赤（青白黒）五色で（頭に）冠
の紐のような毛があるものは皆、鵠鵠に外ならないの
だ。しかし、鵠鵠もまた、鴛鴦の仲間なのであって、
ただその羽毛の色には紫が多い」とあり、嘉祐本草は、
「鵠鵠は、五色（黄青赤白黒）の鳥である。尾には独
特の毛羽があつて、船の柁のような形をしており、鴨
より小さい」と言っている。今言うおし（乎之）は、
その体色に紫が多く、独特の羽があつて船の柁のよう
で、この羽のことを思羽と言うのである。（そのおし
（乎之）には、爾雅翼が鴛鴦について指摘している）
頭の（白く）長い毛が尾にまで及ぶ事実もない。だか
ら、おし（どり）は、鴛鴦ではない。それには鵠鵠を
当てるのが正しい

上述、箋注の前半は、言わば順の和名抄の「鴛鴦」条の記
述に對する、椋斎による点検と批判に当たる部分で、箋注
が本来、目的としていた所である。それに対し、「按」と
書き出される後半は、椋斎自身の考えを披瀝した部分と
なっている。そして、前半における椋斎の判断、結論が、
「源君……非是（順は……誤っている）」というものだっ

たから、後半の桧扇自身による考え方が、その分、重要なものとなっている。さて、爾雅翼（この書物は、青木氏も引用されている）と嘉祐本草を引いた桧扇は、前半で確認した鴛鴦、鵠鵠が別鳥であるという事実の指摘から、さらに一步進んで、おし（どり）——鵠鵠（——鴛鴦ではない）説を打ち出すに至っている。その根拠とされたのが、爾雅翼に言う、（一）鴛鴦の体色（「杏黄色（琥珀色）」）、（二）頭に白く長い毛羽があつて、尾に至っていること、（三）女性が寢室に飾る、鴛鴦五色の、頭に纓（冠紐）の如き毛羽を戴く鳥は、実は鵠鵠なのだ、という指摘、（四）鵠鵠の体色には紫色が多いことの四点と、嘉祐本草に言う、（五）鵠鵠の五色の体色、（六）その尾に、船の舵形の羽があることの二点の計六点であり（一）と（五）は、対照関係。（五）はまた、（三）とも関わる）、桧扇は、その六点に対して、「今乎之（私達が現在、おし（どり）としている鳥）」の特徴として、

A その体色には紫が多い（四）（及び、（一））

B 船舵の形をした羽がある（六）

C 頭には、尾にまで及ぶ長い毛がない（二）

という三点を上げて、その三点と爾雅翼、嘉祐本草における六点との照合を通じ、Aと（四）、Bと（六）、Cと（二）との一致から、おし（どり）は、鵠鵠であるとの桧扇説を提示するに至っている。

このように箋注における、桧扇の考証の過程を具体的に辿てみると、桧扇が考証学、名物学的な手続きを忠実に踏んだ上で、慎重に自説を提示していることがよく分かる。そして、その慎重で手堅い分、反論することは極めて難しい。そして、このことは、青木氏の「鴛鴦と鵠鵠」についても言えることであつて、私は、全面的に青木説、桧扇説に賛同したいと思う。そして、桧扇説や青木説が、おし（どり）に関して、鵠鵠のことである（鴛鴦ではない）と述べていることが正しいとするならば、私達の、おし（どり）——鴛鴦という理解は、全面的に誤っていたことになる。それは、大変なことだ、まずは様々な注釈類に、訂正を促すことになるだろう。加えて、国語辞典類、取り分け最新の、現在利用されている辞書類には、おし（どり）の項目の書き換えが直ちに要請されることになる。

とは言え、青木説と桧扇説に対しては、一、二、付言しておきたいことがある。まず両説に言及される、鴛鴦の剣羽（思羽）の件である。実は当件こそが拙稿と直結し、おし（どり）そのものへの問題へと導く、動機となったものだからである。まず青木氏は、

明の李時珍の「本草綱目」卷四十七・鴛鴦及び鵠鵠の条の要旨に謂ふ、

……○鵠鵠は……尾に船の舵のやうな形をした毛

が有る。

是等に拠ると、我国で謂ふ所のヲシドリが鶺鴒であることは間違ひなく、其の船の柁の如き毛こそ、我国でヲシドリの『劍羽』もしくは『思羽』と名づくる所のものである。鶺鴒には是が無く、全体としてオシドリほど美しくない(267、268頁)

と言われ、また、核斎は、

嘉祐本草云、「鶺鴒五色、尾有_レ毛如_二船柁_一。小_二於鴨_一。今乎之其色多_レ紫。有_レ羽如_二船柁_一。謂_二之思羽_一」

としている所である。私が不審に思うのは、日本語としての、おし(どり)——鶺鴒の説は、認めるとしても、そのことを以って、両説共、所謂鶺鴒の劍羽(思羽)を、直ちに鶺鴒の銀杏葉と断じていることである。鶺鴒の劍羽という語句については長い間、意味が理解されないまま、現在に至っている状況に関しては、先に述べた通りだが、その問題点は、鶺鴒の劍羽の語句には、韓朋の物語が含まれていたが、その物語が忘れ去られてしまい、その結果、鶺鴒の劍羽は、意味不明の語句化してしまったということだった。例えば匠材集の「鶺鴒のつるきは むかし思羽と云羽にて、王の首を切事有」を通じて、当句の意味を復元する時(韓朋物語が背後にあることは、続く「漢白靈の事なり」に明示されている)、私が訝しく思うのは、鶺鴒(鶺鴒)の劍

羽にその銀杏羽を当てた場合、例えばそれで果して人の首が落とせるものか、どうかということである。銀杏葉の実寸は、その軸を垂直に立てたとして、幅が十二・五糎、高さが九糎しかない(『原寸大写真圖鑑』増補改訂版による)。このような銀杏の葉型の、十糎前後の刃で、どうやったら人の首を切り落とせるものか、私には想像も付かない。第一、銀杏葉の形そのものが、劍の形とは、余りに掛け離れているだろう。如何に物語がフィクションであるとしても、それでは余りに不自然である。ここで、韓朋物語に記された所謂、鶺鴒の劍羽のことを確認したい。幸いなことに私達は、それを知るための、二点の一級資料を手に入れている。変文(賦)におけるそれと、無名詩集(北戸録崔龜図注所引)におけるそれを併せ示せば、次の通りである。

・変文(賦)

二枚の札がそこに落ちると、それがつがいの鶺鴒に変わり、翼を広げると高々と飛び上がり、二人の故郷へと帰って行きました。ただ一本の美しい羽毛を残して、宋王はこれを手に取りそっと全身を撫でますと、大いに光彩を放ちました。ただ、首の上は撫でていなかったで、すぐにその毛で撫でると、その頭はすぐに落ちてしまいました。(二札落水、変成双鶺鴒、挙翅高

飛、還我本郷。唯有一毛羽、甚好端正。宋王得之、遂即磨拭其身、大好光彩。唯有項上未好、即將磨拭項上、其頭即落」

・無名詩集

(……二札落水、變成) 鴛鴦。同心異体、頭白身黃。

高(飛、還我本郷。唯有)一毛落地、七亦有強。使者捉(闕) 驟往、献于宋王。宋王将払、其

(身大好光彩) 廻頭、語左右司、与朕占相。梁伯对

(闕) 輝輝、鬱鬱蒼蒼、唯有項上、少許無光。

将毛重払、致其殺傷。空中有言曰、不是鴛鴦舞媚毛、

此是韓朋報冤刀

右によれば所謂、鴛鴦の劍羽は、まず一本の羽であり(「一毛羽」(変文(賦)、「一毛」(無名詩集)、無名詩集末尾には、それが刀の形をしていたことが、明記されている(「此是韓朋報冤刀」)。特に無名詩集に、

……變成) 鴛鴦。同心異体、頭白身黃

とある傍線部は、極めて重要で、その特徴は、例えば青木氏、掖斎両者が共に引く爾雅翼の、

鴛鴦、其實杏黃色、頭戴「白長毛」(箋注所引)

とよく一致し、その鳥は、鶺鴒などではなく、鴛鴦そのものに外ならないことが、そこに明示されているからである。さらに興味深いのが、これも無名詩集にある

……唯有一毛落地、七亦有強

の——線部だろう。赤は、音通による尺の宛字で、「七尺有強」が正しく、それは、一毛即ち、所謂鴛鴦の劍羽の長さを言うものである。例えば唐代の一尺は、三〇・一糎だから(漢代以前なら、二二・五糎)、その長さは一・二米強となり、人の首を落とすに十分な長さを持っている。これが物語上の所謂、鴛鴦の劍羽の、目下知り得る実体である。それに対し、銀杏羽は、高さを取れば、一二分の一におお足りず所謂、鴛鴦の劍羽に銀杏羽を当てることの不自然さが、よく分かるのである。鴛鴦の劍羽が刀の形をしているということから(無名詩集)、その羽は、文字通り空気を切る風切羽——特に初列風切羽という(鳥の翼には、外側から初列風切、次列風切、三列風切の区別がある)、恰もプロペラのように推力を得る働きをする、風切羽を差すのではないかと思われる(東昭氏『生物の飛行その精緻なメカニズムを探る』)。因みに、銀杏羽の方は、翼の三列風切に当たり、こちらは、揚力を増す働きをするという、違いがある。さて、鴛鴦の劍羽は、飽くまで鴛鴦の劍羽なのであって、決して鶺鴒の銀杏羽なのではない。鴛鴦の劍羽の語句が韓朋物語を伴っている限り、それが鶺鴒の銀杏羽と摩り替わることは、まずなかったであらう。鴛鴦の劍羽という語句は、非常に古い言葉である。しかし、この言

葉が何時頃出来たのかは判然とせず、拾遺集以前としからない。^④ 順以前、即ち、おし（どり）——鴛鴦説を取る、本草和名以前かも知れず、或いは、同説による順の和名抄以降とも考えられる。そして、校斎が明らかにした、驚くべき事実は、順当時における、おし（どり）なる和語に対し、漢語の鵲鵲を当てる説（楊氏漢語抄）と、鴛鴦を当てる説（本草和名）との二説が、併存していた語史的状况である。そのような状況の中で、順が和名抄において、おし（どり）を鴛鴦に当てた所から、我が国の語史上に繰り広げられる、おし（どり）についての混乱が始まった。鴛鴦の剣羽に関して言えば、日本にはいない筈の鳥でありながら、実在する鵲鵲が、おし（どり）、即ち、鴛鴦と誤解され、その鵲鵲の銀杏羽が、鴛鴦の剣羽である、と捉えられることとなった筋道である。^⑤ 従って、もし順が、おし（どり）に正しく鵲鵲を当てていたなら、おし（どり）は、即ち、鵲鵲なのであり、それが鴛鴦と誤解される、後世の混乱は、生じなかったものと思われる。さて、鴛鴦の剣羽の語句は、拾遺集に見えるから、十一世紀初頭には既に知られていただろう。和名抄より七、八十年程遅れるが、当該歌は、よみ人しらず歌だから、その差は、さらに縮まる可能性が高い。一方、日本国見在書目録所載の「無名集十」^⑥「無名集十八」^⑦などが、もし問題の無名詩集に当たるとし

たら、その伝来は、和名抄より五、六十年早いから、順当時には物語が日本で既に知られていたことになる。それらは、全て憶測に過ぎないが、現状における、おし（どり）また、鴛鴦の剣羽（思羽）と鴛鴦、鵲鵲をめぐる、収拾の付かない混乱については、私なりの整理を加えてみようと思うが、その前にもう一点、校斎説に関し、付け加えておくべき問題が残されている。それが楊氏漢語抄の作者の問題である。

源順が参照、引用した楊氏漢語抄の概略については、箋注の注解、注二に概略を述べた通りだが、本書の作者に関しては、現存する十巻本の本奥書に、

楊梅亜槐漢語抄十卷、自官庫潜求之外、〔以〕東山左府之御本校合畢。尤当家の重書也。

文明元年乙丑十二月下浣日

〔一条〕桃華老叟兼良書之

右十巻之秘書、楊梅大納言顕直卿之漢語抄也。今度之秘録撰集之砌、依勅写之畢。

天正六年乙亥三月下旬

清給事中洞霞老人書之

（早大本（一）京大本）

と、文明元（一四六九）年的一条兼良（一四〇二—一四八二）及び、天正六（一五七八）年の清原国賢（一五四四—

一六一四。木田章義氏教示）との、二つのそれがあつて、共に撰者を楊梅大納言顕直（未詳）と記していた。ところが、そのことを早くに否定、訂正されていたのが、滝川政次郎氏である。滝川氏は、昭和六（一九三一）年刊行の新註皇学叢書2に収める、令集解五職員令主殿寮の、「頭一人。掌供御輿輦」の「輿輦」の集解に、

……古記云、輿無^レ輪也。輦有^レ輪也。漢語（抄）云、輿、母知許之。腰輿、多許之

と記される、「漢語（抄）」に対して、

〔漢語抄〕和名類聚抄に引ける楊氏漢語抄ならむ。これ現在知られる漢和字書の最も古きものにして、奈良時代の撰なり。選者明かならざれど聖武天皇の天平二年詔して弟子二人を取りて漢語を伝習せしめられたる楊胡史真身ならむか。この書今亡んで伝らず

と注され（山頁）、楊氏漢語抄の作者に、楊胡史真身を比定されていた。しかし、このことはその後、長く気付かれないまま推移したらしく、半世紀以上を経過して、昭和五十九（一九八四）年に、その滝川説を顕彰されたのが、太田晶二郎氏である。太田氏は、「尊経閣三卷本色葉字類抄解説」の「甲、日本辞書史一」を次の如く書き起こされたのである（注略）。

『大宝令』の注釈書である謂はゆる『古記』に、明か

に日本出来の辞書『漢語抄』を使用してゐる。堅実に日本辞（字）書史を捫洄して、此所に到著する。そして、其の年時は、奈良時代しかも精しく天平十年代と明知できることを、貴重とする。古記の成立年時が考定されてゐるのである。のちの『倭名類聚抄』から知る所によれば、漢語抄にも幾種かが有つたが、多分編者名であらう。人名を冠した『楊氏漢語抄』が一番よいものであつたやうである。此の「楊氏」を楊胡史真身に充てたのは、滝川政次郎博士の卓見かと思ふが、真身は一面法律家であつて養老律令の撰修にも与つた、楊氏漢語抄（逸文）が、『垂拱留司格』という法曹の専家でなくては知らぬやうな本を引証してゐるのは、此の説を強化するものではなからうか。そして、倭名抄序は、楊氏漢語抄について、「養老所^レ伝」と云ふ。或る国語学者は、「漢語抄を養老頃の古書とするのは疑はしい」としたけれども、既に天平の確証を得、楊氏が真身であるとなれば、楊氏漢語抄の養老年間に溯ることも、別に疑ふ理由が無い。さて又、楊胡（「楊侯」なども書く）といふ氏は漢系の帰化族であつて〔新撰姓氏録〕、その為であらう、真身は、天平二年、官、「取^レ弟子二人、令^レ習^{漢語}」ことを奏して、許された（続日本紀十、天平二（七三〇）年三月二十七

日条)。これは、官奏の上文に《諸蕃域異二、風俗同

ジカラズ、若シ訳語無クバ、以テ事ヲ通ハスコト難シ。》と述べてゐるから、「漢語」は、いまのことばで言へば、畢竟、《支那語》・《中国語》であること明らかにして、これは、まさに、外国語教授を施したものである。そして、此の、《中国語》である「漢語」を教授した楊胡真身が編したと考へられる『漢語抄』の「漢語」も同様にさうであるべく――《中国語》であるべく――それは又、楊氏等漢語抄(逸文)には、彼土の口語的・俗語的の語が往々に見られることによつて裏書きされる。(例せば、名詞に「子」を接尾語としたもの、「鈴子」・「籠子」・「暈子」・「胡鷲子」・「春鳥子」の如き。又、イタチに対して挙げた「鼠狼」も俗語。)すなはち、漢語抄は、現代ならば、「漢和辞典」と云ふ類ではなく、「中国語辞典」・「支那語辞典」であると理解することが肝要で、日本の能動的辞(字)書史―辞(字)書の作製の方の歴史―が、外国―唐との―交渉活潑であつた時代の外国語辞典から發してゐることは、銘記しなくてはならない

太田氏の文章に付け加えることは、何もないのだが、ただ楊胡氏の祖について、新撰姓氏錄二十一、左京諸蕃漢に、楊侯忌寸。出自_レ隨煬帝之後達率楊侯阿子王_↑也。

楊胡史。同_レ上

同二十九、和泉國諸蕃漢に、

楊侯_{公イ母イ}忌寸同祖。達率楊公阿了王之後也(群書類従本)

とあつて(太田氏の注一二にも引かれる)、隨煬帝(治六〇四―六一七年)の子孫、楊侯阿子王_↑から出たと言うが、楊胡史の祖に関しては、日本書紀二十二、推古十(六〇二)年十月に、百濟の僧觀勒が來朝し、曆本、天文地理書、遁甲方術書を奉つた時に、書生三、四人を選んで、勸勒にそれらを學習させたとある、その書生の一人として、

楊胡史祖玉陳習_{なまゐる}「曆法」

とあつて、六〇二年には、隨煬帝が未だ即位していないので(父文帝(楊堅)の治)、例えば旧大系の注では、「年代が合わないから、後に隋の煬帝の子孫と称したのであらう」とされている(179頁)。また、達率については、栗田寛氏が、「達率は百濟の官十六等の其第二にあたれり」(『新撰姓氏錄考証』十八、一一一〇頁)とされている通りで、周書四十九列伝四一異域上の百濟伝に、「百濟者……官有十六品、左平五人、一品、達率三十人、二品、恩率三品……」と見え、三国史記二十四百濟本紀二に、「(古爾王)二十七年春正月又置達率……達率二品」とあるのによれば、百濟の古爾王(治二三四―二八五年)の二十七

(二六〇)年に置かれた官らしい。なお続日本紀一、文武四(七〇〇)年八月二十日条には、僧通徳を還俗させ、陽侯史の姓、久爾曾の名を賜ったことが見えている。

かく見ると、楊氏漢語抄の撰者、楊胡史真身の属する楊胡史の一族は、太田氏の指摘されたように、「漢系の帰化族」であつたことは間違ひなく、中国系朝鮮人と捉えられようか。さて、このようなことを踏まえて、源順が和名抄の鴛鴦、おし(どり)の項目を執筆しようとする時、順の手許に、

鶯鶯 [乎之] 其音溪勅……

と記された楊氏漢語抄と、

鴛鴦……和名乎之

と記された本草和名との、二つの書物があつたと考えられることは、頗る興味深い事実である(鶯鶯特有の銀杏羽のことを記す、嘉祐本草は、未だ存在しない)。渡来人の一族であり、大陸のことをよく知る楊胡史真身であれば、中国の鴛鴦と鶯鶯と呼ばれる二鳥のことも、実際に知っていた可能性が高い。そして、鴛鴦が日本にはいないことも、日本人がおし(どり)と呼ぶ鳥が、鶯鶯に外ならないことも、おそらく承知していたものと思われる。そして、順の前にある二つの本は、おし(どり)に対する漢語をめぐって、鋭く対立した筈である。何故なら、一つのおし(ど

り)を、一方は、鶯鶯であると言い、一方は、鴛鴦であると言っていて、その二鳥は、別の鳥であつたから――。

その結果、順は、選択を迫られ、おし(どり)に鶯鶯を当てるのか、鴛鴦を当てるのかを決定しなければならなかつた。熟慮の末、順が下した結論は、おし(どり)には、鴛鴦(本草和名)を当て、しかしながら、和名抄の原注の形で、異説の鶯鶯(楊氏漢語抄)の方も残し、両論併記とも取り得る余地を残すことにした――箋注を通じ、そのような順の執筆状況が思い浮かぶのである。さらにそこへ、楊氏漢語抄の撰者をめぐり、滝川氏の発見と、太田氏によるその顕彰とを重ね合わせると、順の和名抄の鴛鴦条が物語っていたことは、古代日本において、和語おし(どり)をめぐり、漢語鶯鶯と鴛鴦との二つが闘ぎ合っていた状況と、それに対して順が下した判断という、言わば日本語形成史の一齣を、奇しくも私達が垣間見る機会を、手にしていたことがよく分かる。そして、その結末が、これまで見て来た混乱だった訳である。

日本語史――取り分けその表記史の黎明期、おし(どり)に対し、どのような漢語を当てるべきかは、手探り状態だつたに違ひない。雌雄仲のいい、おし(どり)は、早くから日本にもいて、上代には既に、和語のおし(どり)の語(音)が定着していた。さて、漢語の候補としては、有

力な鴛鴦と鵑鵒の二つに絞られ、中で、中国でもその名の高かった鴛鴦がまず、おし（どり）に当てられた可能性が、極めて高かったと思われる。後にそれを代表することとなる文献が、本草和名である（箋注の注解、注四参照）。しかし、それが正しいのかどうか、分かる日本人はいなかっただろう。そもそも鴛鴦は、日本には生息しなかったが、それが知られたのは、随分後世の話であり、例えば順以前、そんなことが知られたとはとても思えない。しかし、例外があつて、大陸の名物の実際に詳しい人物も皆無という訳でもなく、我が国の古代文化の形成に深く寄与した外国人——渡来人の存在を考える必要がある。例えば楊胡史真身などがそれに当たり、彼が著した楊氏漢語抄という書物は、彼の大陸の名物にも通じ、日本語の内情を熟知する、渡来人の作った、とても珍しい漢和辞書と捉えられるべきである。彼は、実際の鴛鴦を知っており、それが日本に産しないことも、日本人のおし（どり）と呼んでいる鳥が、中国において鵑鵒とされる鳥であることも、認識していた可能性が極めて高い。であればこそ、

鵑鵒 「乎之」 其音溪勒……

という、後に校勘も是とせざるを得なかった、当時としては到底、考えられない、高いレヴェルの記述を残すことが出来たのであろう。ところが、そのことは、もはや理解さ

れなかった。和名抄に先立つて遣唐使も廃止され、大陸文化というものは、かねてほどは評価されず、国風文化の抬頭した時期である。順程の学識を以ってしても、楊氏漢語抄の当該記述の価値というものを、正當に評価することは難しかったようだ。楊氏漢語抄の凄さは、本草学の本場の中国においてさえ、鴛鴦と対比される鵑鵒の、広く認識されるのは、北宋の嘉祐六（一〇六一）年の嘉祐本草まで、俟たなければならなかった。それに対し、楊胡史真身が、おし（どり）を鵑鵒であると喝破したのは、それより三百年以上、前のことである。日本にこのような人物がいたことは、驚愕すべきことである。それから百年以上が経過して、その書物が順の前にあつた。順が何故、おし（どり）を鵑鵒としなかったのかは謎とするしかない。ともあれ、順は、楊氏漢語抄の卓説を捨て、本草和名の説を採った。おそらく当時の大勢に従つたのだろうが、後の国語史的混乱を思えば、その罪は深い。以後、鵑鵒は、類聚名義抄や色葉字類抄などに姿を留めてはいるが、文明本節用集や下学集、諸節用集類の段階になると、その姿を消してしまう。鵑鵒が再び姿を現わすのは、近世に入り、本草綱目の舶載を契機として、本草学が盛んになってからのことである。そこでは、おし（どり）——鴛鴦が誤りとされ、代わって俄に鵑鵒が注目されるようになる。それに伴い、意味不明

の鴛鴦の劍羽（思羽）という古語についても、その銀杏羽が当て嵌められた訳だが、鴛鴦の劍羽（思羽）の由来も、物語も一切考慮されることはなく、それらは「世談之誕」（本草食鑑）つまり、世間に蔓る出鱈目と切り捨てられた。考えてみればその銀杏羽説自体、良く出来た思い付きの域を出るものでもなく、それこそ「世談の誕」と返されても仕方のないものだった。その銀杏羽説は、中世には遡れない。だから、その説は、近世になってから、本草学者の誰かが言い出したものであろう。そのように得体の知れぬ説を、無批判に拾遺集以前の古語へ適用するなど、言語道断とすべきである。日本語史において、日本人がおし（どり）を正しく認識する、大きな機会が二回あった。一つが十世紀、順の和名抄の撰述時と、もう一つが、十九世紀、椋斎によるその箋注の執筆時である。残念なことに、順は、おし（どり）の表記の選択を誤ってしまったが、九百年近く経って、椋斎は、ほぼ完璧に順の誤りを訂正することが出来た。問題なのは、椋斎の後、近代の国語学者の態度である。おし（どり）をめぐる椋斎の業績というものを、彼等が一顧だにしなかったことは、現在の辞書類を繙いて見れば、直ちに判明する。彼等は、順の誤りを踏襲するに留まらず、順の誤りを放置するに任せた。だから、今の私達にも、おし（どり）の正体を、掴むことが出来ないのでは

る。誤った言葉に対し、何の措置も取らないでいることは、学問の基礎を揺るがす行為に外ならない。それは、真実から遠ざかることを意味している。その行き着く先は、真実の欠片^{かけら}すらも見当たらない、荒涼とした地平だろう。おし（どり）をめぐる誤った認識が、例えば鴛鴦の劍羽（思羽）という言葉を、一体どのような理解へと導く結果となったか、上に具体的に見た通りである。

鴛鴦と鵠鵠にめぐっては、摺芳主人（董進氏）による、「白頭偕老」輪給顔値爆表―古代鴛鴦和鵠鵠―と題する、優れた論攷がネット上に載る。

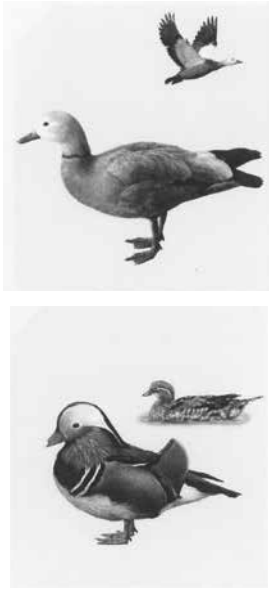
(<https://www.douban.com/note/713591566/>)。紙媒体にはしていないそうである（孫彬氏教示）。董進氏の論攷から、最古の鴛鴦図を一点、紹介しておきたい。図八は、後

漢の望都漢墓、前室東壁左下に描かれた鴛鴦図を、模図によって示したものである[®]。銀杏羽もなく、その体色等から、鵠鵠ではないことが明らかで



図八 鴛鴦図（望都漢墓、模図）

ある。また、董進氏は、古代の鴛鴦は、今の赤麻鴨（英名 Ruddy Shelduck、学名 *Tadorna ferruginea*）と推定されており、従うべきである。図九は、現代中国の赤麻鴨（上）、鴛鴦（下。英名 Mandarin Duck、学名 *Aix galericulata*）を掲げたものである（『中国鳥類図鑑』による）。図九を見ると、驚くべきことに、鴛鴦と鶺鴒の入れ替わりは、中国においても起きていることが知られるが、このことに関してはまた、機会を改めて述べることにしたい。



図九 赤麻鴨（上）、鶺鴒（下）

付記 小稿は、北京大学国際漢学研修基地による、「中国古典籍の東アジア（ベトナムを含む）における流伝・収蔵・写刻・編纂・変化及び、その文化的影響の研究」をテーマとする、東アジアにおける漢籍受容研究のシンポジウムへ提出した論文の日本語版である。当該シンポジウムは、本来今年（二〇二〇年）開催される筈であったが、新型コロナウイルス感染症の流行のため、来年（二

〇二一年）四月に延期された。なお小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

注

- ① 西川幸宏氏「韓朋賦」の性格をめぐって」（『待兼山論叢』41、平成19（二〇〇七）年12月）36―37頁
- ② その具体的な例については、拙著『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、昭和62（一九八七）年）Ⅱ・2などを参照されたい。
- ③ 早川光三郎氏「変文に繋がる日本所伝中国説話」（『東京支那学報』6、昭和35（一九六〇）年6月）
- ④ 拙著『中世説話の文学史的環境 続』（和泉書院、平成7（一九九五）年。初出平成5（一九九三）年）Ⅲ・四2
- ⑤ 朗詠注諸本の系統については、注②前掲拙著Ⅳ四参照。また、それらの本文は、伊藤正義、三木雅博との共編『和漢朗詠集古注集成』一一三（大学堂書店、平成元（一九八九）年・平成9（一九九七）年）に収められる。
- ⑥ 鈴木元氏「室町の歌学と連歌」（『新典社研究叢書107、新典社、平成9（一九九七）年』緒言Ⅱ
- ⑦ 鈴木氏注⑥前掲書11頁
- ⑧ 渡瀬淳子氏「仮名本『曾我物語』巻五「貞女が事」の典拠―韓朋賦をめぐって―」（『早稲田大学教育学部 学術研究（国語・国文学編）』56、平成20（二〇〇八）年2月）、同氏「仮名本『曾我物語』をとりまくもの―連歌・注釈・お伽草子―」（『韓憑故事の需要と変容』（同氏「室町の知的基盤と説話形成―仮名本『曾我物語』とその周辺」（勉誠出版、平成28（二〇一六）年）一部2、三部3所収。初出平成19（二〇〇七）年、平成23（二〇一〇）年）参照。また、豊田幸恵氏「鴛鴦説話―『韓朋賦』と『曾我物語』―」（『奈

良教育大学国文』17、平成6（一九九四）年3月）、和田和子氏「敦煌本『韓朋賦』と「語り」の時空」（『お茶の水女子大学中国文学会報』36、平成29（二〇一七）年4月）、同氏「韓朋説話と悲恋の表象」（『お茶の水女子大学中国文学会報』38、令和元（二〇一九）年4月）などを上げることが出来る。

⑨ 古事談抜書の本文は、池上洵一氏「島原松平文庫蔵古事談抜書の研究」（和泉書院、昭和63（一九八八）年）による。

⑩ 国会本朗詠注や玄恵抄を江注系と見、室町末から近世初期の加筆とする向きもあるが（渡瀬氏注⑧前掲書三部3注（21）及び、259頁）、従えない。そもそも朗詠江注に韓朋の物語はないし、例えば国会本等が室町末や近世初頭のものであり得ないことは、文安四（一四四七）年書写に掛る、古事談抜書が示す通りである。見聞系朗詠注に見える韓朋物語の成立は、なお室町中期を遥かに溯る。

⑪ 徳久邇文庫本女訓抄の本文は、美濃部重克、榊原千鶴氏編『女訓抄』（伝承文学資料集成17、三弥井書店、平成15（二〇〇三）年）による。

⑫ 平仮名本三国伝記の本文は、黒田彰、谷口博子編『黒田彰蔵平仮名本三国伝記』翻刻篇（幼学の研究1、幼学の会、平成29（二〇一七）年）による。

⑬ 平仮名本三国伝記については、注⑫前掲書影印篇の解題を参照されたい。

⑭ 注②前掲拙著I三2、3及び、I三1

⑮ 注②前掲拙著I三4及び、I三5

⑯ 図一は、『新装版平将門資料集付藤原純友資料』（新人物往来社、平成14（二〇〇二）年）36頁に拠る。

⑰ 裘錫圭氏「漢簡中所見韓朋故事の新資料」（『復旦学報（社会科学版）』99年3期。稲畑耕一郎氏訳「漢簡に見える韓朋故事の新資

料」（『中国文学研究』24、平成10（一九九八）年12月）

⑱ 図二は、甘肅省文物考古研究所「敦煌漢簡」（中華書局、一九九一年）上、図版伍式に拠る。なお該書を通覧するに、例えば894の「☐出三年必行須☐月以☐子……」なども、或いは、496と関わる可能性がある。

⑲ 例えば柳瀬喜代志氏は、『将門記』の表現―特に初学書・流行の漢籍所出典故をめぐって（同氏「日中古典文学論考」（汲古書院、平成11（一九九九）年）II所収。初出昭和63（一九八八）年）において、

「『搜神記』を出典と見ることにについては……現行本のそれには夫の名を「韓憑」としていて、同表記で出ていないから、直ちにそれを典拠とは認め難い……そこ（敦煌本注千字文S五四七二）では「幹朋」とその妻「貞夫」と言い……（『将門記』）「貞婦」は「貞夫」に甚だ似ているから、或いはこの一種の「千字文」注が渡来し受容されて、この「貞潔」な「婦」の話が作者に知られて来たのかと推測される（323―324頁）と指摘されるが、直ちには従えない。何故なら、変文（賦）と同様に、敦煌本注千字文のヒーローは韓朋、ヒロインは貞夫と表記されていて、将門記（敦煌漢簡）のヒーローの表記、幹朋とは一致しないからである。

⑳ この話は、吾妻鏡にも

今日（七月十三日）、入道中納言宗行過駿河国浮島原。荷負正夫一人、泣相逢于途中。黄門問之、按察卿僮僕也。昨日梟首之間、拾主君遺骨、帰洛之由答。浮生之悲非他上、弥消魂。不_レ可_レ遁_二死罪_一事者、兼以雖_レ挿_二存中_一、若出_二於虎口_一、有_二龜毛命_一乎之由、猶始持之処、同過人己定訖之間、只如_レ亡_二察_一其意、尤可_レ憐事也。休息黄瀬河宿之程、依_レ有_二筆見之

次、註付傍。

今日スクル身ヲ浮島ノ原ニテモツキノ道ヲハ聞サタメツル
於「菊河賦」書「佳句、留二万代之口遊、至「黄瀬河詠」和歌、
慰二旦之愁緒云々（国史大系）
と見えている。海道記と比較するに、

・其をみるは身の上の事なれば、魂は生きてより、さこそは消え
けめ。本より通るまじと知りながら、おのづから虎の口より
出でて亀の毛の命もやうる、と猶待たれけん心に、命は終
にと聞き定めて（海道記）

・浮生之悲非「他上」、弥消「魂」。不「可」遁「死罪」事者、兼以難
挿存中、若出「於虎口」、有「亀毛命」乎之由、猶殆待之處、同
過人已定訖之間、只如「亡」。察「其意」、尤「可」憐事也（吾妻鏡）
など、吾妻鏡は、海道記作者による地の文まで取り込んでい
るので、吾妻鏡が海道記に依拠したものである（八代国治氏『吾妻
鏡の研究』（明世堂書店、大正2（一九一三）年。修正再版、昭和
16（一九四一）年）六章、二九、129—130頁）。

②1（一）は、先坊幸子、森野茂夫氏『宝宝搜神記』（白帝社、平成
16（二〇〇四）年）による。

②2 池上海一氏校注『三国伝記』上（中世の文学6回、三弥井書店、
昭和51（一九七六）年）頭注（101頁）及び、補注四四（357頁）

②3（一）内は、荒見泰史氏「敦煌本『韓朋賦』より見た「韓朋」
故事の展開」（林雅彦氏編『総解きと伝承そして文学』（方丈堂出版、
平成28（二〇一六）年Ⅲ）所収）附録「敦煌本『韓朋賦』試訳」
（617—608頁）による。

②4 敦煌本千字文の本文は、幼学の会「上野本千字文注解」（和泉
書院、平成元（一九八九）年）17頁により、西夏本類林の本文は、
史金波、黄振華、聶鴻音氏『類林研究』（寧夏人民出版社、一九九

三年）漢訳文の通訳文（121頁）による。

②5 荒見氏注②3前掲論文627—621頁は、その五系統の各本文を横組五
列に对照、翻刻されたもので、前掲邦訳と併せ、大変な労作となっ
ている。各テキスト間における字句の異同については、是非参照
されたい。

②6 内田知也氏「隋唐小説研究」（木耳社、昭和52（一九七七）年）
二章七節185頁。なお類林については、山崎誠氏「類林」追考—中
世史漢物語の源流—（同氏「中世学問史の基底と展開」（和泉書院、
平成5（一九九三）年）Ⅲ所収。初出平成3（一九九一）年）を
参照されたい。

②7 牧野和夫氏「舶載書二種について—『物類相感志』『搜神広記』
—」（同氏「日本中世の説話・書物のネットワーク」（和泉書院、
平成21（二〇〇九）年）一附。初出平成8（一九九五）年）参照。

②8 中で、佐野誠子氏「二十卷本『搜神記』「紫玉」条の成立」（『東
京大学中国語中国文学研究室紀要』2、平成11（一九九九）年4
月）は、鳥鵲歌と紫玉歌に、「何かしら密接な関係があった」こと
を認めつつ、同じ「冒頭四句は……後続の歌を導くための役割を
果たしているように思われる」として、そのような慣用句が「あ
らかじめ流传しており」異なる二つの物語「に関わる歌が発生す
る時に用いられた」可能性を指摘された。また、荒見氏注②3前掲
論文は、変文（賦）の①を、搜神記からの転用と見做される（な
お佐野氏の論文注（13）参照）。

②9 参考までに、世説新語六惑溺5の本文を掲げておく（新釈漢文
大系78による。末尾（一）内に、その目加田誠氏による訳を添え
た）。

韓寿美容、賈充辟以為掾。充每聚會、賈女於青瑣中看、見寿、
悦之、恆懷存想、發於吟詠。後婢往寿家、具述如此、并言女

光麗。寿聞之心動、遂請婢潛修音問、及期往宿、壽蹻捷絶人、踰牆而入、家中莫知。自是充覺女盛自扞拭、說暢有異於常。後会諸吏、聞寿有奇香之氣。是外国所貢、一箸人、則歷月不歇。充託武帝唯賜己及陳騫、余家無此香、疑寿与女通。而垣牆重密、門閤急峻、何由得爾。乃託言有盜、令人修牆。使反曰、其余無異。唯東北角如有人跡、而牆高、非人所踰。充乃取女左右婢考問、即以狀對。充秘之、以女妻寿。

(韓寿は容姿が美しく、買充は彼を招いて自分の属官とした。買充が会合を開くたびに、その娘(買午)は青塗りの飾り窓ごとに、韓寿をのぞきみて、うっとりとなり、いつも思慕の情をいだいて、それを詩歌にうたった。その後、侍女が韓寿の家に行き、事情をのべ、併せてお嬢さまが輝くばかりに美しいことを話した。韓寿もこれを聞いて心が動き、そこで侍女にたのんで、こっそり手紙を届けてもらった。約束の日になると、韓寿は出かけていって一夜を共にした。韓寿は人なみはずれて身軽であり、塀をのりこえて入っても、家の者は誰も気づかなかつた。それ以後、買充は娘が盛んにおしやれをして、常になくうきうきしているのに気がついた。後に属官たちを集めたとき、韓寿の身から珍しい香氣がただよってきた。それは外国からの貢ぎ物であり、ひとたび体につくと、何か月も消えないものであった。買充は思うに、この香は、武帝(司馬炎)が、ただ自分と陳騫とにだけ賜ったもので、ほかの家にはないはずだ。韓寿と私の娘が密通しているのではなかろうか。ただ垣や塀が幾重にもあるし、大門・小門が高くそりたっており、どうして忍びこむことなどできよう。そこで泥棒が入ったということにかこつけて、人をやって塀を修繕させたところ、使いの者は帰ってきていった。「ほかの

ところには、異常はありませんが、ただ東北のすみに、人の足あとらしいものがあります。しかし、塀が高くて、とても人の越えられるものではありません。」そこで買充は、娘の侍女をつかまえてとり調べたところ、すぐに事の次第を答えた。買充はこのことを内密にしておき、娘と韓寿とを結婚させた) 容肇祖氏「敦煌本《韓朋賦》考」(《敦煌變文論文録》(上海古籍出版社、一九八二年)下所収。初出一九三五年)

③① 注②前掲拙著I三4、5

③② 陶敏、陶紅雨氏「《北戸録》崔龜圖注所引《韓朋賦》殘文考論」(《文史》二〇〇五・4(73)、二〇〇五年11月)

③③ 段公路と北戸録については、鈴木正弘氏「段公路撰『北戸録』について―唐末期の嶺南に関する博物学的著述―」(『立正史学』79、平成8(一九九六)年3月)に詳しい。

③④ 注③前掲陶論文にもその復元案が示されているが、小稿とは聊か相違する部分がある。その相違を上げれば、以下の通りである。
2 出遊の二字がない。
3 樹の下に一字分の空格を置く。

4 「解之枝枝相交是」とする。

5 涙の下に二字分の空格を置く。
6 双がない。

7 「飛遠拳還我故郷」とする。

③⑤ 8 梁伯対の次に日を補う。
参考までに、北戸録本文及び、崔龜圖注に引かれた無名詩集を、左に掲げておく。

・北戸録三香皮紙所引無名詩集

武舍之中行云、胡従何等来、艷艷毵毵五木香。

・北戸録三鶴子草崔龜圖注所引無名詩集

無名詩集、月黄星醫、娥黄發醫、皆数

③⑥ 青木正兄氏「中華名物考」(春秋社、昭和34(一九五九)年。全集8に再録)名物零拾(2)「鴛鴦と鶺鴒」

③⑦ 岡元鳳以前、朱舜水(一六〇〇—一六八二)も、同様の指摘をしていたことが、新井白石の東雅十七禽鳥「鴛鴦ヲシ」の付注に、朱舜水氏も、ヲシは鶺鴒也。此国にして鴛鴦をば見ず。本草網目に、鶺鴒形大于鴛鴦と云ひしは、誤れるなりと云ひけり。東壁「東壁は李時珍の字」が鴛鴦の註を見るに、此に云ふヲシに同じからず。蔵器本草(後述)には、形小レ鶺鴒と見えたり。舜水の節、誣ふべからず。此物の名は、上古の時は聞えず。さらば後の人、其雌雄未嘗相離の義によりて、雄雌の音をもて呼びしなるべし

と見える。また、人見必大の本朝食鑑(元禄十(一六九七)年刊)六華和異同「鴛鴦」にも、「必大按、本邦未^{スル}見^キ若^ヤ斯者、本邦自^ヘ古称^ス鴛鴦者、鶺鴒也」とある。なお東雅の本文に、

倭名鈔に、崔禹錫(崔豹の誤り。掌禹錫(嘉祐本草の撰者)と混同したのであらう)古今注を引て、鴛鴦はヲシ、雌雄未嘗相離。人得^ニ其^一、則其^一思而死。故名^ニ匹鳥^一也。漢語抄に、鶺鴒といふと註せり。陳蔵器本草に拠るに、此にいふヲシは、即鶺鴒なり(陳蔵器本草は、陳蔵器撰、本草拾遺十卷(逸)のことであるが、そこには鴛鴦、鶺鴒の項目は存在しない(箋注の注解、注六参照)。従つて、白石の誤りのように見えるが、実は李時珍の本草綱目、鶺鴒の集解が、嘉祐本草とすべき所を、「蔵器曰」と誤つて記したことが原因で(金陵本も「蔵器曰」、白石は、それをそのまま受けたに過ぎない)。楊氏が説の如し。されど唐人の詩に、紫鴛鴦と賦せし、則此物なれば、鴛鴦の字用ひむも、あしかるべきにもあらず。ヲシといふ義不^レ詳

として、和名抄を検討し、掖斎に先立つこと一世紀以上前に、掖斎と同様の結論を導いていることは、白石の見識の高さを示すものであらう。

③⑧ 青木氏注③⑥前掲書「名物学序説」3頁(以下も同じ)。

③⑨ 青木氏注③⑥前掲書「発端」「秘伝花鏡」訳本の序。

④① 岡本為人氏「本草概説」(創元社、昭和52(一九七七)年)図七一、二は、岡本氏注④①前掲書所収に拠る。

④② 内田拓哉、高田勝氏「原寸大写真図鑑羽」増補改訂版(文一総合出版、平成30(二〇一八)年)26頁のイチウ羽による。

④③ 東昭氏「生物の飛行その精緻なメカニズムを探る」(ブルーバックスB-378、講談社、昭和54(一九八三)年)六章、135頁

④④ その拾遺集における、現在の鴛鴦の剣羽の解釈も、ひどく混乱したものとなっている。拾遺集卷六325番歌、よみ人知らずの、別る、をおしとぞ思つる木はの身をよりくだく心地のみしてが、その用例歌であるが、例えば新大系における小町谷昭彦氏による「つる木は」の解釈では、次のように述べられている。

○つる木は 剣羽。「剣羽」を掛ける。「剣羽」は、鴛鴦や雉などの尾の両脇に立っている、銀杏の葉の形をした羽で、剣の先に似ているので、このように呼ぶ

小町谷氏の説明を読んで、例によって物語が踏まえられていないことは、氏に限ったことではないとしても、訝しいのは、雉にも剣羽があると言われていることである。それは氏の思い違いで、雉から採ることが出来るのは、釣に使われる毛鉤の一種、剣羽根である。それは、剣羽とも書かれるから、剣羽とよく似てはいるが、発音も違い、今問題としている剣羽とは、何も関係がない。だから雉に、「尾の両脇に立っている銀杏の葉の形をした羽」など、ある筈もなく、それが「剣の先に似ている」訳でもない。剣羽につい

ては、殆ど出鱈目と言える、このような解釈が目下、横行しているのである。毛鉤の劍羽根に関しては、開高健氏による、面白い話があるので、それを左に摘記しておく（開高健氏『釣り人語らず』〔潮文庫55、昭和60（一九八五）年〕「釣り談義 浮世問答 井伏鱒二」55頁）。

開高 毛鉤の話から始めますけども、ヤマメを釣るのに朝鮮の高麗キジの劍羽根、一羽で左右二枚しかとれないんですが、その劍羽根をヤマメの毛鉤に使うと、原爆的に釣れるというんです。それで釣道具屋が高麗キジの劍羽根を輸入し始めますと、心ある釣師はこのままでは日本のヤマメは絶滅するといつて嘆いたといひます

（校正時、小学館の日本国語大辞典「おもいは（思羽）」の項に、鴛鴦（おしどり）、孔雀、鴨、雉などの尾の両脇にある銀杏の葉の形をした羽。劍羽。おもいはね（第一版）

とあり、「つるぎは（劍羽）」の項にも、殆ど同じ記述があることを知った（今井友子氏教示）。さらに後者には、「形が劍の先に似ているところからいう」との補足があった、その用例として、拾遺集の当歌と仮名本會我物語の末尾などが上げられている（右は、第一版によるが、第二版も同じ）。これも、とんでもない話で、鴛鴦の劍羽（思羽）と毛鉤の劍羽根が完全に混同されている。孔雀、鴨、雉などの羽は、毛鉤の素材なのであって、それらは、鴛鴦の劍羽（思羽）とは、何も関係がない。また、その形は「劍の先に似ている」のではなく、刀劍そのものに似ている所から言うのである。もし小町谷氏が、それを引き写されたのであれば、責任は、小町谷氏だけにある訳ではないことを付記しておく。）

④5 校斎以前、慶長十二（一六〇七）年四月に林羅山が長崎に赴いて李時珍の本草綱目を入手、徳川家康へ献上した（徳川実紀一篇

台徳院殿御実紀五慶長十二年四月）ことに始まる、我が国近世における本草綱目と本草学の盛行の中、おし（どり）が鴛鴦ではないことに気付いた学者が、何人ものいたらしい（古事類苑、動物部九鳥二「鴛鴦」六〇六頁以下参照）。羅山自身も、おし（どり）と二鳥との関係に気付いたようで、その多識編下禽部において、「鴛鴦於志登利」「鵠鵠於保於志登利」と呼称の区別を設けているが、例えば向井元升による庖厨備用倭名本草（貞享元（一六八四）年刊）の十水禽「鴛鴦」「鵠鵠」条（元、李杲撰食物本草四禽類を引くのが珍しい）、人見必大による本朝食鑑（元禄十（一六九七）年刊）の五水禽「鴛鴦」、六華和異同「鴛鴦」条、小野蘭山による本草綱目啓蒙（享和三（一八〇三）年刊）の三十二水禽「鴛鴦」「鵠鵠」条なども、およそ校斎と同趣旨のことを述べている。その中で、小稿の問題とする鴛鴦の劍羽、思羽に言及した部分を摘記すると、

・ ○元升曰、此説ヲミレハ、今俗ニ云ヲシドリハ、鴛鴦ニアラス。今云ヲシドリハ、頭ヨリ尾ニ至ルホトノ白長毛ナシ。又、オモヒ羽ト云モノアリ。下ニ云鵠鵠、スナハチ今ノヲシトリ也。倭名抄ニ鴛鴦ト鵠鵠ト同条ニ載タリ。是ニヨリテ、鴛鴦、鵠鵠ワカチナク、俱ニヲシトリト云。後世オモヒ羽アルヲヲシトリト云テ、真ノ鴛鴦ヲシラス（庖厨備用倭名本草「鴛鴦」・鵠鵠。倭名抄ニ、鴛鴦同条ニ載テ、和名ヲ俱ニヲシト云……考本草……尾ニ毛アリテ、船柁鬣ノ如シ。○元升曰、今俗ニ云ヲシドリハ、是也。尾ノ両辺ニ毛アリ、船柁鬣ノ如シト云ハ、俗ニ云オモヒ羽也。鴛鴦ニハ此羽ナクシテ、頭ニ白長毛アリテ、長ク垂テ尾ニ至ル（同「鵠鵠」）

・ 鵠鵠形小、似鴨。毛羽有レ五采。頭有レ玄纓。頸有レ紅糸。尾前有レ小羽、如レ船柁。或如レ摺扇之半辺。俗称ニ劍羽。是擬ニ世談之誕以名乎（本朝食鑑「鴛鴦」）

・翅尾ノ間ニ、鴨脚^{イチヤク}樹葉ノ形ノ如ナル羽、左右各一アリ。茶褐色ニシテ、一辺深黒ニシテ翠光アリ。コレヲ、ヲモヒバ京ト云。

一名、イチヨウバ防州、ツルギバ^{本朝}食鑑。集解ニ、如「船舵形」ト云（本草綱目啓蒙「鵜鵜」）

などと思へ、本草綱目が広く流布、受容が深まると共に、鴛鴦の劍羽（思羽）を鵜鵜の銀杏羽と見る、共通理解の形作られてゆく様子を、垣間見ることが出来るのである。かく見ると、椋斎の箋注で述べていることが、決して目新しいことは言えず、むしろ近世の本草学の成果を、箋注に援用したに過ぎないものと捉えるべきである。但し、留意しておかなければならない点は、鵜鵜という、鴛鴦に似た別鳥があり、尾に船の舵の形をした羽（銀杏羽）があることなど、鵜鵜に始めて言及したのが、嘉祐本草（一〇五七年。逸）に外ならないことを看破し（李時珍は、それを本草拾遺（七三九年。逸）と取り違えた（注37参照）、証類本草に引かれたその逸文の本文まで突き止め、箋注にその本文を上げるに至っているのが、椋斎唯一人であることは、今更乍ら驚かされると共に、流石であると思わせる。

④6 新註皇學叢書2令集解（三浦周行、滝川政次郎氏編、内外書籍株式会社、昭和6（一九三一）年）。なお本書は、『定本令集解釈義』と改題して、同年同社から単行再刊されている。なおその注の筆者が滝川氏であることは、その巻末に付された、物集高量氏による「新註皇學叢書第二卷「令集解」の巻末に附記す」の中に、「三浦博士が標註の執筆中、中華民国に出張せらる、事となつたから、其の推薦に依つて前九州帝国大学教授滝川政次郎学士に標註の起稿を煩した」とあることよって知られる。

④7 太田晶二郎氏「尊經閣三卷本色葉字類抄解説」（太田晶二郎著作集4所収、吉川弘文館、平成4（一九九二）年。初出昭和59（一

九八四）年）。なお、和名抄所引の楊氏漢語抄について論じたものに、藏中進氏「『和名抄』所引『楊氏漢語抄』の俗語語彙」（『武庫川国文』46、平成7（一九九五）年12月）、同「『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考」（『東洋研究』145、平成14（二〇〇二）年11月）などがある。藏中氏は、前者付記において、現行十卷本は、「楊氏漢語抄」とは全く異なるもので、はるか後世のものである」とされている。

④8 図八は、『望都漢墓壁画』（中国古典芸術出版社、新華書店、一九五五年）図版九に拠る。

④9 図九は、趙欣如、卓小利、蔡益氏『中国鳥類図鑑』（山西科学技术出版社、二〇一五年）32、33頁に拠る。